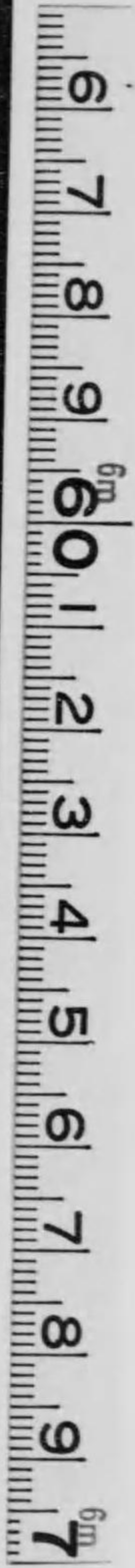


F23  
TA73



始



F23  
TA 73  
(2)



辭

傳

弋



新  
城  
文  
庫

新  
城  
文  
庫

# 水滸傳目錄

## 五編

卷之一	一
病關索大に翠屏山を鬧す	一
拚命三火をもつて祝家店を焼く	八
撲天鵬生死の書を雙修す	三
卷之二	一九
宋公明一回祝家莊を打つ	一九
一丈青單王矮虎を捉ふ	二七
宋公明兩祝家莊を打つ	三四
卷之三	三九
解珍解寶雙て獄を越ふ	三九
孫立孫新大いに牢を劫す	四五
吳學究連環の計を雙用ゆ	五三

卷之四.....六〇.....八一

宋公明三たび祝家莊を打つ.....六〇

插翅虎拳をもつて白秀英を打つ.....六六

美髯公誤て小衙内を失ふ.....七〇

李逵殷天錫を打殺す.....七七

卷之五.....八二.....九八

柴進高唐州に失陷す.....八二

戴宗智をもつて公孫勝を取る.....九一

卷之六.....九九.....一一八

李逵斧をもつて羅真人を劈る.....九九

入雲龍法を闘はしめて高廉を破る.....一〇六

黒旋風穴を探て柴進を救ふ.....一一二

卷之七.....一二九.....一三八

高太尉大に三路の兵を興す.....一二九

呼延灼連環馬を擺布す.....一二三

吳用時遷をして甲を盗しむ.....一三一

湯隆徐寧を賺し山に上らしむ.....一三五

卷之八.....一三九.....一六一

徐寧敵へて鈎鎌鎗を使しむ.....一三九

宋江大に連環馬を破る.....一四二

三山義を聚て青州を打つ.....一四四

卷之九.....一六二.....一八一

衆虎心を同して水泊に歸す.....一六二

吳用金鈴吊掛を賺す.....一七〇

宋江西岳華山を關す.....一七七

卷之十.....一八二.....二〇〇

公孫勝芒碭山に魔を降す.....一八二

晁天王曾頭市にて箭に中る.....一八九

六編

卷之一……………二〇一……二二一  
 吳用智をもつて玉麒麟を賺す……………二〇一  
 張順夜金沙灘を鬧す……………二〇八  
 卷之二……………二二二……二二九  
 冷箭を放つて燕青主を救ふ……………二二二  
 法場を劫して石秀樓を飛ぶ……………二二三  
 卷之三……………二四〇……二六〇  
 宋江が兵北京城を打つ……………二四〇  
 關勝議して梁山泊を取んとす……………二四七  
 呼延灼夜月關勝を賺す……………二五一  
 卷之四……………二六一……二八一  
 宋公明雪天に索超を擒にす……………二六一  
 托塔天王夢中に聖を顯す……………二六七  
 浪裏白跳水上に冤を報す……………二七一  
 卷之五……………二八二……三〇〇

時遷火をもつて翠雲樓を焼く……………二八二  
 吳用智を以て大名府を取る……………二八七  
 宋江馬歩三軍を賞す……………二九二  
 卷之六……………三〇一……三二四  
 關勝水火の二將を降す……………三〇一  
 宋公明夜曾頭市を打つ……………三〇八  
 盧俊義史文恭を活捉る……………三一七  
 卷之七……………三二五……三四三  
 東平府に誤て九紋龍を陥る……………三二五  
 宋公明義をもつて双鎗將を識る……………三三一  
 沒羽箭石を飛せて英雄を打つ……………三三九  
 卷之八……………三四四……三六八  
 宋公明糧を棄て壯士を擒る……………三四四  
 忠義堂の石碣に天文を受く……………三四八  
 梁山泊の英雄座次を排す……………三五五

卷之九……………三六九…三九一

柴進花を簪して禁院に入る……………三六九

李逵元夜に東京を鬧がしむ……………三七三

黒旋風高く鬼を捉ふ……………三八四

卷之十……………三九一…四一一

梁山泊雙の頭を獻す……………三九二

燕青智をもつて擎天柱を撲つ……………三九九

李逵壽張縣に喬衙に坐す……………四〇七

七編

卷之一……………四一一…四三三

活閻羅船を倒にして御酒を偷む……………四二二

黒旋風詔を扯つて欽差を罵る……………四一九

吳加亮四斗五方の旗を布く……………四二六

卷之二……………四三四…四五二

宋公明九宮八卦の陣を排ぶ……………四三四

梁山泊十面の埋伏……………四四一

卷之三……………四五二…四七三

宋公明再童貫に贏つ……………四五二

十節度議して梁山泊を取んとす……………四五七

宋公明一高太尉を敗る……………四六一

劉唐火を放て戰船を焼く……………四六六

卷之四……………四七四…四九二

宋公明兩高太尉を敗る……………四七四

張順鑿て海鰐船を漏しむ……………四八〇

宋江三高太尉を敗る……………四八九

卷之五……………四九三…五二二

燕青月夜道君に遇ふ……………四九三

戴宗計を定めて蕭讓を賺す……………五〇八

卷之六……………五二三…五三三

梁山泊に金を分て大に買市す……………五三三

宋公明夥を全うして招安を受く……………五三四

宋公明詔を奉て大遼を破る……………五三八

卷之七……………五三九

陳橋驛に涙を滴て小卒を斬る……………五三四

宋公明の兵蘇州城を打つ……………五四七

卷之八……………五五二

盧俊義大に玉田縣に戦ふ……………五五一

宋公明夜益津關を渡る……………五六二

卷之九……………五七一

吳學究智をもつて文安縣を取る……………五七一

盧俊義が兵青石峪に陥る……………五六四

卷之十……………五六八

宋公明大に幽州に戦ふ……………五六九

呼延灼力蕃將を擒にす……………五九五

八編

顔統軍陣に混天の象を列ぬ……………五九七

卷之一……………六〇九

宋公明夢に玄女の法を授る……………六〇九

宋公明陣を破り功を成す……………六一三

宿太尉恩を願て詔を降す……………六一〇

卷之二……………六二八

五臺山にて宋江參禪す……………六二八

雙林鎮に燕青故に遇ふ……………六三三

宋公明の兵黄河を渡る……………六四〇

盧俊義黑夜に敵を賺す……………六四三

卷之三……………六四七

軍威を振ふ小李廣の神箭……………六四七

蓋郡を打つ智多星が密計……………六五四

李達夢に天地を闢す.....六六一

卷之四.....六六六

宋江兵を兩路に分つ.....六六六

關勝義をもつて三將を降す.....六六九

李達が暴衆人を陥る.....六七四

宋公明の忠后土を感ず.....六八〇

卷之五.....六八五

喬道清の術宋江を破る.....六八五

幻魔君の術五龍山を著む.....六八九

入雲龍の兵百谷嶺を圍む.....六九二

陳瑾諫官安撫に陞る.....六九七

卷之六.....七〇二

瓊英處女鋒と做る.....七〇四

張清の縁瓊英に配し且吳用が計郎梨を鳩す.....七二七

卷之七.....七三三

花和尚縁纏井を解脱す.....七三二

混江龍水を太原城に灌ぐ.....七三六

張清瓊英雙功を建つ.....七四〇

陳瑾宋江同く捷を奏す.....七四九

卷之八.....七五〇

墳地を謀て陰險逆を産す.....七五二

春陽を踏で妖艶姦を生ず.....七五五

王慶姦に因て官司に喫ふ.....七五八

龔端龔正配軍王慶を師とす.....七五九

卷之九.....七六一

張管營妻の弟に因て身を喪ふ.....七六一

房山寨に雙て舊強人を併す.....七六七

喬道清風を回し賊寇を燒く.....七七一

書生談笑して強敵を退く.....七七八

卷之十.....七八三



宋江大に紀山軍に勝つ……………七六三  
 小旋風炮を藏して賊を撃つ……………七六三  
 王慶江を渡つて捉らる……………七六三  
 宋江寇を剿功を成す……………七六九

挿繪

一丈青王矮虎を虜にする圖……………三三三  
 孫新夫婦大に牢を劫す圖……………四八四  
 一丈青双刀を弄つて大に呼延灼と戦圖……………四八四  
 燕青箭を放つて盧俊義が危難を救ふ……………四八四  
 法華寺に良馬を養ふ……………四八四  
 黒旋風李逵怒つて勅使及び附人等を怖しむ……………四八四  
 王瑾高太尉に媚つて詔書を讀替ん事を勸む……………四八四  
 宋江陳橋の下に軍士を梟首す……………四八四  
 李逵夢見て卓子をうつ……………四八四

石室山の白石仇申が妻宋氏の容貌を現す……………七〇六  
 配軍王慶龔氏兄弟に棒法を傳ふ……………七〇七

水滸傳(第二卷)目錄終

水滸傳

五編卷之一



病關索大に翠屏山を鬧す

病關索楊雄は妻の詞に誑れ、義弟石秀を恨みたる過を悔、今更ら石秀が思はく面目なく、夫につけても妻の悪き心魂に徹し、今にも首を刎たしと思へ共、石秀が云ふ處も理あれば、勤めて心を静め石秀に對し、賢弟の計を聞て我速に鬱憤を散せん、速に所意を聞んと云ひければ、石秀が云く、今此所の城の東門より三里外に、翠屏山と云ふ險山あり。長兄明日淫婦を誑て云ひ給ふべきは、我久しく山神を拜せざるに、幸ひ今日暇なれば、汝と俱に行きて、山神を拜すべしと淫婦を賺し出し、彼山に上り給へ、某は先に山に上つて待つべき間、三人對面の上にて、虚實を分明に正し、其後長兄心の儘に行ひ給へ、是則ち罪を糾し罰を行ふ道理なれば、縦ひ官府に云うたりとも、畢竟其分説有べし。楊雄が云く、三人對面の上、虚實を正せと云ふは、賢弟の清潔なることを、我前に正さんが爲な

らん。我今更ら賢弟を疑ふ心更になしといへ共、左も右も賢弟の教に従て、明日淫婦を引て山に上るべきなり。汝かならず早く来て待ち給へとて、遂に別れて回りけり。翌日楊雄妻に向ひ云ひけるは、我久しく山神を拜せざる間、今日は汝と共に山神廟に参詣せん。宜しく用意を調へ来るべし。妻これを聞て領承し、はや粧を調しかば、楊雄則ち妻を轎に乗しめ、蘇州城の東門の外に馳出、楊雄閣に轎夫に命じて、翠屏山に擡行べしといひければ、轎命を受け、直に翠屏山をのぞんで馳行き、暫時の間に彼山の腰に至りけり。楊雄先づ轎を站させ、妻を呼び出しければ、妻則ち轎を出で大に駭て云ひけるは、丈夫何ゆゑ、此險山に来て山神を拜し給ふや。我聞く山神の廟は、我先祖の墓の傍にもこれあるとなるに、何ぞ必しも遠く此山に至り給ひしぞ。楊雄が云く、此山の山神は究て靈威有りとなり。汝唯我に従つて山に登れ。轎夫兩人は、暫く此所に在て待つべしとて、唯一人の丫頭を引て、三人齊しく四五重の山坂を上りし處に、石秀ははや此處に在て待侘けるが、楊雄夫婦が來りしを見て、急に相迎ければ、楊雄が妻は驚き怪みける。石秀潘巧雲に向ひ嫂々恙なきや。巧雲答へて、叔々何ゆゑ此所にありや。石秀が云く、我疾來つて嫂々を待侘ぬ。楊雄又た妻に對して云く、汝前日我に告げけるは、石秀一向不義の調戲を云ひしとなるに、今日此處には他人もあらざれば、汝兩人これを對談して明白に正すべし。巧雲が云く、過去りしこと再三問ひ給ひて何の益ありや。石秀眼を怒らし云ひけるは、嫂々汝何ぞこれらの詐を長兄に告げて、兄弟の義を壞はしむるや。今日長兄の前にて明白に

云ひ給へ。巧雲が云く、汝に過ちなくば、自ら静り給へ。安りに眼を怒らしむるは、是何の無禮ぞや。石秀が云く、汝は猶人知らぬところ思ふべけれ。我今證見を出して汝が罪を正さんとて、頓て裴如海が衣裳を取り出し、汝是を識認たるや。巧雲これを見て、覺えず面を紅め、只一言の答にも及ばざりけり。石秀腰刀を抜て楊雄に與へて云ひけるは、長兄もし此事を分明に知り給はんとならば、此丫頭に問ひ給へ、然らば忽ち明白に知れ候はん。楊雄然りと同じ則ち丫頭を揪へ、大に怒て云く、汝賤人いかんぞ我妻を助けて不義をなさしめけるや。一々詳に白状せば、我肯て汝が命を饒すべし。若し半點にても詐らば、先づ汝が頭を刎べきぞ。彼丫頭これを聞いて大に駭き、忽ち抖ひ慄き云ひけるは、願くは相公我命を饒し給へ、我詳にこれを告げんとて、彼日潘公が家に法事有りし時、裴如海始めて私情を通じ、此より毎度忍び入りて、擡に樂むこと、始終具に語りしかば、楊雄大に憤り早速妻を踏倒して罵りけるは、汝淫婦自ら明らかに白状せよ。彼丫頭已に白状せし上は、汝縦ひ抵頼とも抵頼はせじ。若し實情を以て我に告げば、我肯て汝が性命を助けん。もし半句にても詐らば、只今汝が胸を刮開て、天罰を知らしめん。巧雲大に驚き、則ち聲を震はし云ひけるは、我れ前日不圖酒興に乗じ、自ら誤ぬ。願くは舊日の恩愛を想出し給ひて、這回の罪を饒し給へ。石秀が云く、長兄必ず事を分明に正し給へ。自ら誤てこれを忍び給ふことなかれとて、又巧雲に向つて云く、汝裴如海に奸通し、夫の眼を眩すこと、我疾より是を知れり。然るに汝言を詐て長兄を誑き、我と長兄との盟

誓までを敗らんとするゆゑ、前夜我汝が家の後門に、待つをしらす、木魚を持ちし頭陀、後門より出たるを捉へ、これを責て汝等が悪事をなす次第、内外相圖の事迄微細に聞き糺し、此頭陀が衣類を剝取首を刎、木魚を取て我是を敲き相圖をなせしに、表如海忽ち汝が床を出て歸るを捕へ衣類を刎て首を刎、其衣類は證見の爲に取り置き、即ち今汝に見する處なりと云ひ聞せけるに、楊雄又大に罵て云く、汝淫婦始終の悪事備細に語れ、若し然らずんば我立ち處に汝を害すべきぞ。巧雲今は止ことを得ず遂に白狀して云く、日外老父が家に於て先夫の法事を成せし時、始て表如海と奸通し、其後毎度後門より爬灰たりしと語りける。石秀又問うて云く、嫂々は何故、我汝に調戲たると誑て長兄には告げるぞ。巧雲が云く前夜丈夫酒に酔て、我を責り給ひし時、何とやらん蹠蹠ありげに見えぬるゆゑ、我只これを猜して想ひけるは、叔々必定我が過ちあるを知つて、丈夫に告げ給ひしにより、丈夫是を憤り給ふならんと推察し、却て叔々を誑て丈夫を誑ぬ。叔々何ぞ我に調戲れ給はんや。何事も都て我許りしことなれば、最も罪重しといへ共、願くは慈仁を垂て咎を許し給へ。石秀又いはく、嫂々汝此石秀預らぬことに口出しせりと思ふべけれ共、長兄我と義を結ばざれば、いか様の事あらん共、我が干る所にあらず。潘公の懇志に免じ見ぬふりに在るべし。然るに汝が不義今に露ん。其時は必然長兄を毒殺せんと、大罪を企つべし。豪傑大丈夫たる者淫婦の計に命を落さば、我義兄は天下の英雄の笑者とならん。義弟として何ぞ見聞くに忍びん。是れ亦我が止ことを得ざる今日の天理なり。汝よ

く物の理を分別して見よ。又楊雄に對して云ひけるは、今日對談の上に、我不義なきこと明白に正しければ、長兄いよく我心を知り給へ。且此女はいか様とも、長兄の心儘に行ひ給へ。楊雄が曰く、賢弟我爲に彼等が衣裳を剝取り給へ。我自らこれを行ん。石秀此の言を聞き遂に妻と丫頭が衣裳を剝ければ、楊雄親自兩人の女を樹の上に捆り着け、頓て刀を揮て云ひけるは、これらの淫婦もし今これを饒さば久竟人を傷ふべし。只宜しく我手にかけて殺さんとて、先づ一刀に丫頭を斬り殺し、次に淫婦を斬んとせし處に、淫婦大に流涕して云ひけるは、丈夫此度は我一命を饒し給へ。向後過ちを改むべし。楊雄冷笑て罵りけるは、汝淫婦前夜はよくも我を欺き、我已に汝が言を信じ、幾乎兄弟の情を壞はんと欲しぬ。我今汝を害せずんば、いづくんぞ能く我此情を散せんやとて、遂に刀を擧て淫婦が頭を刎にけり。楊雄又石秀に對し云ひけるは、此上は汝と共に何方になり共馳行て、身心を安んせん。若し汝行べき所あらば、速に誘引せんや。石秀が云く、我長兄と共に人を殺せしことなれば、等閑の所に行きがたし。唯宜しく梁山泊へ馳せ行くべし。楊雄が云く、彼所は豪傑多しといへ共、本樞機なき所なるに、いかんぞ妄りに行んや。石秀が云く、梁山泊の晁宋兩頭領は原來よく人の危きを救ふ。いはんや今専ら賢を招き士を納む。遍く天下の人これを知れり。我輩急に彼地に馳せ行ば、久竟無事を保て身命を安んずべし。楊雄が云凡事は先に難うして後に易き時は、後患を免るゝと云ふなるに、賢弟猶宜しく三思を加へて、前後の難易を量るべし。若し我輩此粧束にて梁山泊に上らば、恐

くは諸頭領官司より來れる私訪ならんかとも疑ふことあらんか。全く賢弟の議に服しがたし。石秀笑て云く、宋公明はもと押司の職をなしたる人なれば、定めて能く人を識べきに、何の徒に人を疑んや、殊更我山陣には頗る樞機あり。彼の日長兄我と兄弟の義を結ばんとて、酒店に尋來り給ひし時、我とともに酒を酌でありし兩人の旅客、一人は則ち梁山泊の豪傑神行太保戴宗と云ひし者、一人は梁山泊に入るとて、戴宗に同行せし錦豹子楊林と云ふ者なり。彼れ其時某が志を感じ、一錠十兩の銀を惠て云ひけるは、梁山泊には、今専ら賢を求め士を募る間、必ず此處を棄て山陣に來れと諫めぬ。此故に我今梁山泊に行んと欲ふなり。楊雄が云く、汝已に此の如き來歴あらば、何ゆゑ疾云はざりしぞ。宜しく早々馳行べしと、各々腰刀を帶し、朴刀を提げ、已に山を下んとせし處に、松の樹の背後より一人の漢子呼つて云ひけるは、汝兩人今人を殺すのみならず、剽へ梁山泊に行んとは、甚だ大膽の企なり。楊雄石秀これを聞て忙しく背後の方を顧るに、彼漢子地上に拜伏す。此人は則ち姓は時、名は遷と號し、又諱名を鼓上癘又孟と云ふ。本高唐州の民、久しく蘇州に流落楊雄が厚恩を多く蒙むりし者なり。幼より簪を飛び壁を走り、籬を跳馬に驅、其迅速人目を愕然の術を練熟せり。此時楊雄問うて云く、時遷汝は何の戲言を云ふや。時遷が云く、某頃日貧苦に逼りしゆゑ、此山中に墓ある處を尋ねて、棺材を掘り出し則ち其内を搜し、銀器の類を覓んと欲し、毎日這邊に徘徊す。先にも已に夫人を殺し給ふを見れ共、故意知らぬ體に叩て出ざりしが、今節級の商議して云ひ給しを聞きぬる

に、梁山泊に行き給はんとのこととなりし故、某敢て馳せ出ぬ。願くは某をも誘引し給はば、恩は天地と同じからん。石秀が云く、汝已に我輩に從て來らんと思はば、我肯て汝を携へ往ん。今梁山泊には専ら壯士を招く時節なれば、却て人多く行くを悦ぶべし。時遷是を聞き大に感謝して云ひけるは、某若し山陣に足を留めば、必定今日の貧苦を免るべしとて、遂に三人後山の小路より下り、直ちに梁山泊を望んで馳行たり。扱兩人の轎夫は山の腰に在て數刻待ちしかば、紅日已に西山に傾けども、楊雄等三人尙未だ山を下らず。轎夫共商議して云ひけるは、はや日も晚んとするに、未だ回らざるは三人同じく路に迷ひぬることもやあらんとて、兩人の轎夫齊く、山上に登つて此邊を見るに、兩人の女斬殺されありしかば、轎夫大に駭き慌て忙き、馳せ回て潘公に斯と告げ、則ち其夜潘公と共に蘇州府に至て、知府相公に訴へしかば、知府は急に人を馳せて屍首を檢驗させけるに、其人頓て立ち回り、知府に報じて云ひけるは、兩人の女松の樹に絆り著て殺されけるが、傍に出家の衣服のみ有つて別に一點の物もこれなしと、未だ語りも罷らざるに、知府はや前日裴如海が殺されたることを思ひ出し、是則ち私情を通じ、己が夫に殺されたるに疑ひなしと考へ、潘公を呼び出し云ひけるは、汝が女兒を殺したる者は、汝が婿なるべし。先比楊雄が隣家共訴へ出でし出家等兩人首を刎られ、各衣類なかりしと云ふに、今女兩人を殺したる處に、出家の衣類を捨置しを思ひ合すれば、各私情を通じたるより起るなるべし。楊雄と石秀とを捉へざれば、決斷しがたしとて、翌日賞錢をかけて楊雄と

石秀兩人を求めけり。扱楊雄石秀時遷は已に蘇州を離て急ぎしかば、不日に鄆州の地に至り香林注を過りし處に、はや一ツの高山を望み、天色漸晚しかば、三人の者遂に旅宿を求め飲酌を催しける處に、石秀不圖頭を擡げ店の内をみるに、壁の上に十餘挺の刀掛けて有りしかば、石秀乃ち家僕を呼んで問ひけるは、汝が主人は何等の人なるぞ。家僕答へて我主人は祝朝奉と申す人なり。前面にみゆる高山は獨龍山と號す。山前に峨々たる一つの岡あり。則我が主人祝朝奉の住宅なり。祝朝奉三人の男子あり。都て是れ豪傑なるゆゑ、人皆稱して祝氏の三傑とす。此處に都合六七百の人家あり。盡く皆農夫たりといへども、每家二挺の刀を所持す。我此店を祝家店と名付て常に十四五人の家僕來つて宿するに因り、則ち十餘挺の刀あり。此刀は云ふに及ばず、村中の刀都て我主人より分ち與へり。石秀が云く、汝が主人は又何故村中に刀を分ち與ふるや。家僕が云く、此處より梁山泊へは遠からず。只此賊を防がため、多くの軍器を備へて家々にあり。石秀が云く、我價を償て一挺の刀を所望せんに、汝須からく我に賣り與ふべし。家僕が云く、軍器の類は都て目錄の上に記したる物なれば、某何を安りにこれを賣んや。若し主人是を知らば必ず我を策べし。重て軍器の沙汰をし給ふな。石秀が云く、汝賣らば我も買まじ、いかにぞ斯恐るゝやとて、自ら盃を執て家僕に勸ければ、家僕は是れを辭し終に座を立て出にけり。

拚命三火をもつて祝家店を焼と捨命三

此時楊雄石秀等盃を巡らし樂居けるが、時遷が云く、兩長兄若し鶏を用ひ給はゞ、某是を求め來るべし。楊雄が云く、我先に家僕に問ひけれ共、此處には鶏を賣る者なしと云ひしに、汝何れの處に去つてこれを求むるや。時遷が云く、某自ら求むる所ありと、打笑て出けるが、果して一ツの鶏を偷來りしかば、楊雄石秀共に莞爾として云ひけるは、汝定めて賊手を出しこれを求めつらんとて、頓て鶏を殺し三人齊しく用ひける處に、家僕是を知り再び座に出で云ひけるは、其鶏は我家に養ひ置たる鶏なるに、いかにぞこれを偷み給ふや。時遷が云く、此鶏は今日途中に於て買ひ求めたるなり。汝何ぞ卒爾のことを云ふや。家僕大いに怒つて云く、汝等は何者なれば人の眼を遮て偷みをするや。早く原の鶏を還せ。石秀が云く、此鶏已に殺せり。豈能く原の鶏を還さんや。我汝に價を還すべければ、宜しく怒りを休よ。家僕が云く、彼鶏は毎朝曉を報る鶏なれば、店中にこれを缺こと能はず。價は十兩銀を償ふとも、我これを取らず、只好原の鶏を還せ。石秀大いに怒つて云く、我價を償んと欲す。汝再三原の鶏を還せと云ふは、甚だ以て道理なし。我此上は一錢も償ふまじきに、汝必竟これをいかにせんや。家僕が云く、汝等必ず我店を等閑の客店と一列に見ることなかれ。若し猶鶏を還さずんば、汝等三人を捉へ梁山泊の賊と名づけ、早速官司に送るべきぞ。石秀益々怒りて、我もし梁山泊の豪傑なれば、汝いよく敢て我を捉へんや。楊雄も同じく怒つて云く、我好意を以て價を償はんと欲するに、汝いかにぞ我輩を捉へんや。家僕是を聞いて大いに怒り、忽ち

聲を揚て賊ありと呼ばはりければ、左右より七八人の漢子跳出て、直ちに三人の者を望んで打つてかかる。石秀これを見て奔雷のごとく吼り、早く拳を擧て三四人打倒しければ、楊雄も同じく數人踢倒しぬる處に、彼家僕これを見て急に逃げんとしけるを、時遷飛ぶがごとくに走り、眉間を打ちければ、忽ち血を吐て倒れけり。彼に打倒されし漢子共漸々起上て後門より逃出ければ、楊雄これを見て云ひけるは、彼等已に逃出し上は、少刻大勢を引ききて來るらん。我輩速かに此處を避行かんとして、三人同じく壁の上に掛けたる刀を奪ひ取つて、已に跑出んとせし處に、石秀が云ひけるは、事已に此に至れり。何ぞ善人をなさんやとて、遂に家の四方に火を著しかば、忽ち黒煙天に沖、熾熾に焚起たり。三人の者はや大路に出て約莫一時ばかり馳せける處に、前後に火把の火二三百起りて喊き叫んで趕來る。石秀が云く、我輩小路を求めて逃げ行かば可ならんや。楊雄が云く、先づ此處に控て彼等を盡く趕散し、曉なば小路より馳せ行くべしと、未だ云ひも罷らざるに、はや左右を圍んで近々と趕來りしかば、楊雄等三人一齊に刀を揮て斬て出で、楊雄まづ七八人を斬り伏せし處に、石秀も又十餘人斬殺しければ、數百の人數先を争うて、四方八面に逃げ散りけり。楊雄等三人又數十歩ばかり行きけるに、再び喊の聲大いに起り、草深き處より二ツの鈎索を投出し、先づ時遷を搭住て引き行きしかば、石秀急にこれを救はんとせし處に、背後より又二ツの鈎索を以て、石秀をも搭住んとしけるを、楊雄急に刀を擧て索を砍拂ひ、草の内に進み入つて時遷を救はんとせしかども、遂に其行方を知らざりしか

ば、楊雄が云く、時遷を活捉れて遺憾には思へ共、今更方の及ぶ所にあらず。先づ速かに道を求めて落行べしと、遂に東の路を望んで馳せ去りけり。拐鄉民等は時遷を活捕、頓て祝朝奉が家に引渡しぬ。楊雄石秀兩人は、すでに二時ばかり馳せければ、天色漸々白みけり。石秀前面をみるに、一軒の酒店ありしかば、兩人急に酒肆に入つて歇ける處に、又一人の大漢子店に入つて呼ばはり云ひけるは、大官人今汝等に工役を仰せ給はんとなり。早々大官人の館に來るべし。酒店の主忙はしく答へ、小刻到らんと云ひければ、彼大漢子再び門外に出んとして、楊雄が前を過る時、楊雄此漢子を見るに、原來識判なりしかば、則ち呼ばはつて云く、小郎汝は何ゆゑ楊雄を忘れぬや。彼漢子急に頭を回し楊雄を見て俄に拜をなして云ひけるは、恩人此處に至り給ふはいかん。楊雄が云く、我此處に至りし事は、頗る縁故あり。先づ共に坐して談話せよ。我詳かにこれを告げんとて、遂に三人坐を列ねて、隔心なく見えにけり。時に石秀問うて云く、此人は誰なるぞ。楊雄答へて、此人姓は杜名は興原中山府の生なり。人皆此賢弟を稱して、鬼臉兒と諱名せり。前年蘇州に於て人を殺す故、入牢して已に斬罪に決しけれ共、我深く彼が武藝を惜み、上下の役人等に内通し、遂に斬罪を免かれしめけるが、豈知らんや、今日此處にて對面せんとは。杜興問うて云く、長兄は何等の公用有つて此邊に至り給ひしぞ。楊雄低言ていはく、我蘇州にて人命を害せし故、梁山泊へ行かんと欲し、昨夜祝家店に宿しける處に、又事を惹出し、鄉民等を殺しけるが、只我輩三人の内時遷と云ふもの生捉れぬ。杜興が云く長

兄心を安んじ給へ。我自ら時遷を放つて長兄に還すべし。楊雄大いに悦んで云く、已に然らば先づ暫らく酒を汲給へとて、頓て盃を執て勸めけり。杜興又云く、某蘇州を出てより以來、數年此處に逗留し幸ひ一人の大官人に愛せられ、乃ち彼大官人の家内のこと、都て某が預すと云ふことなし。此故に故郷に回る違あらず。楊雄が云く、其大官人とは誰人なるぞ。杜興が云く、此獨龍岡の前に三つの村あり。中の村を祝家莊と云ひ、西の村を扈家莊と云ひ、東の村を李家莊と云ふ。此三ヶ村の内には總て一二萬の軍馬あり。其内に於ても、祝家莊は別して豪傑多し。此村の頭たる祝朝奉三人の男子あり。これを祝氏の三傑とす。嫡男が名は祝龍、二男は祝虎、三男が名は祝彪と號す。又一人武藝の師あり、其名を鐵棒樂廷玉と號し、萬夫不當の勇士なり。其外又一二千の力士あり。西の村扈家莊の頭たる人は扈太公とて、一人の男子名を飛天虎扈成と號し、武勇諸人に勝れ、又太公の女子が名を一丈青扈三娘と號し、能く兩刀を使ひ、しかも馬上の働き男子に勝れり。東の村李家莊の頭たる人は、即ち某が主人にて、姓は李名は應と號す。最も能く鎗を使ひ又善背に飛刀を藏し、百歩の間を隔て人の首を得るなり。此三村は互に盟を誓ひ、若し事ある時は各々人數を馳せて相救ふ。只梁山泊の豪傑來つて兵糧を借らんことを恐れ、三村同じく人馬を備へ、其防ぎ極めて嚴密なり。某今長兄を引いて李大官人に對面あらしめ、即ち李大官人の書簡を祝朝奉が方に遣はし、時遷を求めば、祝朝奉肯て時遷を放送るべし。楊雄が云く、李大官人と云ふは、彼撲天鵬李應と云ふ人にはあらずや。杜興が云

く、則ち其撲天鵬がことなり。石秀が云く、獨龍岡の邊に撲天鵬李應と云ふ豪傑ありとは聞きしかども、未だ曾て其實を知らざりしに、果して詐ならざりしよな。我輩速かに馳せて對面せば可ならんとて、遂に杜興に隨ひ酒店を出て、三人同じく李家莊に至りけり。

撲天鵬生死の書を雙修す

此時杜興先づ家に歸り李應に斯と告げ、門外に出で楊雄石秀を莊内に誘引しける處に、李應自ら廳前に出て相迎へ、終に一禮畢りしかば、頓て酒宴を設け兩人を款待けり。此時兩人再拜して云ひけるは、願はくば大官人一封の書簡を祝家莊に遣はして、時遷を救ひ給はらば、我輩身を終るまで此恩を忘るまじ。李應これを聞いて哀に思ひ、早速書簡を修へ、使を祝家莊に馳せければ、楊雄石秀深く是を感謝す。李應が云く、兩人の豪傑心を安んじ給へ。我が書簡を遣はすからは、少刻時遷を送り來るべし。先づ強て酒を酌み給へとて、自ら盃を把て相勸め、閑談畢て後、李應又鎗棒のことを兩人に問ひけるに、兩人の者一々これを語りしかば、李應其理あるを聞いて大いに悦び、益々懇志に見えにけり。扱かの使者已の下一刻に馳せ回り、即ち李應に對して云ひけるは、某自ら祝朝奉にまみえて、書簡を呈せし處に、祝朝奉は已に時遷を放つべき氣色露れけれ共、彼三傑却つて大いに怒り、急に時遷を官司に引渡すべしとて、返簡にも及ばざりし故、せひなく歸れりと。李應これを聞いて忽ち大きに駭きて云く、我此三ヶ村の内は互に生死の交りを結て、常に睦じければ、書簡を見ると齊しく、時遷を



送るべきに、却つて三傑が怒りをなせしは、必定汝が云ひ誤りあるべしとて、又杜興に命じ云ひけるは、汝自ら馳せて祝朝奉にまみえ、宜しく備細に告げて、時遷を乞請回るべし。杜興が云く、願はくは大官人再び書簡を修へて遣はし給へ。然らば必ず承允することあらん。李應其言に同じ、頓て又書簡を修へ杜興に與へければ、杜興即ち馬に乗つて飛ぶがごとく、祝家莊に馳せ行きけり。李應再び楊雄石秀に對して云ひけるは、此回の書簡にはいよく具に云ひ送りたれば、必然好信あるべし。心を寛げ待ち給へとて、共に黄昏まで待ちしかば、杜興頓て馬を飛ばせ跑来り、顔色大いに變じて暫く聲をも出だすこと能はざる故、李應問うて云く、汝何ゆゑかく怒るや、先づ怒りを息て彼等が返答を申聞けよ。杜興が云く、某書簡を携へて莊内に入りし處に、祝龍、祝虎、祝彪兄弟三人同じく出て大いに怒り、汝又來つて何をなすやと問ひしゆゑ、某拜伏して申けるは、主人より書簡を寄せ候とて、則ちこれを呈しけるに、彼等又色を變じ、罵り云ひけるは、汝が主人は、いかにぞかく恐にして、再三書簡を寄せ、妄りに梁山泊の賊時遷を求むるや。我今これを官司に引渡さんと欲す。汝再び來ることなかれと云ひしゆゑ、某又答へて云ひけるは、時遷は梁山泊の者にあらず。彼は此回蘇州より來りし旅客なり。願はくは仁心を垂給ひて、彼が一命を饒し給へと未だ云ひも終らざるに、兄弟忽ち呼はつて云ひけるは、我決して時遷を還さじとて、書簡を扯破つて地上に擲棄尙頼りに罵つて、汝もし再三我等兄弟が怒りを惹引さば、我必ず李應を捉へ、共に官司へ引かせんと惡口したるゆゑ、

某これを憤りければ、三人の兄弟家人に命じ某を捉へんとせしゆゑ、某急に馬に策て馳せ回り候なり。李應是を聞いて、忽ち牙を咬齒を切て大いに怒り、早く馬を引かせよ。我自己に馳向はんと呼はばりければ、一家中都在騷動しける處に、楊雄石秀諫て云く、大官人怒りを息給へ。必ず我輩が爲に、結盟の義を懷ひ給ふことなかれ。李應がいはいく、足下ら毛頭これを憂へ給ふなとて、遂に全身盔甲を着し、手に點鋼鎗を擦て馬に打ち乗り、凡そ二十餘人を引いて打ち出でければ、杜興楊雄石秀等も、同じく相續て馳せ出けり。李應已に祝家莊に至りしかば、紅日はや西山に傾ぬ。此祝朝奉が家には、門前に一つの吊橋有りて、四方は都て高牆あり。樓の上には金鼓を設け、樓の下には劍戟を建て其防ぎ尤も嚴なり。李應真先に馬を進め、大音聲に呼ばはり云ひけるは、祝家の三兄弟いかにぞ敢て我を誹るや、速かに出て勝負を決せよ。此時大門開けし處に、五六十騎一度に馳出づる。祝朝奉は赤馬に乗り、當先かくれば、第三の子祝彪相續て馬を一番に騎出す。李應是を見て、先づ祝彪を指さして、大いに罵つて云く、汝黃口の孺子、何ぞ妄りに我を欺くや。我と汝が親とは死生の交り結び、誓て心を通じし志を共にし、互に相助けて村を守る。若し汝が家に何事も有り、我に問うて人を求むる時は則ち人を遣はし、物を乞ふときは則ち物を送る。我今一個の平人を求めんが爲、已に兩度まで書簡を寄せけるに、汝これを扯破て我名を恥辱るは、これ何の道理ぞや。祝彪が云く、我が家汝と死生の交り結びし根元は、梁山泊の賊を捉へて、山陣を掃清んが爲ならずや。然る

に汝は梁山泊に心を通じて已に謀叛の企あり。此故に我汝が書簡を扯破りぬ。李應が云く、汝平人を捉へて梁山泊の賊とするは大なる非道なり。祝彪が云く、時遷已に白状しけるに、汝尙抵頼とするや。退かば速かに退ぞけ、若し然らずんば、かならず汝が一家を捕へて街に示衆べし。李應是を聞いて大いに怒り、鎗を撚り馬を躍せ擲出ければ、祝彪も又馬を飛ばせ鎗を輪し擲て出、兩將已に鎗を交へて、十七八合闘ひしかば、祝彪力衰へ敵すること能はず、急に二十歩計引退いて、弓箭を取りて打搭へ、恰も満月のごとく拽て、ひやうと放ちければ、其矢忽ち李應が右の臂に中り、馬より下に眞倒に落ちにけり。祝彪是を見て、再び鎗を擧早く擲入し處に、楊雄石秀齊しく刀を揮て斬て出、直ちに祝彪を望んで左右より來りしかば、祝彪又馬を回し走り行く。楊雄早くも追着て馬の股を斬けるに、馬忽ち嘶て立ちしかば、祝彪すでに落ちんとせし處に、大勢馳來りてこれを扶け、諸人一度に放つ矢は、唯雨の降ごとくなり。楊雄石秀は身に盔甲を着せざりしかば、此箭を遮りがたく思ひ、遂に祝彪を棄て退きけり。此時杜興は李應を扶け、再び馬に乗りければ、楊雄石秀は左右に從ひ、且李家莊へと退きしに、祝彪が勢は二三里ばかり追蒐しかども、天色已に晩て暗かりしゆゑ、遂に人數を引き取つて半途より回りけり。扱李應は已に私宅に回りて箭疵を養生し、則ち又楊雄石秀を後堂に請うて計を商議しけるに、楊雄石秀が云く、大官人已に矢に中り給ひて、時遷も又救ひ難ければ、我輩兩人は先づ梁山泊に上り、晁宋兩頭領を頼んで、大官人の爲に此仇を報ふべし。李應が云く、我

今祝家を打破て、時遷を救はんとは思へども、我已に矢疵を蒙るのみならず、彼が勢は我勢に多ければ、頗る難き所あり。此上は先づ梁山泊に上り給ひて、宜しく計を議し給へとて、一盤の金銀を相贈る。楊雄石秀これを辭しけれ共、李應再三言を盡して送りしかば、兩人の者遂に金銀を收めて、李應に謝し別れ、直ちに梁山泊を望み急ぎしかば、はや前面に新しき酒店あるを見て、兩人齊しく酒店の内に入り、頓て酒を求めて酌みけるに、此酒店は則ち梁山泊より新たに建てたる酒店にして、石勇これを掌り、専ら世間の風説を探聽做眼の處なり。此時兩人の者酒店の小厮に向つて、梁山泊の路數を問ひければ、石勇傍よりこれを聞いて想爲、此兩人の者は尋常の族にあらじ。我自ら是を試んとて、則ち出て問ひけるは、貴客兩所は何れより來り給ひしぞ。又梁山泊の道を問うて何の用事有りや。楊雄が云く、我輩は蘇州より來れり。山陣に頗ぶる用事有る者共なり。石勇忽ち戴宗が語りしことを想ひ出し、則ち問うて云ひけるは、足下は石秀と云ふ人にはあらずや。楊雄が云く、某は楊雄と云ふ者なり。其石秀は此兄弟弟と云ふことなれば、がことなり。則ち石秀を指さし、又問うて云ひけるは、足下何を以て石秀が名を知り給ふや。石勇が云く、某本しらざりしか共、日外戴宗蘇州より回りにて、大名を稱揚せり。よつて某長兄の大名を聞き及べり。今日山陣を尋ね給ふは、大なる幸なりとて、頓て酒宴を設け懇懃に款待、則ち水亭の窓を開けて、相圖の響箭を、葦の内へ射入しかば、早速一艘の快船を漕來りぬ。石勇自ら兩人を請うて船に乘らしめ、直ちに鴨嘴灘に至つて岸に上り、石勇先づ一人

を馳せて山陣に斯と告げければ、戴宗楊林早山を下り相迎へ、遂に引きて山陣に上りし處に、諸頭領は皆聚義廳に相聚て待ち居けり。

五編卷之二

宋公明一回祝家莊を打つ

神行太保戴宗錦豹子楊林の兩人は、楊雄石秀兩人を延て廳上に至り、晁蓋宋江并に諸頭領に見えしめ、各禮畢りしかば、晁蓋先づ其所存を問けるに、兩豪傑心を傾け隨順すべきよしを語りしかば、諸頭領衆皆悦びけり。楊雄又時邊が鶏を偷んで捉れしこと、李應兩度まで書簡を送て、時邊を求しかども、祝家の者共是を許さず。剩へ一戦に及で、李應を射たること、且祝氏兄弟梁山泊の豪傑を誘羞辱ること一々くはしく告げれば、晁蓋これを聞て大いに怒りいはく、汝等妄に梁山泊の名を借て羞辱を蒙らしめしこと、甚だ以て悪んべし。我まづ汝兩人を殺さんとて、已に左右を呼で、此兩人が頭を刎よと命じける處に、宋江忙しく諫めて云く、長兄先づ怒りを息給へ。此兩人の豪傑千里を遠しとせずして、山陣に來り、心を傾けて隨順せんと云ふに、少しき過を擧て是を殺し給は、却て不可ならん。晁蓋が云く、梁山泊の豪傑王倫を殺してより以來、只忠義を以て主とし、諸の頭領都て賤き志を起さず。各豪傑の志を磨きて光彩あり。然るに此兩人梁山泊の名を借り、鶏を偷吃ひ、我輩をして恥辱を蒙らしめければ、我先づ此兩人を殺して號令を正し、其後軍馬を起して祝家莊を攻破

り快く此冤を雪ぐべし。宋江猶諫て云ふ、長兄何ぞ人を一列に見給ふや。彼時遷はもと賤き者なるによつて鶏を偷て事を惹出せり。此兩人は又忠義を重んずる誠の英雄なり。某かつて聞けるに、祝家莊の小人等、常に山陣を誹羞愧るとなり。いかにぞ此度に限んや。況や彼輩頃日専ら備を嚴密にして、山陣に敵せんと圖るよし、今山陣には人馬多きゆゑ、兵糧頗る乏し。先づ此勢ひに乗じて、彼所に攻行ば、暫時に踏崩して兵糧多く得べし。某不才たりといへども、數人の豪傑を引て、自ら祝家莊に馳向ふべし。若し祝家莊を打平げずんば、誓つて再び山陣に歸るまじ。是第一山陣の爲には、仇を報て銳氣を折かず。第二には彼鼠輩等に恥辱らるゝことを免れ、第三は若干の兵糧を得て山陣の用に供へ、第四には李應を誘引して山陣に加はらしめん。某愚意を以て之れを量るに、是則ち全き計なり。只しらす長兄の尊意はいかん。時に吳軍師すゝみ出で、宋長兄の言尤可なり。今若し楊雄石秀を殺さば、自家の手足を砍る道理なり。願くは晁長兄宜しく怒りを息て、兩人が罪を免し給へとて、もろく頭領都て一同に諫めければ、晁蓋漸怒りを忍び、兩人を免しけり。宋江猶自ら兩人を撫諭して云く、兩人の賢弟必ず異心を起し給ふことなけれ。今晁長兄の怒り給ひしは、是山陣の號令なり。縦ひ宋江自ら過有りともし、即座に於て頭を刎るべし。況や今新に鐵面孔目表宣を立て、軍政司となし、賞罰の事究て嚴なり。願くは兩賢弟自ら是を察し、憤り給ふべからず。楊雄石秀再拜して退きける處に、晁蓋則ち兩人の者を楊林が次に座せしめ、頓て酒宴を設け、各觴を順逆し、

翌日又山上山下の諸頭領、聚義廳に參會し、祝家莊を攻むべき計を議定し、先づ晁蓋は山に留つて、吳學究、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、呂方、郭盛等と共に山陣を守る。宋江は諸頭領と共に、祝家莊に馳向ふ。則ち勢を二手に分け二行に備て進發す。其一行は宋江、花榮、李俊、穆弘、李逵、楊雄、石秀、黃信、鷓鴣、楊林等三千の歩卒、并に三百の馬軍を率して山を下る。第二行は林冲、秦明、戴宗、張橫、張順、馬麟、鄧飛、王英、白勝等三千の歩卒ならびに三百の馬軍を領し、先陣に二三里後れて山を下る。晁蓋等これを送つて關前迄出ければ、宋江等は遂に別れて直ちに、祝家莊を望で進發す。前軍ははや獨龍山の前に至て陣を取りぬ。宋江此時花榮と商議して云ひけるは、我聞く、祝家莊は路徑甚だ難なるとなれば、卒爾に兵を進めがたし。先づ兩人の物馴れたる者を馳て、路徑の曲折を探聞しめ、然して後に兵を進めば、路の順逆を知り戦ひに便あるべし。黒旋風李逵進出で云ふ、某久しく人を殺さずして寂寞なるに、某先づ馳せ向ふべし。宋江が云く、汝は遣しがたし。若し陣を破り敵を衝の時、汝を用べし。今先づ兩人遣すは乃ち是細作の爲なり。汝を馳せて何の用かあらん。李逵笑て云く、這らの小村一つ破らんに、何ぞ必しも長兄の力を用ひしめんや。某自ら二三百の人數を引て馳せ向は、村中の男女都て斬盡さんに、何の難きことあつて豫じめ細作を馳給ふや。宋江責て云く、汝何ぞ又亂りの言を云ふや。重て多言することなけれ。即ち石秀を呼で云ひけるは、汝は、嚮に祝家莊に行きぬるとなれば、頗る路徑をも記あらん。楊林と共に馳て、動靜をも探聞て來ら

んや。石秀が云ふ、彼今親方の人馬の至りしを知て、必定人数を備へて、嚴に守るべければ、我輩此體にては行がたし。宜しく形を改め馳行ば可ならん。楊林が云ふ、我は道士の形に假て行べきに、足下は我が左右を離すして、相従ひ給へ。石秀が云ふ、我蘇州に在し時、薪を賣てよく此業を知りければ、又一荷の薪を擔て馳せ行へし。楊林が云ふ、已に然らば、今宵五更の時分に馳せ行んとて、各身邊に刀を藏して、已に用意を調へしかば、宋江これを見て、心中に悦びけり。扱石秀は一荷の柴を擔て先づ進みし處に、路徑曲折にして、四方に樹木茂り、果して路頭識がたし。石秀且柴を卸して、暫く歇みけるに、楊林もはや道士の形に粧て此邊に至りぬ。石秀左右をみるに幸ひ人なかりしかば、暗に楊林を呼で語て云く、此處原來路徑亂雜りて順路識がたし。前日李應に隨て此邊の路を過りしかども、其節は日已に暮しかば、路徑分明に見置ざりし。楊林が云く、遮莫只大路を望んで馳行んに、何の差かあらんとて、頓て前後に相從て、只顧大路を探んで進みける處に、遙對向に一村の人家有つて、數ヶ所に酒店有りければ、石秀終に此處に至て、酒店の前に柴を卸し憩ひ見るに、酒店の内にも劍戟を立並べ、途中往來する者も、都て衣甲を着し、胸の上には大なる祝の字の験を附け各勇を奮ん氣色あり。石秀近く前で一人の老翁に問て云ひけるは、此處はいかなる風俗なれば、毎人に衣甲を着するや。老翁が云く、汝は何國より來れる人ぞ。早く去て禍ひを避よ。石秀が云ふ、某はもと山東の者なるが買賣に本錢を失ひしゆゑ、故郷に回ること能ず、頓目此處に至て柴を買ふ。し

らす此所は何等の禍出來るや。老翁が云ふ、汝すべからず早々馳て身を他所に避くべし。此所には少刻軍始るなり。石秀が云く、かくのごとき靜謐の村中に何ゆゑ軍あるや。老翁が云ふ、此村の祝朝奉と云ふ人、今梁山泊の豪傑を欺き給ふゆゑ、彼輩大勢を引て村口迄寄來りぬ。只喜ぶらくは、此處の跡徑究て曲折なるによつて、彼未だ進ず。若し軍始りなば、救ひの兵を出さんとて、每人衣甲を着せしめ、其用意調へり。石秀が云く、此村中總て幾何の人有りや。老翁が云く、此祝家莊には凡そ一二萬の人有り。又東西の兩村より救の兵出べし。則ち東の村の頭たる人は、撲天鵬李應と申す。又西の村の頭たる人は、扈太公と號して、一人の男子一人の女子とを持給ひけるが、此女子が名は扈三娘と申し、人皆一丈青と稱す。希有に武藝の達人なり。石秀が云ふ、已に斯の如くんば、梁山泊より攻め來るとも何の恐ることかあらん。老翁が云ふ、汝等ごとき他國の者此地の路徑を知らざる者は、若し果して軍起らば、必定禍を免かれずして捉るべし。石秀が云ふ、路徑をしらずして捉るとは。老翁が云く、我此處の路に一首の詩あり。其詩に云く、

好個祝家莊 盡是盤陀路 容易入得來 只是出不去

石秀此詩を聞て故意涙を洒ぎ哀み告て云けるは、某は異郷に流落て故郷に歸ることも能はざる者なるに、若し軍場に出合て兵らに捉らるゝことあらば、必定非命の死を致すべし。願くは老翁廣く仁心を垂給ひ、脱れ出づべき路を教給へ。然らば我此一荷の柴を老翁に奉らん。老翁が云ふ、我何ぞ錢を價

すして汝が柴を受んや。汝定て酒食を求めがたからん。我に隨て來るべし。我汝に酒食を惠んとて遂に引て家に回り、頓て酒食を以て石秀に與へければ、石秀再拜してこれを吃し、則ち又告て云ひけるは、伏望らくは、老翁路徑を指教へ給へ。老翁が云ふ、汝村中に入て大柳の樹ある傍を見よ。一つの路あり。是則ち生路なり。大柳の樹なき處の路は都て死路なり。若し萬一路を差ひなば、左りに旋り右に盤るとも到る所盡く死路にして、再び脱れ出んこと難かるべし。殊更死路の内には地上に木石を横へて伏勢多ければ、必定汝を疑て忽ち生捉べきなり。汝自ら心をとめて、大柳の樹ある道を行べし。必道を差へて捉はるゝことなけれ。石秀是を聞て深く拜謝し、又老翁が姓名を問ひければ、老翁答て云ふ、這村の人は都て祝氏多けれども、唯我は覆姓鍾離にして原來此村に居住す。石秀が云ふ、某天の引合を蒙りて老翁にまみえ、路徑を教へ給ふのみならず、又多く酒食を惠み給ふこと、誠に感激の至りなりと、深く是を謝しける處に、忽ち外面に騷動して、細作の者を捉へたりと呼りしかば、石秀大いに驚き、走り出てこれをみるに、七八十人の軍卒共、楊林を高手小手に綁て引來る。石秀これを見て、心中に甚だ苦み、故意老翁に問うて云ひけるに、何ゆゑ彼者を縛るや。老翁が云ふ、汝何ぞ諸人が云ふを聞ざるや。彼は則ち宋江が遣したる細作の者なり。石秀が云ふ、彼定めて路に迷てこそ捉れつらん。老翁が云ふ、彼柳の樹ある路をしらす、一向大路を馳て遂に死路の邊に迷ひ、伏勢に捉はれしなり。然れども彼者また驍勇にして七八人の軍士を斬伏しとなり。此處に又彼を認識た

る者あり。彼は則ち梁山泊の頭領豹子楊林と云ふ者なりと、未だ語りも罷らざるに、又前面に若干の人來つて、三官人自ら巡見に出給ひぬと呼りしかば、石秀壁の縫間より是を望み見るに、前には二十餘筋の鎗を持せ、後には七八人の力士戰馬に騎て相從ふ。中には年少の大將全身嚴に披掛て白馬に乗り、手に一筋の鎗を拵て威風凜凜として進み來る。石秀は此大將を識認しかども、詐て老翁に問ひけるは、此年少の大將は誰なるぞや。老翁が云ふ、此官人は則ち祝朝奉の第三男祝彪と云ふ人なり。三兄弟の内にては此人の武勇別して勝れたり。則ち扈家莊の一丈青と婚禮の約定りぬ。石秀これを聞て、暗に心中に曉し則ち別れを告て云ひけるは、某今道を尋ねて馳出べし。老翁が云ふ、今日はや日も昏けるに、若し軍始りなば必然汝が命を害せらるべし。石秀が云ふ、果してかくのごとくんば、老翁彌憐をたれて我が一命を救ひ給へ。老翁が云く、汝今宵は先づ我が宿に留つて明日もし軍なくんば馳出よ。石秀大に悦で謝しけるに、門前に五六人騎馬の士來つて、毎門に觸て云ふ、汝百姓ら今宵紅燈を見て相圖とし、都て心を齊うし、力を併せ梁山泊の賊を活捕、宜しく官司に送て恩賞を乞ふべしと、高らかに呼び過りけり。石秀則ち老翁に問て云ふ、かく呼る人は誰なるぞや。老翁が云ふ、彼人は當地の捕盜官なり。今宵約を定て宋公明を捉んと欲す。石秀是を聞て暗に沈吟しけるが、遂に火把を乞て、後堂の傍なる草屋の内に入て歇みけり。扱宋江は兵を村口に屯して、楊林石秀を待けれ共、曾て音信なかりしかば、又歐鵬を馳て探聽しめけるに、歐鵬忙しく回て告けるは、

某彼地に至て、諸人の云を聞くに、一人の細作を活捉しとなり。某又路の様子を見るに、甚だ曲折にして伏勢あらん模様なりしゆゑ、あへて深入せず、馳回りの。宋江是を聞き大に怒て云く、我路徑を窺知て後ち、兵を進めんと思ひ、兩人の者を馳けるに、却て敵に擒しこそ恨みなれ。今宵急に兵を進め、村中に斬て入り彼兩人の者を救ふべし。只しらず、諸頭領の存念はいかん。時に黑旋風進み出て云ふ、願くは某一彪の兵を引て、村中に攻入べし。宋江是を許容し、早速號令を傳へ、諸軍に用意を觸れ萬事調へしめ、則ち李達楊雄に兵を分與へて先鋒とし、又李俊に兵を與へて後陣とし、穆弘を左に備へしめ、黃信を右に在らしめ、宋江は花榮、歐鵬等と共に中軍に居し、旗を翻し、鐘を揮ひ鼓を搥金を鳴し、一度に吐と喊の聲をあげて、直ちに祝家莊に攻來り、已に獨龍岡の上に至りしかば、日全く晚にけり。宋江自ら前軍を催促して勢を進ませし處に、黑旋風李達二つの斧を雙の手に揮て、當先に躍り出で、遂に莊前に至て此處をみるに、はや吊橋を高く拽起て、莊門の内は一燈の火もみえざりけり。李達大いに焦燥て濠を越んとせし處に、楊雄これを諫めて云く、李長兄先づ控へ給へ。莊門を關して火をも出さざるは、必然詐の計有べし。すべからく宋長兄の至り給ふを待て、別に宜しく商議せん。李達怒りに堪ずして二つの斧を揮ひ、岸を隔て大音聲に罵り呼りけるは、祝太公老賊早く出て雌雄を決せよ。黑旋風李達先陣を承つてこゝに至れり。莊上には音もなく、静りて答る者なかりけり。此時宋江が中軍人馬已にいたりしかば、楊雄急に宋江を迎て云ふ、怪かな莊上には音

もなく静りて人馬有りともみえず、計ありと覺え候。宋江が云く、先づ我試んとて自ら馬を勒て莊上を打望み、忽ち思出し云ひけるは、我已に誤れり。九天玄女より授りし、天書の上にも敵に臨んで急暴すべからずとあるに、我一味に楊林石秀を救んと欲ひ、ますく夜中に兵を起して、敵地に深入したり。今莊上に兵の見えざる、計有るに疑ひなし。早々三軍を退げんとて、忙はしく號令を下しければ、李達又呼て云ふ、長兄何ゆゑ兵を退け給ふや。我先づ敵陣に斬入んに、諸軍我に従て進むべしと、纔に云ひ終りし處に、忽ち砲の聲大いに響て、獨龍岡の上に一千餘の火把一齊に露れ出で、門樓の上より矢石雨のごとく飛せしかば、宋江三軍に下知し、舊路より退んとせし處に、後軍に控へたる李俊が人馬一度に呼つて云ひけるは、舊路ははや盡く塞て人馬の往來成がたし。恐らくは伏勢有るべし。宋江是を聞て益駭き、兵を四方に走て路を尋ねさせけるに、黑旋風李達は猶二つの斧を揮て敵を尋ねしかども、只一人の敵もなかりけり。かゝる處にまた獨龍岡の頂に再び砲の聲四下に起りければ、宋江是を聞て大いに呆れ、急に三軍を進めて大路の邊を過せけり。此時敵の伏勢一齊に併起り、三軍ひとしく苦み呼はりしかば、宋江問て云く、汝等は何を苦しむや。三軍答へて云ふ、此處すべて盤陀路にして、只願馳せ行といへども、又舊の路に盤り出で、かつて前に進むこと能ず。宋江下知して炬火の光ある處を自當に馳せ行かば、必ず人家有るべしとて、已に軍馬を進めける。

一丈青單王矮虎を捉ふ

斯る處に前軍又呼つて云けるは、此邊の路も亦盡く木石を横へ、路口を塞げば一足も進みがたし。宋江大に駭て云、我必らず此路に於て討るべしと、いまだ云も罷らざるに、穆弘が隊の内より石秀來れりと呼はりしかば、宋江悦んでこれをみるに、石秀は只一人刀を撚り、直に宋江が馬の前に至て云けるは、長兄少しも慌て給ふことなけれ。某已に路徑を知れり。大柳の樹ある路は、是れ則ち生路なるに、只柳の樹を驗として此路を馳給へとて、頓て三軍に號令を傳へしかば、宋江喜悅斜ならず、忙がはしく軍馬を催促して遂に大柳の樹ある路を求めて馳せけるに、約莫六七里に至りて敵勢益々加はりしかば、宋江深く是を疑ひ、則ち石秀を呼びて問ひけるは、前面の敵勢益々多きはいかん。石秀が云、敵の人馬は紅燈を見て相圖を定めければ、親方の兵も同じく紅燈を尋ねて攻め行くべし。已に正路を知る上は、敵大軍と云とも何ぞ恐るゝに足らんや。此時花榮は馬上に在つて、はや紅燈を見着け則ちこれを指さして宋江に告げけるは、長兄彼紅燈を見給へ。我勢東に行く時は彼紅燈も同く東に扯き、我勢西に行くときは、彼紅燈も又西に扯く。これいよく敵の相圖に疑ひなし。宋江が云、已にかくあらば、いかにもして彼紅燈を追失はし、敵の計、忽ち翻歸べし。花榮が云、彼紅燈を無せんこと何の難きことあらんやとて、則ち馬を近く進めて只一箭に紅燈を射落しければ、敵勢果して相圖の驗を失ひ、自ら大いに潰亂す。こゝに於て宋江三軍を進めて攻め行かんとせし處に、前面に又喊の聲天に響いて、火把の光幾千と云數を知らざりしかば、宋江急に石秀を呼で云、

汝は暗に、前面の勢を探聞來るべしとて遣はしけるに、早速馳回り報けるは、前面の軍勢は則ち身方の第二行の人馬、林冲、秦明等已に敵の伏勢を追散して、今まさに村口に攻出んとす。宋江これを聞て三軍を進め左右より夾んで村口に打て出で、祝家莊の敵を四面八方に追ひ拂らひ、頓て林冲が勢と一所に合せ陣を取り處に、天色漸々明にけり。親方の人数の内獨り鎮三山黃信見えざりしかば、宋江大に驚きこれを諸軍に問ひけるに、一人の小賊進み出て云、黃信頭領は昨彼當先に進んで働き給ひし時、蘆葦の内より鈎索を投出して、馬を鈎倒し遂に大勢馳出て、黃信頭領を活捉ぬ。宋江これを聞て大いに怒り、已にかくの如くんば、何ゆゑ早く來て告げざりしぞとて、從軍等を殺さんとしけれ共、林冲花榮再三これを諫めし故、宋江是を免しけり。諸將悶えて云けるは、未だ祝家莊を打たざるに、はや兩人の頭領を失て何ぞこれを忍びんや。楊雄が云、此處は都て三ツの村あり。東の村の李大官人は前日祝彪に臂を射られ、今家に在て専ら是を養生す。宋長兄速に馳て彼と商議し給はば可ならんが。宋江が云、我真にこれを忘れぬ。彼は本當地の人なれば、能案内を知りつらん。我自ら訪て計を求めん間、林冲秦明は暫く本陣を守り給へとて、頓て禮物を調へ、楊雄石秀等とも、三百餘騎を引て遂に李家莊に至りしかば、李應が館には門前の吊橋を高く惹起て、牆の内には若干の人馬嚴密に備へ、はや金鼓を打鳴す。此時宋江馬を進めて呼はりけるは、我は是梁山泊の宋江なり。自ら來て李大官人に見えんことを願ふのみにして、更に別意なし、疑心を生じ給ふことなけれ。杜興樓に上



つてこれを見るに、果して楊雄、石秀等、宋江が左右に隨がひ在りしかば、杜興はしく樓より下り、莊門を開き一艘の小船を濠の内に浮べ、宋江を迎へけるに、宋江急に馬を下り、杜興に對面す。楊雄石秀近く前んで云けるは、此人は則ち鬼臉兒杜興と號し、向に某等兩人を引て、李大官人に見えしめぬ。宋江悦で杜興に對して云、足下我爲に李大官人に告げて、梁山泊の宋江來て訪ふよしを知らしめ給へ。杜興是を聞て、再び船を回して内に入り、李應に此ことを詳に告げけるに、李應が云、彼は是梁山泊に在る謀反人なるに、我いかんぞこれに見えんや。汝只我に替て云べきは、李應は前日箭疵を蒙りて未だ快からざるゆゑ、今日の相見叶ひがたし。猶重ねて對面すべしと、慇懃に答へて宜しく回らしめよ。杜興命を承り再び船を渡り對岸に至り、宋江に見えて云けるは、主人李應再三拜謝して云、此回來臨を忝なうす。親自出て迎へ奉るべきの處に、前日矢疵を蒙りて今以て快からず、尊顔を拜しがたし。猶異日の參會を期すべきなりと、慇懃に傳語せりと逃げれば、宋江微笑して我已に李大官人の心底を知れり。我今祝家莊の軍に利を失うて、まみえんと欲するゆゑ、李大官人も亦祝家莊より、仇を夾まれんことを恐れ給ひて、相見し給はぬと覺えたり。杜興が云、李應いかに此のごとき存念あらんや。實に病重りて坐立安からず。某はもと此處の者ならずといへ共、多年當村に住して此邊の虛實能これを知れり。祝家莊の東は李家莊、西は扈家莊、此三村の内は原來死生の交はりを誓ひて、互に相救ふ約ありといへ共、今某が主人は病氣と云、殊に祝家莊とは敵身方に分れたるに

依て、今般の軍には救兵を出すことなし。只彼扈家莊は必ず救兵を出すべし。餘は恐るゝに足らずといへ共、彼女將一丈青扈三娘、極て能く兩刀を使うて萬夫不當の勇あり。長兄もし祝家莊を打んと思ひ給はば、東を防がず西を防ぎ給へ。恐らくは西の村の救兵親方の後陣を襲ふことあらん。又祝家莊には前後二つの莊門あり。一つは獨龍崗の前にあり。一つは獨龍崗の後にあり。若し前門のみ攻め給はば、却つて利を失ひ給ふべし。若し前後より夾んで攻め給はば、必ず勝利あらん。前門の邊の道は都て曲折にして盤陀路なり。萬一此道に踏入給はば大なる禍あらん。只大柳の樹有路のみを擇んで進み給はば是順路なり。石秀が云、敵今盡く柳の樹を砍たり。親方の兵已に其記を失つて進みがたし。杜興が云、縦ひ柳の樹を砍りたりとも、いかに能く其根を穿取らんや。白晝ならば柳の根を記とし、もし黑夜ならば兵を止給へ、恐らくは過あらん。宋江是を聞て大に悦び、深く杜興に謝し別れて本陣に回り、頓て林冲等にもみえて、李應が遇はざること杜興が語りし事共、詳に告げければ、李達又進み出でて云、長兄自ら禮物を送りて訪ひ給ひしに、彼作病して遇はざること無禮なれ。我自ら三百の兵を引て李家莊を打破り、李應を拖り來りて長兄に拜謁せしめん。宋江が云、汝猶ほ知らざる所あり、彼は原富貴人なるゆゑ、只官司を恐れて我に遇はざりしぞ。李達又笑ていはく、我思ふに李應は必ず幼年の孩子なるべし。故に我輩に遇ふことを怖るゝならんとて、衆皆咄と笑ひけり。宋江、諸頭領に對して云、我彼兩人の兄弟敵の擒となり、朝夕の存亡保ち難からん。汝諸賢弟各

力を盡して、我と共に祝家莊を破り、彼兩人を救ふべし。諸頭領一齊に進み出て云、長兄の號令誰かあへて違く者あらんや。唯しらす先陣を誰に命じ給ふぞ。黒旋風又云、汝諸兄弟等は一向彼孩子等を恐るゝに、我又先陣を承らん。宋江が云、汝が先陣は不吉なれば此度は汝を用ひがたし。我自ら先陣すべしとて、則ち馬鄰、鄧飛、鷓鴣、王英四頭領を左右に従はしむ。第二陣は又戴宗、秦明、楊雄、石秀、李俊、張横、張順、白勝等に命じて、水路より進ましむ。第三陣は林冲、花榮、穆弘、李逵等に命じて兩路より進ましむ。已に手配定りしかば、各々飽まで食して衣甲を着し、衆皆名馬に打乗て祝家莊を望んで進發す。扱宋江は當先に帥字の大旗を持たせ、總て百五十騎の馬軍と、一千の歩軍とを引て已に獨龍岡の前に至りしかば、宋江馬を勒へて、彼の祝家莊を見るに、流水岡を繞て垂柳家を蔽ひ、牆内には劍戟を立て門前には刀鎗を横たへ、防ぎ嚴重に備へ殊に堅固なり。宋江是を見て心中大に怒り、忽ち誓ひを設けて云けるは、我若し祝家莊を攻破らずんば、永く梁山泊に歸らじとて、暫く牙を咬で控へける處に、後陣の軍馬も又盡く至りぬ。宋江則ち第二陣の人馬を此處に留めて前門を攻さしめ、自らは又兵を引て獨龍岡の後に繞り出て後門を見るに、都て銅牆鐵壁を設けて防ぎ甚はだ嚴整なり。宋江急に戰を擧しめんと欲しける處に、忽ち西の方に一彪の軍馬喊の聲を揚て、親方の後陣に隨つて攻來る。宋江是を見て、馬麟、鄧飛等を留めて祝家莊の後門を撃しめ、己は歐鵬王矮虎等と共に兵過半を分かち、直ちに山坡の下に至て來る敵を相迎ふ。此敵は則ち扈家莊の女將一丈





青扈三娘なり。其勢約莫四五百も有らんと覺えて、彼扈三娘一疋の白馬に打ち乗り、雙の手に兩刀を揮て、當先に馳せ來る。宋江が云、扈家莊の女將萬夫不當の勇ありといふは、定めて此女がことならん。誰か出て彼と戦んやと、未だ云も終らざるに、王英はもと好色の徒なれば、女將と聞て心中に悦び、何とぞ是を活捉にして己が所有にせんと欲し、忽ち馬を飛ばし鎗を撚り一丈青に擲てかゝる。一丈青これを見て、同じく兩刀を揮て相迎へ、遂に鋒を交へ、戰已に十餘合に及びし處に、王矮虎漸々疲れ、鎗法殆んど亂れ、只左に架右に隔て敵しがたく見えけるに、一丈青二つの刀を雙に揮て砍入しかば、王英勝まじきと思ひけん、馬を回して逃んとせし處に、扈三娘急に右の刀を棄て、軽く猿臂を伸し、王英を脇の下に挟はさみ頓て地上に投げしかば、諸々の軍卒ども竟に王英を捉へて、高手小手に縛しめけり。是を見て歐鵬大に怒り、王英を奪ひ復さで置くべきやとて、刀を舞し一丈青に斬てかゝる。一丈青少しも怕れず呵々と笑ひ、又これを迎へて相戦ひ、互に秘術を盡し、一往一來精神を揮ひしに、歐鵬も又力衰へしかば鄧飛これを危ぶみ思ひ、鐵鎗を燃て喊き叫んで擲出ぬ。祝家莊にはこれを見て、もし扈三娘が過つこともあらんかと、急に吊橋を下して、祝龍自から三百餘人を引て、當先に斬て出ければ、宋江が後より馬麟雙刀を揮て、馬を陣前に跑出し、直ちに祝龍を迎へて相戦ふ。鄧飛は已に馬を進めて擲出しかども、宋江に誤あらんことを恐れ、又引回して只宋江が左右に隨ひ、空しく戰を遠見す。扱宋江は鐵笛仙馬麟が祝龍に敵しがたく、摩雲金翅歐鵬は一丈青に勝

がたき體を見て、心中慌てける處に一彪の軍馬敵の横合より衝入しかば、宋江大に悦でこれをみるに、此大將は則ち霹靂火秦明なり。此人原來短氣急性の勇士なるに、況んや此度黃信を敵に活捉れしかば、恰も奔雷のごとくに吼て、彼狼牙棒を揮ひ、便ち馬麟に替つて、直ちに祝龍を望て打て蒐る。然れば祝龍も又馬麟を棄て秦明と相戦ふ。馬麟は又王英を奪ひ回さんとて、再び兵を引て敵陣に突き入りしかば、一丈青遙かにこれを見て、歐鵬を棄て馬麟に斬てかゝる。馬麟又これを迎へ、互に兩刀を交へ、武藝の秘術を盡しけるに、恰も風の玉屑を翻し、雪の瓊華を撒すごとくなりけり。

宋公明兩祝家莊を打つ

宋江はこれを見て、只呆れたる計なり。扱秦明は祝龍と鋒を交へ、戦ひ未だ八九合に及ばざるに、祝龍はや危く見えし處に、祝龍兄弟が武藝の師樂廷玉鐵槌を帶し、鎗を燃つて飛ぶがごとく跑出ければ、歐鵬又軍器を擧て相迎ふ。樂廷玉あへて馬を交へず、鎗を斜に拖り逃げるに、歐鵬勢に乗じて追蒐しかば、樂廷玉急に鐵槌を飛せて歐鵬を馬より下に打落しぬ。鄧飛是を見て鐵鎗を舞し馬を躍せ、樂廷玉に擲て蒐る。此時宋江は三軍に下知し、急に歐鵬を救はせ、再び馬に乘らしめけり。樂廷玉は鄧飛には目も掛けず、直に秦明に擲蒐つて、戦ひ已に二十餘合に至れ共、未だ勝負分たざりし處に、樂廷玉詐て逃げしかば、秦明棍を舞して追來る。樂廷玉は荒草の内に逃げ入りしに、秦明伏勢あるとはしらすして、相續いて馬を跑入し處に、敵の伏勢左右より索を引て、秦明が馬を纏ひ倒し、遂に秦明を活

捉て、一度に咄と勝鬨を作りしかば、鄧飛これを見て大に怒り、慌しく來て秦明を救はんとせしに、兩邊より又鎗索を以て、鄧飛を馬より下に搭下し、頓てこれをも縛めけり。宋江此光景を見て大に驚き、急に馬を回して逃しかば、馬麟も又一丈青を棄て歐鵬と、ともに、宋江を保護して南の方に走り行く。樂廷玉、祝龍、一丈青等は後に隨て趕來り、漸々相近付て宋江已に危ふかりし處に、正南の方より一彪の豪傑五百の人数を引き馬を飛せ跑來る。宋江是をみるに、是沒遮欄穆弘なり。又正東の方より三百餘人の勢にて、乗込むをみるに、病關索楊雄、拚命三郎石秀を大將として救ひ來るなり。又東北の方より一人の豪傑大音聲に呼はり、祝家の一簇一人も漏すまじと罵り來るは、是則ち小李廣花榮なり。此三路の人馬一齊に至りしかば、宋江大に悦び再び兵を引回し、惣勢齊しく攻戦ふ。祝朝奉が莊上には此體を見て恐らくは親方利あらじとて、則ち祝虎を留めて莊門を守らしめ、彼小郎君祝彪一疋の名馬に乗、一筋の長鎗を持ち、自ら五百餘騎を領して莊門の外に突て出で、兩軍已に亂雜して互に勇を奮ひ功を争つて一足も引退ぞかず、四面八方に跑て攻め戦ふ。扱莊前には李俊、張横、張順等已に水を渡つて攻めしか共、莊上より手透なく、亂箭を射出しければ、李俊等三人は虚しく牙を咬で控へたり。戴宗白勝等只對岸に在て喊の聲を作るのみなり。此時天色已に晩しかば、宋江兵を一所に合せて且戦ひ且走る處に、彼一丈青急に馬を飛せて宋江を追來り、其間已に近づいて宋江はや討れんと見えける處に、黑旋風李達八十餘人を引て山坂の上より馳下り、二つの斧を揮ひ狂ひ來りしか

ば、一丈青再び馬を回して、樹林の邊を望んで馳し處に、樹林の背後より十四騎の馬軍鋒を並べて突出る。當先に一人の大將手に長柄の鎗を撚り、威風相貌諸々の豪傑に抜出で、勇氣全く人を驚かしむ。宋江馬を勒へて大將をみるに、其名天下に隠れなき東京八十万禁軍教頭豹子頭林冲なり。此時林冲一丈青を白眼で罵りけるは、汝賊女我對手には足らずといへども、梁山泊の權威を現はさん爲なれば、我今曲て汝を對手には取るぞとて、鎗を舞して擲出しかば、一丈青大に怒り、兩刀を揮つて相迎へ、戦ひ未だ十合に至らざるに、林冲故意雙の脇を開いて透を見せければ、一丈青是を見て直ちに砍入し處に、林冲鎗を揮つて兩刀を左右に打落し、頓て左の手を伸して一丈青を中に引提、遂に軍卒に命じて綁させけるに、宋江を始めとして衆皆咄と喝采にけり。林冲忙はしく宋江が前に至つて遲參の罪を謝しければ、宋江甚だ是を感心し、賢弟何の罪ありやとて、又商議して云、今日日はや日も晚ぬるに先づ軍を休ば可ならんか。林冲是を然りとし、早速李逵を走て諸頭領を招き集め、總勢を一手に合せ、村口に引取りしかば、祝家莊の軍勢も同じく莊上に引入りたり。此時敵身方に討死したる輩、幾千と云敷をしらす。祝龍は頓て活捕し頭領共を囚車に入れ、宋江をも捉へ共に東京に送るべしと圖りけり。扱又宋江は大軍を村口に引上て陣を取り、則ち四人の頭領に命じて、一丈青を梁山泊に送り、父宋太公に預け、宜しく守らしむべきよしを云ひければ、諸人皆宋公これを妻らんと、都て懇に一丈青を監押して此夜山陣に送り、又歐鵬をも先づ山陣に回して養生をなさしめけり。宋江は

終夜鬱々として眼を合せず、一向計を思案して曉に至りし處に、一人の探事の者來つて軍師吳學究自ら三阮兄弟并に呂方、郭盛等を従へ、五百の人馬を引て到着し給ひぬと報じければ、宋江大に悦び、遂に陣外に出て相迎へ、共に帳中に入て酒宴を具へ、盃數遍巡し處に吳用先づ宋江に對して云、晁頭領今已に、長兄の軍利を失ひ給ふを聞き給ひ、則ち某五人の豪傑を伴ひ、長兄を助くべしと命をうく。しらす近日の戦ひ其勝負はいかん。宋江が云、戦の始終一言の盡す所にあらずとて語りけるは、祝家莊の一族共甚だ以て惡むべし。莊門の前に二ツの白旗を樹て其上に大文字に分明に、填平水泊一擒晁蓋二踏破梁山一捉宋江一と書きぬ。我初めて攻めたりし時は、其地利を知らざりしゆゑ、楊林黃信を失ひ、其後攻めし時は、一丈青に王矮虎を活捉れ、欒廷玉が働きに歐鵬を打傷なはれ、又索を以て秦明が馬を纏ひ倒し、鄧飛も同じく活捕れぬ。已にかく身方利を失ひし處に、獨り幸ひに林教頭の力にて、一丈青を生捕り、我が兵一點の勇氣を保ちぬ。若し然らずんば、身方全く銳氣を折くべし。此後いかなる計を用ひて敵を打たんや。若し我祝家莊を打破つて、活捕れし兄弟等を救ひ出さずば誓て快よく自殺せん。何の面目有て再び晁天王に見えんや。吳用笑て云、此祝家莊此度自ら滅亡を取るなり。某幸ひ一つの便機を得たり。事旦夕に有て祝家莊を破るべし。宋江大に駭て云、軍師已にいかなる良計有て旦夕の内にこれを敗り給ふや。又其便機を得給ひしとは、いかなる來歴なるやらん、詳にこれを示し給へとて、近く進んで問ひければ、吳用が云、勝利ははや日あらぬこと

なれば、長兄まづ酒を酌で心を慰め給へ。然して後我これを語らんとて、自ら酒を持ちて勸めけり。吳用果して何等の事を云ひ出るや、次巻を見て分解るべし。

五編卷之三

解珍解寶 雙嶽を越ゆ

宋江は吳用三阮と俱に、酒數盃を酌ける處に、吳學究宋江に對していはく、今祝家莊を破るべき使機を得たると云ふ來歴は、いかんぞなれば、當比山東の海邊に登州と云ふありける。此登州城外、數里ならずしてひとつの山あり。山の上には多く豺狼虎豹、動もすれば人を傷ふゆる、則ち登州の知府當地の里正等呼び集め、日を限りて村中の者共に豹虎を捉しむべき旨を仰せ、若し日限を背く者あらば、重く罰を行ふべしとて、豫じめ公文を以て村々在々の獵戶等に觸たるに、此節山の下に兩人あり。解珍が綽名を兩頭蛇と云ひ、弟解寶が綽名を雙虎嶋と云ふ。父母は俱に歿して未だ妻を娶らず。兄弟各七尺餘高の身材にて相貌極めて兇猛なり。此兄弟此夜先づ豹虎を捉ふべきのよしを里正より命せしゆゑ、則ち腰刀を帶し弓箭を持ち、山上に登り此彼に徘徊し、豹虎を尋ね、夜も漸々四更の前後に至りて兄弟頗る疲れ、互に背を合せて厮靠れ、已に睡んとせし處に、忽ち野外に弦音響きしかば、兄弟齊しく走り出でて四下を顧るに、一ツの大虎毒箭に中て跑來り、身を地上に撲て只管狂ひけるに、

兩人の者これを見て、急に刀を揮て馳倚しかば、彼虎人の來るを見て、再び半山に跑上りぬ。解家兄弟急に追蒐けるに、彼虎漸々毒氣惣身に透り、遂に勝へずして四足を踏住むるとみえしが、頓て身を翻し山の下に滾落けり。解寶是を見て、兄に對し云ひけるは、虎の落ちたる處毛太公が後園の内なり。我輩速に馳せて虎を求むべしとて、兄弟山を下り毛太公が館に至り、門を敲し處に、天色はや明けたりけり。此時毛太公自ら出て兄弟の者を迎へ内に入れれば、兄弟懇懇に告げて云けるは、今朝貴館に拜候するは他事にあらず、夜來一疋の虎を太公の後園に趕落せり。望むらくは自ら園の内に入つて、これを求んことを願ふ。しらず太公肯て許し給はんや。太公が云く、既にかくのごとくんば、足下等兩人昨夜より疲れ給ひしならん。先づ酒を酌給へとて、頓て酒肴を具て兩人を款待、再三懇に勤て酒已に數巡にいたりしかば、解家兄弟急ぎ虎を取るべしとて、遂に太公に隨て後園に入り、四方遍ねく搜しけれ共、曾て其虎なし。太公が云く、足下らは夜中定めて看誤て我園の内に落たると思ひ給ふらん。又宜しく他所を尋て見給んや。解珍が云く、某ら兩人原當地の者にて山上山下の案内を知りたるに、何ぞ見誤ることあらん。毛太公が云く、然るに又虎のあらざるはいかん。解寶が云く、我自ら眼を明らかにして、此内に陥りたるを見届けぬ。是れ見給へ。地上にも血の跡を遺せるに、豈虎のなからんや。恐らくは太公の家人是を藏せしならん。毛太公が云く、何ぞかくのごときことを云ふや。必ず我家に藏したらんと疑ふことなけれ。解珍が云く、我輩は是れ官府の命を受け日を限りて

此虎を求む。若しこれを得ずんば必ず重罰を蒙むらん。太公早く還し給へ。太公忽ち大に怒つて、汝らかく非道を云ふは、其心底に賊氣あり。若し再び言を争ば、我れ痛く汝等を打傷はん。解家兄弟猛然として、鬚を倒に豎汝老賊虎を奪うて己れが功にせんと圖るや。汝に手段を見せんとて、傍にある欄杆の木を扭折て、直ちに毛太公を望んで打て蒐る。毛太公急に聲を揚て解珍解寶白晝に來つて賊をなすと呼はりけるに、俄に五六人の家人棒を提て出しかば、解家兄弟これを左右に打倒し、直ちに門外に馳出て呼はりけるは、毛太公老賊我れ今官司に訴へて事を分明に正すべきぞとて、已に官司へと馳けるに、途中に於て毛太公が息毛仲義に遇しかば、解珍これを迎て、汝が家人共我輩が殺したる虎を奪ひ取つて還さしりしゆゑ、我今汝が家を關しめぬ。又今官司にこれを訴んと馳るなり。汝よき存念なきや。毛仲義が云く、我家人等は皆鄙き村夫なれば、必定かゝることもあるべし。父太公も又家人等に諫られ、信を失ひたるにや。汝兩人速に我れに隨て再び家に來れ。若し虎を藏しあらば、我早速汝らに還さん。兄弟の者大に悦び、則ち毛仲義に隨つて又毛太公が館に行きけるに、毛仲義兩人の者を引き門内に入り、頓て門を守る者に命じて、門を關さしめ、忽ち大音聲に、人や有るはやく出よと呼はりしかば、左右より二三十人の漢子毎手に棒を持ちて馳せ出で、直ちに兄弟の者を望んで打てかゝる。兄弟の者これを見て大に怒り、ひとしく手足を飛せ十餘人を打伏しか共、遂に大勢に捉れけり。毛仲義大に罵つて云く、彼虎は昨夜我射たる虎なるゆゑ、向に汝等酒を飲んで在りし時、我はや



是を官司に送りぬ。汝白晝に來つて賊をなさんとするは、最も大罪なり。我今汝等を官司に送て一害を除んとて、遂に囚車に載しめ、一包の贓物を設け、則ち解家兄弟を盜賊と名付け、官府に送り遣しけり。時に登州の六案孔目姓は王名は正と云ふは、毛太公が婿なりしかば、豫じめ知府に繕ひ告げて、解家兄弟が罪を語りければ、知府これを信じ、解家兄弟を廳前に引せ大に怒て云く、汝擅に弓箭刀を帶し、妄りに虎を尋るに事託賊をなすはいかん。已に一包の贓物ある上に、必ず是を抵賴ことなされ。解家兄弟これを分説せんとする處に、王孔目知府を諫て、痛く拷問なさしめければ、兄弟の者に勝ず、早速賊情を白狀して自ら罪に陥りしこそ哀なれ。知府左右に命じて、兄弟の者に頸枷を掛させ、遂に死囚牢に遣しけり。扱毛太公父子は解家兄弟を殺して、後患を免れんと圖り、上下の役人に多く賄賂を送りけり。扱登州城の牢獄を掌る第一の節級、姓名を包吉と云うて不善の者なりけるが、此回毛太公が賄賂を得、且王孔目が言を信じ、即日解家兄弟を呼び出し、大に罵りしかば、兄弟の者無實に罪を受けたることを告げられ共、包節級これを耳に聞き入れず、近日の内汝らが一命を害せんとて、再び牢中に遣はしけり。茲に又一人の小節級ありけるが、牢中傍に人なきを見て、暗に解家兄弟の者に對して低言けるは、我足下兄弟とは縁者たりといへ共、只音に聞くのみにて未だ遇ざりしに、今日想はず此處にて對面するこそ憂けれ。唯しらす兄弟の人は我を知り給ふや。又看たりし人ありや。我は則ち足下等の表兄孫提轄の妻舅なり。解家兄弟之を聞き、忽ち思ひ出して云く、已にかくの

ごとくは樂和長兄にてはあらずや。小節が云く、我則ち姓は樂名は和原茅州の者なり。人皆我が綽號を鐵叫子と呼び慣せり。我姐夫孫提轄我武藝を好むを悦んで、曾て鎗法を教へ給ひぬ。我今兄弟のとは縁類の好と云ひ、況んや足下ら是有名の豪傑なれば、我何とぞ此難を救はんと心を用ゆれ共、唯恨らくは彼の包節級毛公が賄賂を受けて、足下らを殺さんと圖る。猶いかなる計を施し足下兩人を救んやとて、沈吟しける處に、解珍が云く、長兄もし彌々我等を救はんとの慈念あらば、我らが爲に去る方へ音信を通じ給へ。樂和が云、足下等今消息を誰人に通せしめ給ふや。解珍が云、我親昔日一人の甥女を養子として、我等兩人が姐となしけるが、今已に孫提轄の弟孫新に嫁し、則ち此登州城の東門の外に住して酒を商賣す。我此姐は勇力武藝男子に勝れて、四五十個の人敵すること能はず。其名を母大虫顧大嫂と申す。別して某等兄弟を憐む。足下もし此姐に消息を通じ給はば、彼必ず自ら來つて我輩が一命を救ふべし。樂和が云く、顧大嫂の事は我も曾て聞き及ぬ。汝兩人先心を寛げ給へ。我自ら急に顧大嫂を問うて宜しく商議すべしとて、遂に牢中を出で、東門の外十里計馳ければ、はや一軒の酒店あり。樂和忙はしく内に入つて、顧大嫂にまみえて問ひけるは、此家は孫新長兄の住宅なるや。顧大嫂がいはい、貴客は孫新を問ひ給ひて何の事ありや。樂和が云、某は孫提轄が妻舅樂和と云ふ者なり。今急事ありて自ら來れり。又顧大嫂が云く、節級はもと我家とは縁者たるに依て、常に大名を聞き及びしに、今日又いかなる事にて光臨を惠み給ひしぞ。樂和が云く、今我牢中に兩人

の罪徒來りけるが、此人らが大名は、我久しく聞き及びしか共、對面は這回が痴めてなり。一人が名は兩頭蛇解珍、一人が名は雙尾蝎解寶と、未だ云ひも終らざるに、顧大嫂驚きていはく、此兩人は則ち我弟なり。しらす何の罪を犯し入牢しけるぞや。樂和がいはいはく、彼兩人前夜一ツの虎を射て、毛太公と云ふ者の園の中に追落しける處に、毛太公此虎を藏し、剩大勢を以て遂に兩人を擒、撞に賊情を告げて登州府に引き渡し、なかんづく包節級に多く賄賂を送り、近々牢中に於て兩人の命を害せんと圖る。某何卒これを救ひたく思ども、孤力を以て及ぶ處にあらざれば、今日此に至て此消息を知らしめ申し、殊に兩人の兄弟も、此事を大嫂に知らしめて乃ち大嫂の力を借んと欲す。若し急に救ひ給はずんば、恐らくは誤あらん。疾々計を回らし給へ。顧大嫂是を聞て大に駭き、慌しく人を馳せて丈夫孫新を呼びて、樂和に對面なさしめけり。此の樂和と云ふ人は、元來聰明伶俐にて諸般の樂品のことを曉し、鎗棒武藝能くせざる所なし。扱又た孫新は、兄孫立の武藝を學び得て能く鎗を使ふ。世の人孫氏兄弟を古への尉遲恭に比して、病尉遲、小尉遲と綽名せり。其祖瓊州の人官軍の子孫なり。時に顧大嫂、樂和が來意解家の兩人入牢の事をかたり聞かせけるに、孫新先づ樂和が深志を謝し、已にかゝる上は、樂長兄先づかへり給へ。我れ夫婦は、宜しく長遠の計を定めて、後より長兄の家に至るべし。顧大嫂置酒して樂和を款待、又一包みの金銀を樂和に附與し、舅々樂和を敬ひ、是を以て牢中にて左右する們へも分ち與へ、彼れ是れの使用になし給はるべしとて、懇に頼みける。樂和又孫新に

對し、若し某を用ひ給ふ所あらば、外ならぬ縁者なれば、身を捨て力を併すべし。隔心なく示し給へとて、別れて城中に回りけり。

孫立孫新大に牢を劫す

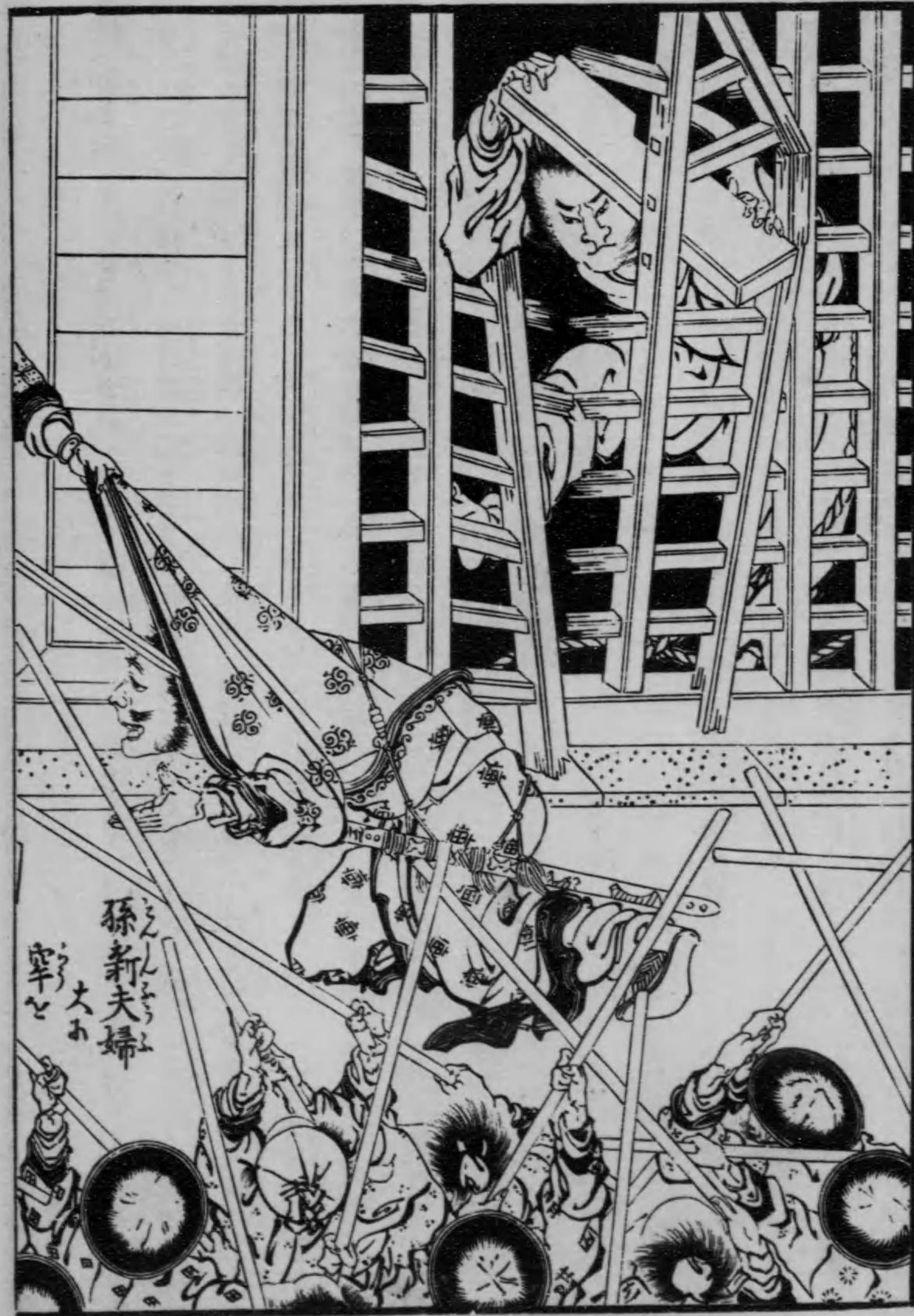
顧大嫂孫新に問て云く、丈夫何の計を以て兩人の兄弟を救ひ給はんや。孫新が云く、毛太公は元來錢財多く勢ひ有者なれば、必定兩兄弟を害せんと圖て、自ら休こと有まじ。遲疑せば立處に悔ることあらん。此上は只牢を劫て救はんのみ。他の分別にては必定間に合まじ。顧大嫂が云く、然らば我丈夫とともに今晚行ば可ならんや。孫新笑て、汝何ぞかく思慮全たからずや。我汝と牢を劫ひ、行方をも豫じめ定むべし。今牢を襲んには、我兄孫提轄并相知れる叔姪鄒淵鄒潤を得ずんば、頗る難き處あり。但し鄒淵鄒潤は頃日登雲山に在て、衆を集め専ら人家を劫うて強盜をなす。原來我と交り厚し。若此兩人を得て力を併しめば、此事忽ち成就せん。顧大嫂が云く、登雲山は此處より遠からざるに、丈夫自ら連夜に馳行て彼兩人を誘引し給へ。孫新が云く、我則ち今行べしとて、遂に登雲山に上りけり。顧大嫂は酒宴を具豊かに設て待居ける處に、黄昏に至て孫新兩人の豪傑を引て歸り來る。扱此叔の鄒淵は、原萊州の産にて、人となり忠良直實の上、更に又武藝の達人にして、氣性高強なるによつて、かつて世に容られず、江湖の上に流落ぬ。人皆呼で出林龍と綽名せり。又姪の鄒潤は幼年の時より叔が氣質に似て人となり尤も信あり。天性異相にして腦後に一つの瘤あり。是によつて獨

角龍と混名せり。身の丈七尺許にして大方の勇士なり。此時顧大嫂自ら兩人の豪傑を延て後堂に至り、頓て酒宴を具へて饗應し、此度の一儀を委しく告て牢を劫ふべきことを議しければ、鄒淵が云ふ、我が山陣に都て八九十個の人あれ共、用に中らん者は二十人に過ぎまじ。もし此事を倣し就せなば、當地に安身能ふまじ。我却て身命を立てべき處あり。しらす汝夫婦は肯て往給ふべきや。顧大嫂が云く、遮莫水火の内になり共、我等夫婦肯て同往せん。只我兩人の兄弟を宜しく救ひ給ふべし。鄒淵が云く、今梁山泊大に繁昌して、晁宋兩頭領専ら賢を招き士を納む。彼内の頭領にも、我知音三人あり。錦豹子楊林、火眼狻猊鄧飛、石將軍石勇と云ふ者なり。我輩彌々牢を劫て、兩人の兄弟を救ひ出さば、皆共に梁山泊に入て災を免るべし。汝夫婦の所存はいかん。顧大嫂大に悦で云く、若果して梁山泊に上りなば、身を安んじ命を立てるに足ん。誰か敢て叔々の言を背く者あらん。鄒淵が云く、猶一つの事あり。もし我輩彌々彼兄弟を救ひ出さば、必然登州府より軍馬を馳て追しめん、何を以てこれを遮んや。孫新が云く、我兄孫立今登州府兵馬提轄の官をなす。只是一人武勇勝れ、其餘は齒に掛るに足ず。我明日自ら趣て兄孫立と商議を遂んに、何の難きことあらん。鄒淵が云く、恐らくは彼梁山泊に来るまじ。必ず率爾に商議し給ふな。孫新が云く、我自ら一つの計あり。明日我兄に見えていふべきは、我妻顧大嫂今重病に臥て旦夕保ち難し。願はくは長兄夫婦自ら駕を枉給ひてこれを見給へと誑て、遂に誘引して回り、宜しく言を竭し承允あらしむべし。鄒淵是を聞て然りと同じ

ければ、孫新翌日家人等に二つの輜を擡しめて、飛がごとく孫立が家に馳行けり。顧大嫂は兩人の豪傑と共に消息を待たび居ける處に、孫新已に兄と嫂々を二乗の輜に乗しめ、再び家に回りしかば、顧大嫂自ら出てこれを迎ふ。孫立夫婦顧大嫂を見て、大に驚て云、汝は重病に臥て在と聞けるに、いかなぞ自ら出て相迎るや。顧大嫂が云く、我が病は實に人を救ふの病なり。孫立が云く、怪かな人を救ふ病と云は如何。顧大嫂が云、伯々は未だ聞給はぬや。我弟解珍解寶前日毛太公が計ひに無實の罪に陥され、今已に牢中にあり。故に我ら夫婦牢を劫て救ひ出さんと計り、則ち登雲山より兩人の豪傑を迎へ、共に議をなす。もしいよく救ひ出さば、直に梁山泊へ上らんと欲す。恐らくは明日事出來せん。其時禍ひ伯々に及ぶべし。此ゆゑに我病に托して、伯々夫婦を迎へ、共に長遠の計を議せんと欲す。伯々若梁山泊に来り給すとも、我輩は決然馳行べし。當世の朝廷毎事明かならずして、奸臣志を得賢臣志を失ふ時なれば、天下の民畢竟無事を保ちがたし。諺にも火に近づけば先焦ると云ふ言のごとく、我輩もし事を倣しなば、伯々先禍を蒙て、入牢し給ふべし。願くは伯々自ら明かに察し給ひて、我輩と同心し給はんや。孫立が云、我はこれ登州の官軍なるに、豈よく汝等とともに、かくのごときことをなさんや。顧大嫂これを聞て忽ち刀を抜て云けるは、伯々今我輩が心腹の言を聞給ひても、同心し給はずんば、我決して伯々を免さじとて、已に刀を揮て近づきしかば、鄒淵鄒潤も同じく、刀を舞して左右に相從ふ。孫立これを見て急に呼で云く、嬌々先怒りを息よ。我

又肯て宜しく商議せん。顧大嫂が云く、此企はもと伯々の妻舅樂和節級の諫に依てなす所なれば、再三遲疑し給ふことなかれ。我輩急に馳て牢を劫ふべき間、伯々は其暇を窺ひ、速に行李等を收拾め給ひて、共に梁山泊に上り給へ。孫立嘆じて云く、此上は我力を併すべしとて、一處に商議をなしにけり。先鄒淵を登雲山に回らしめて人数を催させ、又孫新を城下に遣して、暗に樂和に消息を通じ、解家兄弟に斯と告知せけり。翌日鄒淵は二十餘人を催し、再び孫新が家に至りしかば、孫新も又心腹の者七八人を催し、孫立も同じく手下の軍卒十餘人を呼集め、都て四十餘人已に用意を調へて各軍器を帶し、二手に分て城下へと馳行けり。獨顧大嫂は詐て牢中に飯を送る女に出立、先牢門の邊に至りけるに、樂和ははや此邊に待て在けるが、顧大嫂を見て、故意しらぬ體にもてなし問けるは、汝は何女なれば、牢門に近づくや。顧大嫂答て、我は牢中に飯を送る者なりと云しかば、樂和やがて門を開て、顧大嫂を入しめたり。此時彼包節級は、東廊の邊に在けるが、顧大嫂を見て忽ち責て云けるは、此女は誰なれば、妄りに牢中に飯を送るや。古の語にも牢獄には風をも通せずと云なるぞ。樂和が云く、此女は解珍、解寶が姐なり。自ら飯を携て牢中に送る。包節級怒て云く、汝いかんぞ彼を放て牢中に入しむるや。汝宜しく彼女に替て飯を牢中に送れ。樂和これを聞て、即ち飯を乞取、遂に牢中に入て解家兄弟に與へければ、解珍暗に問て云く、昨夜云給ひしことはいかかん。樂和が云く、今汝の姐此飯を携て來り給ひぬ。少刻手を下すべき間、頸枷を除き待給へとて、匙を與へし處に、一人の小牢子進







み入て、包節級に告て云く、孫提轄来て牢門を敲き給ふ。包節級が云く、彼は府中の軍官なるに、牢中に入て何の事かあらん。必ず門を開くことなかれと、未だ云も終らざるに、又一人來告て云く、孫提轄只願焦燥て緊しく門を敲く。包節級大に怒り、自ら走り出んとせし處に、顧大嫂刀を揮て迎へ進みしかば、包節級是を見て、急に逃んとしける時、解珍解寶牢の窓を鑽出でて、包節級に向ふ。包節級逃行べき所なく、遂に解寶に頸枷を以て眉間を打碎れ忽ち地に倒て死にけり。解珍も亦頸枷を以て小牢子四五人を打伏ければ、顧大嫂は刀を揮て五六人斬殺しぬ。牢中總て三五百の小牢子ども、大に喊き叫で牢外に打出けるに、孫立孫新これを迎て散々に斬拂ふ。鄒淵鄒潤ははや王孔目が首を取て州裡より馳來り、直に城外に打出る。解珍、解寶、樂和、顧大嫂等四人の者どもは、許多の人を殺して、遂に城外に馳出しかば、孫立孫新兩人は同く殿後して城門の外に打て出で、諸人再び孫新が家に回て、孫立が妻樂氏を車に載しめ、顧大嫂は馬に乗、即日衆皆梁山泊へと進發す。解珍解寶諸人に對して云けるは、我若彼毛太公老賊を殺さずして、いかんぞ此冤を雪んや。孫立が云く、汝らが言尤然りとて、即ち孫新樂和は車に跟しめ先に進せ、己は解家の兄弟鄒家の叔姪共に、數十個人を引て直ちに毛太公が家に馳けるに、毛太公父子は思ひ寄りざりし事なれば、大に仰天し腰を抜しける處に、孫立已に亂れ入つて、毛太公毛仲義ならびに一家の眷族悉く斬殺し、又金銀財寶馬刀等を奪て、各馬に打乗り急に後を慕うて馳ける程に、纔か三四里に至て車に追着、再び人數を備て急しか

ば、日あらずして梁山泊の下石勇が酒店に至りて鄒淵先石勇に對面し、頓て楊林鄧飛等が事を問ければ、石勇答て云く、彼兩人は宋頭領に従て祝家莊を攻けるが、兩度の戦に利を失ひ、楊林鄧飛其外數輩の頭領遂に敵方へ生捉れたり。祝家の三兄弟皆強勇なるに、其上武藝の師樂廷玉と云者有て、戦を助けしゆる、親方已に敗北しぬ。孫立これを聞、大に笑て云けるは、某ら今山陣を頼んで伺候すれども、未だ一點の功あらず。幸ひ這回一つの計を獻じ、忽ち祝家莊を踏破らんはいかん。石勇悦んで云く、願くは良計を聞ん。孫立が云く、彼樂廷玉は原某と武藝の同門にて、彼が學び得たる所の武藝は我も亦知らずと云ふ所なし。我輩此度登州より鄆州に移る體にもてなし祝家莊を過り、乃彼樂廷玉を訪ふべし。然らば彼必然自ら出て我輩を迎ることあらん。こゝに於て内應外合の計を行は、大事立處に成べし。しらす此計はいかん。石勇これを聞、究て神なり妙なりと思ふ處に、吳用今山を下て祝家莊に發向有と注進の人ありしかば、石勇急に吳學究を迎て孫立が計を告んとて、自ら門外に出て望見るに、吳用はや三阮兄弟ならびに呂方郭盛等とともに、五百の人馬を引て店の前にいたりたれば、石勇迎へて内に入り、頓て孫立等と呼出し、吳用にまみえしめ、計の次第一々詳に語りしかば、吳用是を聞て大に悦び、則ち孫立等に對して云けるは、足下等いよく肯て山陣の爲に計を施し給はんとならば、今日は先山陣に上り給はずして、我輩と共に祝家莊に赴き、速に計を行つて功を全うし給はんや。孫立らは是を聞て大に悦び、衆皆心を傾けて領掌す。吳用が云く、我人馬は先

に馳べき間、諸豪傑は後より進み給へとて、吳用は遂に人馬を催促して祝家莊に至り、先兄弟に見えて其動靜をみるに、宋江は大に憂愁して、顔色快からざりしかば、吳用まづ自ら酒を以て宋江を慰め、然して後に、此祝家莊を破るべき便宜を得たと云ふ來歴を告て云けるは、今登州の兵馬提轄病尉遲孫立と云者、難を避て山陣に來りけるが、祝家莊の師樂廷玉とは原武藝の同門なるゆゑ、幸ひ一つの計を獻じて祝家莊を暫時に踏破らんと議定し、總て八人數十個の人を引て、少刻此處に到着す。所謂計は内應外合の企なり。宋江是を聞て大に悦び、頓て諸頭領と共に、孫立等が到るを待けり。孫立は手勢四十餘人を車に従はしめて傍に安置し、只彼解珍、解寶、鄒淵、鄒潤、孫新、顧大嫂、樂和等と共に都て八人、已に至て宋江に拜謁し、各禮已に畢りしかば、宋江はや酒宴を具てこれを饗應しける。扱又吳學究暗に號令を傳へて、諸頭領に計を授て云く、第三日にはかくのごとく行ひ、第四日にはかくの如く行ふべしと分撥已に定りしかば、孫立等も又計を授け、右の手勢四十餘人を引て遂に祝家莊に馳行けり。吳用又戴宗に對して云く、戴院長は今再び速に山陣に回り給ひて、鐵面孔目裴宣、聖手書生蕭讓、通臂猿侯健、玉臂匠金大堅、此四人の頭領を誘引して早々來り給へ。我自ら此四人を用ふべき所あり。戴宗命を請て則ち遂に梁山泊へ急ぎけり。かゝる處に、一人の軍士來て宋江に報じていはく、西の村扈家莊より、扈成自ら牛を牽せ酒を擔せ陣外に馳來りて候。宋江是を聞き、則ち陣中に呼入れれば、扈成頓て帳前に至り宋江に拜謁し、懇に告て云けるは、某が

妹、年幼して事を曉さず、妄りに威顔を犯して今己に縲綆の辱を蒙りぬ。彼は先達て祝家莊の第三子と紅糸の縁を結びしゆゑ、此度の戦ひに救ひの兵を出したり。願くは將軍廣く仁慈を垂れ給ひて、妹が一命を饒し給へ。若軍中に何等の物入用に候とも、某肯てこれを獻じ奉らん。宋江が云く、足下先寛坐して談話給へ。彼祝家莊の一族ども未だ曾て仇あらざるに、一向我山陣を恥辱るによつて止がたく、此冤を報んが爲此度已に軍馬を起して推寄ぬ。我輩此所の地理に達せず、しばし敗軍に及べども、日あらず祝家莊を打潰し、一赤土となさんこと遠かるまじ。我元來足下の家とは仇もなく怨もなし。只汝が妹一丈青我王英を活捉しゆゑ、我又禮を回して足下の妹を活捉ぬ。汝もし王矮虎を回さば、我又汝の妹を還すべし。扈成が云く、王頭領は今某が方にあらず。吳學究問て云く、然らば王英は何れに在や。扈成が云く、王頭領は今祝家莊にあり。某いかんぞ能これを求んや。宋江が云く、汝もし王矮虎を取て我に還さずんば、豈よく妹を得ることあらんや。吳用又云く、足下彌妹一丈青を救んとならば、向後祝家莊に軍あるとも、これを救ふことなけれ。祝家莊の軍士若汝の家を頼て來る者あらば、早速絆て我が方に送り給へ。然らば我肯て一丈青を還すべし。況や一丈青は前日已に山陣に送りて、宋太公に預置、殊更懇に介抱ある間、足下心を安んじ回るべし。後日足下の所爲を見届け、此方より送るべし。扈成が云く、某自今以後祝家莊を助くまじ。若彼が軍士我が方に來る者あらば、早速之を縛め、將軍の麾下に獻すべしとて、遂に別れ回りけり。

吳學究連環の計を雙用ふ

偕も彼孫立は旗號の上に、登州兵馬提轄孫立と云ふ八字を大字に書、統て四十餘人を引て祝家莊の後門の前に至りしかば、莊上の軍士等是を見、頓て内に入り斯と告げれば、樂廷玉これを聞て、祝家三兄弟に告て云く、彼孫提轄は原某と共に一人の師に従つて武藝を學びし者なるが、今日此處に至るは何故やらん。某これを迎て問ふべしとて、則ち吊橋を下し迎へしかば、孫立ら遂に馬を下り、橋を過て内に入り、各禮畢りし處に、樂廷玉先孫立に問て云く、賢弟は登州に在て暇なく勤め給ふと聞けるに、今日は何等の事有て當地に至り給ひしぞ。孫立答へて云く、某這回鄆州を守りて梁山泊の強賊を防ぐべしとて、總兵府の文書を授けられ、今日妻子を携へて鄆州城に發向す。即ち此處を過て長兄當莊に居給ふと承はり、敢て來つて起居を伺ひ奉る。本前門に至らんと欲しけれ共、村口に入馬多く屯したるゆゑ、小路を過て後門に至れり。樂廷玉が云く、頃日梁山泊の強盜等と相戦ひ已に數輩の頭領を活捉ぬ。近日の内宋江を捉へて共に官司に送らんと欲す。幸ひ今賢弟來つて、此邊を守り給ふは、恰も錦に花を添るがごとし。孫立打笑つて云く、其不才たりといへ共、長兄を助けて宋江を擒に、速に功を建しめ進らせん。樂廷玉これを聞て大いに悦びしが、頓て孫立が人數を莊内に引入れ、再び吊橋を拽起莊門を關しけり。此時祝朝奉父子四人廳上に出ければ、樂廷玉自から孫立等を引て廳上に至り一々見えしめ、各禮了りし處に、樂廷玉先祝朝奉に告て云けるは、此賢弟は則ち病尉遲



孫立と號して、登州の兵馬提轄なり。今總兵府の命を奉りて、此邊鄆州城を守るゆる、今日此に至りぬ。祝朝奉が云く、已にかくあらば、某が此處も亦提轄の支配の地なれば、諸事下知を蒙むるべし。孫立が云く、某がごとき小職何ぞ論ずるに足ん。向後只朝奉の懇志に預らんとて、又三人の兄弟に對して云けるは、連日の戦ひに嘸神を勞し給ひしならん。祝龍が云く、某ら朝廷の爲に驚鈍の力を盡すといへ共、未だ勝敗を決せずして頗る氣を屈せり。孫立、此時孫新、解珍、解寶等三人を呼んで祝太公父子にまみえしめて云く、此三人は則ち某が兄弟なりとて、又樂和を指ざし、此人は是鄆州より登州に至り給ひぬる使者なり。又鄒淵鄒潤を指ざし、此人は則ち登州より送り來りし兩人の軍官なり。某同往せし内に、武藝不鍛練の族一人もなし。朝奉もし事あらば、隔心なく一方の用を示し給へとて、一々對面させけり。祝朝奉父子原聰明の輩なれ共、孫立に誑れ、況や樂廷玉が武藝の同門たることを聞いて一點も疑はず、牛を殺し馬を宰て酒宴をなし、饗應尤豊なり。孫立已に兩日を過しける處に、第三日の朝、一人の兵來つて報けるは、宋江又兵を發して莊上に寄來る。祝彪が云く、我自から向つて此賊を生擒んとて、百餘騎を引て莊外に打出けるに、はや五百餘の人馬進み來る。小李廣花榮當先に在て馬を躍らせ、鎗を撚つて戦ひを挑みしかば、祝彪是をみて大いに怒り、同じく鎗を撚つて擲かゝる。花榮これを迎へて鎗を交へ、兩人の豪傑獨龍岡の前に在て、一往一來術を盡して勝を争ひ、戦ひ已に十餘合に及べども、未だ勝負分らざりし處に、花榮詐つて逃ければ、祝彪後に隨つて追

行處に、一人の兵諫めて云く、相公必ず花榮を追ふことなけれ。彼は弓箭の高手なるに、恐らくは誤あらん。祝彪これを聞いて急に馬を回し、先兵を收めて莊内に馳入けり。孫立則ち祝彪に問て云く、小將軍今日は何賊を捉へ給ひしぞ。祝彪が云く、今日は小李廣花榮とやらん云賊の頭領出て、某と十餘合戦ひけるが、遂に逃しゆゑ、某是を追撃せんと思ひしか共、渠は原弓矢の達人たるに依て、敢て長追せず、先兵を收めて引回しぬ。孫立が云く、某不才たりといへ共明日彼ら數人を生捕て一覽に入れんとて、先今日の軍は休けり。翌第四日午の上刻に又一人莊兵進み入て云く、宋江が人馬又寄來る。已に莊前に至れりと報ければ、祝彪祝彪各莊前に出て門外を望み見るに、敵の軍中に金鼓大いに打鳴し、はや陣勢を張りぬ。此時祝朝奉も又莊門の上に出ければ、左りには樂廷玉あり、右には孫提轄あり。其外息三人ならびに孫提轄が携へ來りし勇士共、悉く前後左右に立並ぶ。宋江が陣中より豹子頭林冲當先に進み出て、大音聲に惡口して罵りしかば、祝龍これを聞て大いに怒り、急に鎗槍綽て馬に乗り、一二百人を引て門外に斬て出で、直ちに林冲が勢に跑合、兩軍同じく攻鼓を擲て相戦ふ。時に林冲鎗を撚つて祝龍を相迎へ、戦ひ已に三十餘合に及べども、勝負分たざりしかば、兩軍互ひに金を鳴らし、先雙方に引せけり。祝虎これを見て大いに怒り、刀を舞はし陣前に騎出し、大音を揚げ戦ひを挑みければ、宋江が陣中より沒遮欄穆弘鎗を輪して、祝虎に渡り合ひ、兩將勇を奮つて戦ひ、また三十餘合程に至れ共、更に雄雌分たず。祝龍これを見て、甚だ焦燥、二百餘騎を率して莊外に打

ち出でしかば、宋江が後より病關索楊雄馬を飛せ突て出で、直ちに祝龍を迎へて相戦ふ。この時孫立は莊上に在て兩軍の戦を見、急に衣甲を着し、軍器を取鳥驢馬と云ふ名馬に乗つて、莊外に跑出、故意惡口して罵しりけるは、宋江反賊我れ今日汝を殺さんに、早く出て一死を乞ふべし。宋江が陣中より拚命三郎石秀鎗を擧げて擲て出で直ちに孫立と馬を交へて相戦ひ、已に五十餘合に至つて孫立五六歩計り馬を退けしかば、石秀相繼いで擲入し處に、孫立早くもこれを避け、遂に猿臂を舒して石秀を揪へ、頓て索を懸にけり。祝家兄弟これを見て、勢ひに乗じ攻め戦ひ、宋江が兵を四方八面に追散し、先三軍を收めて莊内に引取皆々孫立にまみえて喜こび賀しけり。孫立問て云く、活捉の賊總べて幾人ありや。祝朝奉がいはいく、初め時遷と云ふ賊を捉へ、次に細作の賊楊林と云者を捉へ、其後また黃信、王矮虎、秦明、鄧飛等を生捕、今又將軍石秀を捉へ給ひしかば、總て活捉七人なり。孫立が云く、速に七つの囚車を調へて、彼等を此内に入れ置毎日酒食を與へて身の養生をなさしめ給へ。後日宋江を生捕なば、共に東京に送て武命を天下に振ふべし。祝朝奉父子これを聞て、大いに孫立に謝して云く、此度幸ひに將軍の助けを蒙むることなれば、宋江を生捕んこと難からじ。誠に梁山泊の滅亡時至れりと悦んで、遂に酒宴を始めけり。扱此石秀が武藝孫立に劣れるにはあらざれ共、いよく祝家莊の輩を誑ひいて、孫立を敬はしめんが爲、故意孫立に捉はれしなり。はたして是より益祝朝奉父子孫立に信服し、毛頭疑ひなかりけり。孫立又暗に鄒淵、鄒潤、樂和等を後門の邊に馳て、逼く

出入の路筋を見せしめけり。楊林鄧飛らは想はず鄒淵鄒潤を看先心中に悦びぬ。樂和は左右に人なきを見て暗に計の次第を告、活捕れ在る所の頭領に知らしにけり。顧大嫂も又孫立が妻樂氏とともに、路徑を看定めて能案内を知りけり。祝家莊正に滅亡の時至りぬるにや、彌心を傾ぶけて孫立が言を信じ、半點も疑ひを入れざるこそ癡なれ。翌日孫立等衆人は事を議してありける處に、辰の下刻一人の兵來つて報げけるは、宋江が人馬又四手に分つて四方より寄せ來る。孫立が云く、遮莫何の怖ることあらん。只よく鈎索等を以て宋江等を生擒べし、若し矢石等飛物を以て殺して捉へたるは、其の功を論すまじとて、衆皆衣甲を着して軍の用意を調へけり。祝朝奉はや三人の子を引て門樓の上に入り、目を縦にして四方を望み看るに、正東の方一彪の人馬出で來る。此大將は豹子頭林冲なり。其の後に李俊阮小二五百餘人を領し控たり。正西の方に又五百有餘の人馬馳せ來る。乃ち是れ小李廣花榮なり。其背後には張橫張順兵を領し控へけり。正南の方にも同じく五百の人馬進み來る。當先に三人の大將あり。沒遮欄穆弘、病關索楊雄、黑旋風李逵等なり。總て四面の人馬一齊に攻鼓を鳴し、喊の聲大いに起る。樂廷玉これを見て云けるは、今日の敵勢格別なれば、輕々しく侮るべからず。我自から一夥の人馬を引て後門に打出、西の方の敵を敗るべし。祝龍が云く、某は前門に出て東の敵を撃べし。祝虎が云く、我も又後門に出、南の方の人馬を追拂ふべし。祝彪が云く、某は前門に馳出て賊首宋江を活捕べし。是第一肝要なり。祝朝奉是を聞て大いに悦び、多く酒肉を以つて三軍を賞し

けり。諸大將各三百餘騎を引て、莊門の外に打て出、一齊に咄と喊の聲を作り山を響せけり。此時鄒淵鄒潤は暗かに大斧を藏して、囚車の傍を奔走しつゝ、時節を伺ふ。解珍解寶は軍器を藏して後門の邊を守り、孫新樂和は前門の左右を守る。顧大嫂は先手勢を聚めて孫立が妻樂氏が車を守らせ、己は兩刀を藏して堂前に徘徊す。扱祝家莊には三回攻鼓を搦て一つの大砲を放しければ、樂廷玉ら都て敵陣に突入り、四下に分つて相戦ふ。孫立は獨り十餘人の手勢を領し吊橋の上に相控へたり。孫新は又己れ等が旗號を門樓の上に立ければ、樂和は鎗を燃つて、相圖の消息を鄒淵鄒潤に通せし處に、忽ち斧を揮て囚車を守る軍士數十人を斬殺し、七人の豪傑を囚車より出しければ、七人忽ち盡く軍器を尋ね取て奔雷のごとく吼り、前後左右に當つてはや百餘人斬倒せば、顧大嫂は兩刀を打揮て堂中に走り入り、家内の男女盡く斬殺しければ、祝朝奉大いに驚き、堂外へ逃出し處を、石秀是を斬伏て首を刎落せり。諸の頭領四面八方に跑散て、莊兵を殺せし數幾許と云ふ限りをしらす。解珍解寶兩人は後門の邊に在て、馬草の内に火を放しかば、黒烟忽ち天に沖て煌々と焚上る。四路の人馬、莊上に火の起るを見て、各力を併せ攻め来る。祝虎大いに駭ろき、急に馬を回して吊橋の邊に跑來りけるに、孫立橋の上に在て大いに罵りて云く、汝奸人何れに往くや、我あへて饒さじとて、鎗を舉しかば、祝虎再び宋江が陣中に突入りし處に、呂方郭盛齊しく刀を舞して祝虎を馬より下に擲落しぬ。莊兵共これを見て、恰も風の秋葉を吹散り、雨の春華を打殘ふごとく、四方に散て逃去りけり。孫立孫新

はや宋江を迎へ、莊内に誘引せり。祝龍は林冲と戦ひけるが、敵しがたくや思ひけん、馬を回し後門の邊に逃來りし處に、解珍、解寶一向莊兵等が屍を投出しければ、祝龍又北を望んで走りけるに、黒旋風李逵此に至り、遂に二つの斧を輪して馬より下に砍て落せり。祝彪は獨り扈家莊を望んで逃行しかば、扈成これを縛めたりしが家人等に引せ、扈成自ら宋江が陣中に送り來る所に、李逵半途に於てこれを見付、忽ち斧を揮て祝彪を砍殺し、尙吼り狂うて扈成が家人等をも散々に斬拂ひければ、扈成分説せん間もなく、遂に家を棄て延安府へ逃行きけり。李逵は直ちに扈家莊に斬て入り、扈太公并に一家の眷屬一人も漏さず都て斬盡し、兵共に下知して、家内を捜させ金銀、米錢、刀、鎗、弓矢、牛馬、猪羊遺さずこれを奪ひ取り、則ち諸軍勢に携へしめ、先宋江が陣中に送り、己れは只顧勢ひに乘じ前後左右に跑廻り、許多士民百姓を追散し、遂に一把の火を用ひて扈家莊を焼拂ひ、直ちに祝家莊を望て馳回りけり。

石秀の綽名拚命三郎を、捨命三郎に作るも同じ字義也。論者云く、祝家莊祝朝奉は農夫の豪富家とみゆ。此處は舶來本第五十回にて、祝彪五百餘騎にて打出と有り。又祝家の將三百餘騎を引て出、其餘は門樓を守るとあり。一村百姓の集勢にて、騎兵歩卒を出すにもせよ過分ならずや。蔡太師が東京の第宅に門番少なきとは、餘不都合に兵多し。作者の思慮いかん。蔡太師が門番王公の七巻目に出づ。

五編卷之四

宋公明三たび祝家莊を打つ

偕も宋江は、祝家莊の武勇烈しきに攻めあぐみたる處に、病尉遲孫立兄弟を始め、一時に豪傑を多く得たるのみならず、外には吳用が軍配あり、内には孫立が計を施しければ、三たび兵を起す間に、敗軍多かりしも、終には畢竟の謀略圖に當りて、祝家莊を攻破り、宋江已に莊内に入つて廳上に坐しければ、諸の頭領等來て功を獻す。生擒の軍士は凡そ五百餘人と記し、其外兵糧を得る事五十萬石に餘り、衣甲、弓箭、刀鎗、馬羊を得たるは其數を知るべからず。宋江是を見て大いに悦び、此回衆英雄の力を借りて全き勝を得たり。只惜むらくは樂廷玉萬夫不當の勇有るといへ共、全軍の敗北に因つて亂兵に殺されたりと覺ゆ。誠に希有の豪傑なりしをとて、一向嘆息しける處に、黒旋風李逵扈家村を焼拂て首を獻すと報じければ、宋江大いに驚いて云く、前日扈成自ら來つて我に降らんと約せしに、李逵妄りに彼莊を燒しはいかなる故ぞとて、頓て李逵を呼び入れけるに、李逵は全身血に染二つの斧を腰に挿し、直ちに宋江が前に至つて跪き、高らかに聲を勵し云ひけるは、祝龍、祝彪は某これを殺しぬ。獨り扈成を撃ちもらしたれ共、扈家莊を燒拂て扈太公ならびに一家の眷族ども都て歿盡せり。

是故に某早速來つて功を獻じ奉る。宋江是を聞て忽ち怒つて云く、祝龍は汝が殺したる證見多し。其餘はいかぞ汝が殺さんや。李逵が曰ふ、某先に祝彪を追うて扈家莊に馳せぬる所に、一丈青が兄扈成、はや祝彪を生捉て親方の陣に引かせくる。某半途に於てこれに遇、則ち祝彪が頭を刎、扈成も共に殺さんとせし處に、彼れ忙しく逃て行向を藏しぬる故、我是を打漏し、只彼扈家莊を燒き拂ひ、家内一族を斬盡しぬ。宋江大いに責て云く、汝誰命を奉て扈家莊を燒せしぞや。汝も知るごとく扈成前日自ら來つて我に降參せんと約諾せるに、汝いかんぞ擅に彼が一家を殺せしぞ。是我が號令を違ふ所なり。李逵がいはいく、長兄何ぞはや忘れ給ふや。前日扈太公女兒一丈青を馳せて、已に長兄を害せんとせり。このゆゑに我是を殺せり。長兄未だ一丈青と婚禮の議も調らざるに、はや丈人妻舅のこゝを思ひ給ふや。宋江責てはいはいく、汝かく亂りなる言を云ふことなかれ。我豈敢て一丈青を娶るの望あらんや。我今一丈青を父太公に預て介抱せしむるは原來深き所存あり。汝今日我號令に違ぬる間、軍中の法に依つて首を刎べけれ共、是祝龍祝彪を殺したる功に替て、先づ此度の罪を免す。若し重ねて號令を背ば、決して軍中の法度を免すまじ。黒旋風笑てはいはいく、我今戦功を無にしたれ共、又多く敵を殺し快く覺ゆるなりとて、却つて勇み見えけり。斯かる所に、軍師吳學究人馬を引いて馳せ來り、即ち宋江に見え悦を賀しければ、宋江又吳用と共に商議して祝家莊の人民等を退散し、村を清めんと欲しける處に、石秀進み出でて、彼鍾離老翁が信行有つて、宜しく路徑を教へたることを告げて

云ひけるは、此村の内には道を教へたる大恩人鍾離老翁在るなれば、妄りに民間を劫ひ、彼が家を壊ひ給ふことなかれ。宋江是を聞いて大いに感歎し、早速石秀を馳せて老翁を呼び寄せ、則ち對面して云ひけるは、若し汝此村にあらすんば、我今村中を焼拂つて居民を退散すべけれ共、汝一人が家に善を行ふゆゑ、村中の民家を饒すなりとて、又一包の金を與へて、路を教たる功を謝しければ、老翁再三頓首して宋江を拜しけり。宋江が云く、我今幸ひに祝家の一族を打亡して、村中の一害を除きぬ。彼が家に貯へし所の糧究て多し。我是を村中に散し、毎家に一石づつを惠むべしとて、鍾離老翁を始めとし、各一間の家に粟一石を施し、其餘の金銀錢財并に兵糧軍器等は盡くこれを取らしめて、山陣の軍用に備へけり。此般祝家莊を破て得たる所の兵糧都合五十萬石と記しぬ。宋江是を見て大いに悦び、即日諸頭領に號令を傳へて、歸陣の用意を調へしめ、其夜五更の左側に三軍を起して、已に祝家莊を打出しかば、村中の百姓老を扶け幼を引き、衆皆路上に出て宋江を拜謝せり。宋江は兵を三手に分けて備を列ね、前軍後軍一度に咄と凱歌を唱ひけり。扱又撲天鵬李應は箭疵已に痊て病平復を得しかども、只門を關して莊上にあり、暗に人を馳せて祝家莊の戦ひを伺はしめ、祝朝奉が戦ひ負たる消息を聞いて、私に快く思ひ居ける處に、家人來つて報じけるは、當州の知府四五十人の歩軍を引いて莊前に至り給ひぬ。李應これ聞いて忙はしく杜興を出して、莊門を開かしめ、遂に迎へて廳上に至りしかば、李應恭しく知府を請うて中央に坐せしめ、また孔目を請うて其傍に坐せしめ、

塔の下には、虞侯節級等袖を列ねて坐しにけり。李應已に知府を拜し畢て、廳前に跪きし處に、知府先づ李應に問うて云く、祝家莊今般軍に輸たる次第はいか。李應答へて云く、某先に祝彪に臂を射られ、多日箭疵養生して家にあり。曾て莊外に出ざりしゆゑ、某いまだ戰の虚實をしらず。知府が云く、汝なんぞ我を誑くや。今已に祝家莊より汝がことを告げ云ひぬるは、汝暗に梁山泊の強盜等と通同し、擅に彼等を引きて祝家莊を打たせけるとなり。汝必ず抵頼ことなかれ。李應が云く、某不才たりといへども、原來法度を知れり。豈敢て盜賊と通同せんや。知府が云く、我汝が言を信じがたし。我先づ汝を府裡へ携へ回り、詳に査照すべしとて、節級等に命じければ、節級等頓て李應を捉へ索を掛けるに、知府又問うて云く、老管家の杜興といふ者は、何れに在りや。杜興答へて云く、即ち某杜興と云ふ者なり。知府が云く、祝家莊の者共汝がことをも訴へぬ。汝も宜しく索を掛りて、州裡に來れとて、同じく是も絆させ、知府頓て主従兩人を當先に引かして李家莊を打出、纔二三十里許に至つて傍をみるに、宋江、林冲、花榮、楊雄、石秀等人馬を率して路を支り、林冲先づ大いに呼ばはつて云く、梁山泊の豪傑どもこゝにあり、汝賊官、速かに手を束ねて死を請ふべし。知府これを聞いて返答にも及ばず、遂に李應杜興を捨て逃げ去りける處に、宋江急に趕しめしかば、諸頭領我先にと人数を引いて追ひ行き、少刻馳回して云ひけるは、知府ははや行向しれず追失なひけるゆゑ、先づ兵を引回しぬ。宋江これを聞いて、頓て李應杜興が絆を解かしめ、自ら慙慙に云ひけるは、李大

官人先づ山陣に上り給ひて、暫く難を避け給は、可ならん。李應が云く不可なり。我罪は自ら辨する處あり。今又知府を追拂ひ給ひしは、是則ち諸頭領の罪にして、我が干る所にあらず。宋江笑つて云く、官司何ぞ肯て此のごとき分説を容んや、我もし大官人を乗回りなば、必然禍ひ大官人一家に及ぶべし。權く先づ山陣に躲れ給ひて、世間の静謐を待ちて再び回り給へ。必ず遲疑して自ら後悔を求め給ふなとて、遂に李應杜興を誘引し、三軍巡邏としてはや梁山泊の下に至りしかば、晁蓋自ら諸頭領を引いて山を下り、頓て宋江等諸人を迎へて同じく山陣に上り、則ち聚義廳に於て酒宴を設け、大いに飲酌を催しけり。此時李應は諸豪傑に對面して一々禮畢りしかば、李應又宋江に對して曰く、某主従兩人山陣の救ひを蒙て、今日山に上りしかば、先づ禍を避けるに足るといへども、只家内のこと安全ならず。願はくは今又我ら兩人を放て再び山を下らしめ給は、却つて感激に勝がたからん。吳學究笑つて云く、大官人心を安んじ給へ。貴族は盡く已に山陣に迎へ取り、貴宅ははや煽燒して、一塊の黒地となし、大官人今更何れに往かんと欲したまふや。李應是を聞いて未だ信せざる處に、妻子眷族都て車に載せ、李應が前に擡出しかば、李應是を見て忽ち驚き慌れ、妻に問うて云く、汝いかしてこゝに至りしや。妻こたへて云く、相公知府に捉はれ給ひて後、又兩人の巡檢官並びに四人の都頭官二百餘人の士兵を引いて、家内の財寶を收拾、我が輩は車に載せて擡出、宅には火を放て燒拂ひぬ。李應いまだ聞きあへず、大いに呼ばはつて驚きしかば、晁蓋宋江齊しく罪を謝して云く、我輩

大官人を山陣に邀へんが爲、かく計を行ひぬ。願はくは罪を免し給へ。李應是を聞いて已ことを得ず、遂に心を傾けて山陣に止まるべしと領掌しけり。宋江又李應に對して云ひけるは、彼知府并に孔目巡檢都頭等を呼出して、大官人に再び對面せしむべしとて、頓て此輩を呼出しけるに、彼知府を假たる者は蕭讓なり。兩人の巡檢を似せしは、戴宗楊林なり。孔目を假たるは裴宣なり。虞候を假たるは金大堅、侯健なり。小節級を似たるは李俊、張横、馬麟、白勝ら四人なり。李應一々是れを見て、只呆れたるばかりにて、聲をも出すこと能はざりけり。宋江又宴を新ためて新參の頭領十二人を饗應べしとて、即ち李應、孫立、孫新、解珍、解寶、鄒潤、鄒潤、杜興、樂和、時遷、扈三娘、顧大嫂等を請うて宴飲を始め、樂を奏して大いに娛みけり。翌日宋江、王矮虎を呼んで云ひけるは、我當初清風山に於て汝に婚禮の儀を約せしといへ共、いまだ此願を遂げずして心を安んせざりし處に、幸ひ今老父宋太公一人の女兒を養ひし故、我是を以て汝に嫁せしめん。汝是を悦ぶべしとて、即ち宋太公を請ければ、宋太公自ら一丈青を引いて廳上に至りぬ。宋江これを迎へて云ひけるは、我以前王英に婚禮の儀を約しけれ共、いまだ此願を遂ざりしに、幸ひ今一丈青を以て王矮虎に嫁せしめんと欲す。諸頭領媒をなし給へ。今日はしかも吉日良辰なれば、宜しく婚禮を調ふべし。一丈青は宋江が義氣を見てこれを辭せず、則ち王英とともに頓首して拜謝せり。晁蓋ならびに諸豪傑都て是を悦んで、宋江が徳あり義あることを感じけり。宋江頓て宴を設けしめ、已に婚禮の儀を相催し、衆皆盃を飛ばせ

て酒漸 關に至りし處に、朱貴が店より使を馳せて報じけるは、鄆城縣の都頭雷横今朱貴が店に至りて、山陣を候ひ給ふと、いまだ云ひも終らざるに、晁蓋、宋江、吳用覺す身を躍せて大いに悦び、三人ひとしく下りて相迎へけり。

挿翅虎拳をもつて白秀英を打つ

梁山泊の三人雷横を相迎へ、宋江先づ雷横に對して云ひけるは、久しく尊顔を拜せず、常に雲樹の思ひに通りぬるに、今日は何の幸ひに來臨を惠み給ひしぞ。雷横答へて云く、某向に知縣の命を請けて東昌府に赴き、今日公用を調しゆゑ、再び鄆城縣に回んとするに、順路當山の裾下を過るによつて、起居を候ひ奉つる。晁蓋が云く、先づ山陣に登つて鞍馬の疲をも慰め給へとて、頓て引いて陣中に至り、諸頭領一々對面して、已に四五日逗留する處に、晁蓋又雷横に對して朱同が消息を問ひければ、雷横答へて云く、朱同は今知縣に愛敬せられ、比日職を改めて節級となり、殊更繁昌して恙なし。宋江が云く、伏して望むらくは雷都頭山陣に留まり給ひて、我が輩と一所に義に聚り給ふまじきや。雷横これを辭して云く、我猶一人の老母あり。これに依つて嚴命に遵ひがたし。老母没して後は必らず來つて山陣を頼むべしとて、はや別れを告げければ、晁蓋、宋江、再三留ること能はず、則ち一大盤の黄金を送つて餞の義を表し、頓て又酒を勸めて別れを惜みけるに、雷横大いにこれを謝し、遂に山を下りしかば、晁蓋、宋江、吳用ふたゝび金沙灘まで送つて一別に及びけり。雷横は金沙灘より船に

乗りて、對岸に上り、直に鄆城縣へ馳せ行きけり。晁蓋、宋江は吳用を請て山陣の諸職を定むべしと問ひければ、吳用一々これを議定し、翌日諸の頭領を聚め號令を聞かしめ、先づ孫新夫婦は元來酒店なればとて、麓に下して童威童猛に替らせ、時遷をして石勇が店を助けしめ、樂和には朱貴が店を助けしめ、鄭天壽をして李立が店を助けしめ、此四箇所の酒店に於て専ら世間の善惡吉凶を探聞しめけり。王英夫婦には後山の陣を守らしめ、鞍馬のことを司らせ、金沙灘の小陣には童威童猛を置いて守らしめ、鴨嘴灘の小陣は鄒淵鄒潤に守らせ、山前の大路は黃信燕順に守らせ、山陣前面第一の關は解珍解寶に守らせ、第二の關は杜遷宋萬に守らせ、大陣の前の第三の關は劉唐穆弘に守らせ、山南の水陣は阮家の三兄弟に守らせ、李應、杜興、蔣敬には錢糧金帛等のことを掌らせ、陶宗旺、薛永には梁山泊の内に城臺等を築しめ、孟康には兵船を造らせ、侯健には専ら鎧、兜、衣袍、旌旗等を作らせ、朱富朱清には筵宴のことを司とらせ、穆春李雲には寨柵を造らせ、蕭讓金大堅には文書圖書等のことを掌らせ、表宣には賞罰のことを掌らせ、其外呂方、郭盛、孫立、歐鵬、馬麟、鄧飛、楊林、白勝等には大陣の八面を守らせ、晁蓋、宋江、吳用は山陣の中央に居し、花榮、秦明は山陣の左邊に居し、林冲戴宗は山陣の右邊に居し、李俊、李逵は山前に居し、張横、張順は山後に居し、楊雄、石秀は聚義廳を守り、總て一山の頭領、各其職を怠らす相勤め、甚だ嚴密にみえにけり。扱彼雷横は梁山泊を離れて日あらず鄆城縣に至り、知縣にまみえて公用すでに調へりしことを訴へしかば、知縣これを賞し、先

づ休息すべしとて暇をぞ許しけり。これより四五日過て雷横又街に遊行しける所に、鄆城縣の閑人李小二と云ふ者に遇しかば、李小二忙はしく問うて云く、都頭はいづれの日歸り給ひしぞ。雷横が云く、我前日回れり。此間當地に何等のあたらしきこともなきや。李小二が云く、頃日東京より白秀英と云ふ妓女一人來りけるが、能く舞をまひ歌を唱ひ、顔色ことに美なり。彼今拘欄の内に在つて舞をまふ。都頭今日これを一覽し給はんや。雷横が云く、我幸ひ今日は閑暇なるに、去來見物せんとて李小二とともに拘欄の内に至つてこれをみるに、かの白秀英果して臺の上にあり。未だ舞を初めずといへども、見物の人臺の四方に聚り、群を成隊を曳て望み見るに、李小二則ち雷横を引いて諸人の前に潜り出て、近々と見物す。斯かる所に一人の老翁又臺の上に出て、諸人に向つて呼ばはり云ひけるは、某は此回東京より當地に至りたる白玉喬と申者なり。齡晩年に至つて家業なきゆゑ、只此女兒白秀英を頼て今日を過す。願はくは見物の貴人一覽の後には必ず賞錢を惠み給へとて、樂器を打鳴しければ、彼秀英頓て舞を初めて良久して畢りし處に、見物の諸人一度に咄と喝采にけり。彼秀英自ら盤を捧げて、先づ雷横が前に至る。雷横これを見て、便袋の内を探せしか共、錢なかりし故、乃ち白秀英に對して云ひけるは、我今日は錢を携へ來らず、明日重く賞すべし。白秀英笑つて云く、官人は諸人よりも當先に進み出て見給ふに、何ぞ錢のなからんや。雷横これを耻て忽ち色を紅めて云ひけるは、我實に今日は錢を忘れて携へず、豈あへて怪むことあらんや。白秀英又云く、官人已に來つて舞を見給ふに、いかに

ぞ錢を携へ給はぬや。雷横が云く、我汝に四五兩の銀を送るとも又妨なし。然れ共今日は忘れて銀を帶せざるあひだ、宜しく明日を待て。白秀英が云く、官人今日一錢だに持ち給はぬに、四五兩の銀を惠み給はんとは、莫大の虚言なり。白玉喬呼ばはつて云く、我女兒何を自ら眼力なきや、只よく靴に問うて賞を求めよ。其官人に向つて賞を求むるは恰も梅を望んで渴を止んと思ふに似たるべし。雷横これを聞いて大いに怒り云く、汝賊翁いかに衆人の前に我を辱しむるや。白玉喬が云く、汝を辱しむるとも何の大事かあらん。汝もしこれを恥ぢば速かに頭を包んで恥を避けよ。雷横これを聞いて忽然として鬚を倒に豎、遂に臺の上に跳上り、彼白玉喬を散々に打つて、臺より下に踢落しける處に、諸人再三諫て先づ雷横を回しけり。扱此白秀英は原東京に在りし時、當縣の知縣に愛せられけるが、這回知縣又白秀英父子を當地に呼び下して、過活をなさしむるとなり。此時女子白秀英は父が打傷はれたるを見て、大いに怒り、早速父を引いて知縣が廳前に至つて、則ち訟て云ひけるは、當縣の都頭雷横安りに我を戀ひ、刺さへ父を散々打つて疵を被しめぬ。願はくは相公明かに之を決斷し給へ。知縣これを聞いて、心中に妬み大いに怒憤、雷横を呼び寄せ、已に二十杖策て拘欄の邊に示衆べしと命じければ、下官其命を奉て雷横を絆め、拘欄の邊に至りし處に、彼白秀英は甚だ悦び、拘欄の前の茶坊の内に在つてこれを見るに、雷横が母も亦此處に至り、大いに哭嘆て云ひけるは、我が子雷横當縣の都頭として、妓女の父を打ちたるばかりにて、何をかくのごとき罪に干らんや。是尤



公ならぬ決断かなとて、自ら雷横が絆の索を解しかば、彼白秀英これを見て大いに怒り、忽ち躍り出て、雷横が母を兩三度まで地上に打倒しけるに、雷横はもと孝順の者なれば、此光景を見て怒り心頭より起り、恰も鐵石のごとき拳を捏て白秀英が眉間を打ちしかば、白秀英遂に目口鼻より血を流して、暫時の間に死しにけり。諸の下官大いに驚き、又々雷横を拖て縣裡に回り、則ち知縣にまみえて、始終詳に訊けるに、知縣ますく怒り、即日雷横を牢中に遣しけり。扱當牢の節級は今美髯公朱同なりけるが、雷横が入牢したるを見て、心中甚だ憂るといへ共、又いかんともすることなく、唯酒食を與へて款待を盡すのみなりけり。

美髯公誤て小衙内を失ふ

翌日雷横が母牢門の邊に來て朱同に哀み告げて云けるは、我齡已に七旬に近づき、朝夕只雷横を見て心を慰めけるに、彼不幸にして罪を犯し、我心の憂ひ盡く是を云べからず、願くは節級舊日の交りか願み給ひて、憐愍を垂給へ。朱同が云く、老娘宜しく心を安んじて回り給へ、向後我自ら雷都頭を憐み、何とぞ計を以て一命を救ふべし。雷横が母是を聞いて云けるは、節級若肯て雷横が一命を救ひ給はば、是則ち再造の恩なり、いよく計を施し給へとて、遂に別れて歸りけり。朱同は雷横を救はん計を思案して、終日沈吟しけれ共、更に良き策もなかりしかば、唯自ら金銀を出して縣裡の諸役人に賄賂を送り、暗に雷横が一命を救はんと圖りけり。知縣は常に朱同を愛し、朱同が言は都て容るといへ

共、這回は己が心愛の妓女を殺され、冤骨髄に徹り、殊さら白玉喬只願て、女兒が仇を報しめ給へと哀みければ、知縣則諸役人と商議して、雷横が在牢の日數六十日の限満なば、青州府に送て知府が決断に任せんと議定して、已に日限も満ければ、知縣則ち朱同に命じて雷横を青州に送らせしかば、朱同自ら十五六人の士兵を引て雷横を監押して、遂に鄆城縣を離れて十里ばかり馳けるに、此邊に一軒の酒店有ければ、朱同頓て士兵等を酒店の内に入れて酒を酌しめ、自らは雷横を引て、人なき所に至り、則ち雷横が頸枷を除きて云けるは、賢弟早く家に回て、老母とともに何國に成とも落行給へ。我自ら汝に替て官司に出べし。雷横が云く、我もし身を通れば、必定長兄の身の上に禍ひ至るべし。我いかんぞこれを忍びんや。朱同が云く、賢弟の殺し給ひし妓女は、知縣が舊愛たるに依て、知縣深く賢弟を寛み、今青州府に送て命を償はせんと圖る。もし青州府に至らば、賢弟遂に一命を害せらるべし。我今賢弟を逃して禍を蒙るとも、よも死罪には至るまじ。況や我は兩親もなく妻子もなければ、縦ひ賢弟の爲に一命を替るとも、又憂ふるに足ず、賢弟再び多言を休て早々馳行給へ。雷横これを聞いて大いに感心し、遂に朱同に別れ、小路より逃回り、忙はしく老母を携て梁山泊へと急ぎける。扱朱同は士兵に告て、雷横が走りたることを語りしかば、士兵共大に驚き、急に追蒐べしと騒動しける處に、朱同詐つて半日ばかり猶與し、已に遠く逃延たらんと思ふ時に至て、諸の士兵を引て雷横が家に馳行けるに、雷横はたしてはや老母を携て落失しかば、朱同直に雷横が逃たることを知縣に訊

て罪を請けるに、知縣は本朱同を愛しければ、是を助けんと思へども、白玉喬再三諷て云けるは、朱同は原來雷横と交り厚きにより、故意逃たるに疑ひなし、願くは相公明かに察し給へ。然らずんば某自ら青州城に馳て、知府相公に訴ふべし。知縣これを聞て心中に驚き、遂に朱同が罪を有のまゝに陳て、青州城に送りしかば、知府即日朱同を二十杖策つて滄州に流しけり。滄州の知府は、朱同が相貌凡しからざるを見て心中に悦び、則ち衙門に留めて懇情を垂ければ、朱同も又知府が恩を感じ、心を傾け身を委ねて朝夕怠らず事へけり。或日知府朱同に問て云く、汝は何ゆゑ雷横を逃して罪を蒙りしぞ。朱同が云く、某豈敢て故意雷横を逃さんや、只誤てこれを逃したり。知府再び問て云く、雷横は又何故妓女を殺しぬるや。朱同答て、雷横白秀英を殺したる來歴を備細に語りしかば、知府又問んとしける處に、屏風の背後より一人の小衙内出來る。年まきに四歳にして知府が愛子なり。小衙内朱同を見て、抱けくと叫びければ、朱同則ち小衙内を抱きけるに、小衙内大に悦び、一向門前に出よと朱向が鬚を燃つて云しかば、朱同知府に告て云く、某小衙内を抱て府前に出で慰め申さんや。知府が云く、我愛子汝に抱れて府前に出んといは、汝暫くこれを慰め來れ。朱同命を蒙り、頓て小衙内を抱いて府前に出で、半時ばかり慰めて再び回りしかば、知府小衙内の悦ぶを見て、心中に朱同を愛し、則ち酒食を以て朱同を賞して云けるは、我愛子重ねて汝に抱れんと望まば、汝宜しく彼を慰よ。朱同が云く、相公の命いかなぞ敢て違ふことあらんやとて、則ち此日を始として、毎日小衙内を

抱て街に出で、此彼に遊行して小衙内を慰めけるに、はや半月を経て七月十五夜盂蘭盆大齋日に至し處に、天下一同の年例として方々に燈火を點じ、寺々に法事を設け、殊さら闐熱なりしかば、朱同は又小衙内を抱て直ちに地藏寺の内に入て法事を見せしめけるに、時漸々二更に近し。あに料んや此夜彼雷横來て、朱同が袖を拽しかば、朱同これを見て大に驚き、先づ小衙内を橋の上に卸し置、遂に雷横と共に傍に來て、則問て云く、賢弟何故今宵此處に至り給ひしぞ。雷横が云く、我彼日長兄に助けられ、早速老母とともに梁山泊に上て身を藏し、長兄の恩徳を語て、晁天王、宋公明等に聞しめしかば、諸頭領益感激淺からず。此度某と吳學究とを馳て、長兄を訪はしむ。朱同が云く、吳軍師今何れの處にありやと、いまだ云も終らざるに、吳學究はや此處に至て、朱同にまみえ、各禮畢しかば、朱同先問て云く、軍師從來恙なきや。吳用答へて云く、某幸に堅固なり。山陣に諸頭領再三長兄を渴望す。今宵某雷頭領と共に此地に至りぬるは、唯長兄を山陣に邀へ、同じく大義に聚らんが爲なり。願くは長兄ともに山陣に光臨有て、晁宋兩人の望を満しめ給へ。朱同良久しく沈吟して云けるは、吳先生これらのことを云給ふことなけれ。若し人在てこれを聞ばあしかりなん。雷横向に重罪を犯しぬるといへ共、我義を以てこれを逃しけるに、身を倚んずる處なきゆゑ、山陣に上つて命を立てるとあるは、是尤も可なり。某も又雷横を逃したる罪に依て、此滄州に流されしかども、十分の艱難を請けず。一兩年の内には必ず故郷に回て、再び家風を起すべし。豈よく山陣に上て自ら世を逼め

んや。吳先生雷都頭とともに早々山陣に回り給へ。もし此處に在て禍ひを引出し給ひなば、後悔するとも益あらし。雷横が云く、長兄自ら大徳を有ち給ひて、只管人の下に居給ふは大丈夫の所爲にあらず。宜しく明らかにこれを察し給へ。況んや晁宋兩頭領且暮長兄の徳を慕ひ給ふに、速に山陣に上り給ひて、豪傑の交りを楽しみ給へ。朱同が云く、賢弟何故我一片の好意を忘れ、却て我を不義に陥んと欲するや。吳用が云く、長兄決して山陣に上り給はずば、我輩は速に歸るべしとて、三人同じく橋の上にある。朱同則ち小衙内を覓るに、はや此處にあらざりしかば、朱同大に驚き、前後左右を尋ねけるに、雷横が云く、長兄小衙内を尋ね給ふことなけれ、我實に黒旋風李逵を携へ來りけるが、今長兄山陣に上るまじと云給ひしを聞て、彼必定小衙内を奪取て馳行つらん。朱同これを聞て甚だ仰天し、直に城外に馳出て、二里餘り追行し處に、黒旋風李逵小衙内を殺して、林の内より叫り云けるは、朱都頭早く林の内に入て小衙内を取給とて、己は林の外に走り出ぬ。朱同林の内に入て見るに、小衙内砍殺されて在りしかば、朱同忽然として大に怒り、雙の袖を捲起て林の外に躍り出、彼三人の者を尋ぬるに、吳用雷横は遂にみえずして、李逵一人遙の處に在て二つの斧を揮ひ、汝速に來て我と勝負を決せよと呼りしかば、朱同大に怒り足に信せて跳來る。李逵是を見て急に逃行一向惡口して朱同を罵りけるに、朱同はいよく怒りに勝す、我汝を殺さで置べきやとて、息をも續す追しかば、漸々天色明けにけり。李逵猶ふたつの斧を舉げ、朱都頭早く來て小衙内が仇を報んやとて、己に大屋

の内に逃入ければ、朱同これをみて相從て追入ける處に、一人の官人進み出で問けるは、汝は誰なれば妄りに我家に跑入るや。朱同此官人を見るに、相貌更に等閑の人にあらず、是則小旋風柴進なり。朱同此體を見て忙しく禮を行て云けるは、某は鄆城縣の節級朱同と云ものなり。向に罪を犯して此滄州に流され來りぬ。昨夜知府の愛子小衙内を抱て、法事を見て在しに、黒旋風李逵小衙内を殺して、此屋に逃入りぬ。願くは大官人力を添て捉はしめ給へ。柴進が云く、長兄果して美髯公にあるならば、先内に入て座し給へ。朱同聞て云く、大官人の高姓大名を聞及べり。今日想す尊顔を拜するは、莫大の幸ひなり。柴進が云く、某も美髯公の大名を聞及べりとて、遂に延て後堂に至りし處に、朱同又問て云く、黒旋風李逵貴宅に逃入たるは、原來大官人を識認たる者ならん、遮莫彼を出して某に與へ給へ。柴進が云く、我好んで天下の豪傑と交りを結ぶ故、罪を犯したる者共、毎度我家を頼んで逃來る。我是を藏す時は縦ひ官司たりとも、我家を捜すこと能はず。頃日我一人の舊友及時雨宋公明梁山泊に入て禍を避られけるが、原足下とも同じく舊友たるよしにて、一通の密書を某が方に送つて足下の噂あり。則吳學究、雷横、李逵都て私宅に逗留す。先還足下を山陣に邀へんとしけれ共、足下堅く辭して承允なかりしゆゑ、故意李逵に命じて小衙内を殺させ、預め足下の歸路を絶したるよし、是全く足下を山陣に邀へて、救命の恩を報んと欲するがゆゑなりとて、頓て吳用等を出しければ、吳用則ち雷横一人を引て屏風の背後より進み出で、忽ち地上に拜伏し、再三罪を謝して云、伏して望らくは朱長兄

某らが罪を免し給へ。是皆晁宋兩頭領の命令を蒙て、かくのごとき計を行ひぬ。長兄もし山陣に上り給ひなば、晁宋兩兄自ら其分説せらるべし。朱同が云く、足下等の惡志尤も感激すといへども、小衙内を殺したること甚だもつて不仁なりとて、覺えず雙眼に泪を含みしかば、柴進此體を見て、再三再四ことばを盡して怒りを宥め諫めける。朱同又柴進に對ひ、我を山陣に迎へんとのことならば、先づ黒旋風を呼出して遇しめ給へ。柴進これを見て、頓て李逵を呼出しければ、李逵地上に跪て罪を謝す。朱同是を見て忽ち怒り心頭より起り、急に身を躍せ、李逵に跳蒐んとせし處に、柴進、吳用、雷橫一齊に座を立て朱同を抱き住め、只顧罪を謝して詫ければ、朱同又いはく、足下ら實に我を山陣に誘引せんとならば、我一ツの望を准へ給へ。其時我山陣に上るべし。吳用が云く、一ツの望はさて置き、たとひ千百の望たり其我肯てこれを准ふべければ、速に示し給へ。朱同が云く、若彌我望を准んとならば、彼黒旋風李逵を殺して我に見せしめ給へ。然らば我早速兩長兄に從て山陣に上るべし。李逵これを聞て大に怒り、忽ち吼て云く、我晁宋兩兄の命を奉つて小衙内を害し棄たるに我何の事か干ん。汝此仇を復せんとならば、晁宋兩人の首を砍て心に憐かるべし。焉んぞよく我を殺さんや。朱同聞もあへず、又躍出て打果さんと狂ひしかども、三人の者再三批住しかば、朱同焦燥て云く、若黒旋風あらば我寧ろ死すとも誓て山陣に上るまじ。柴進が云く、已にかくのごとくんば是容易し。先李逵を我家に留め置べき間、足下ら三人は速に山陣に上て、晁宋兩頭領の願を満しめ給へ。

朱同が云く、此上は柴大官人の教に違じとて、其日三人柴進に別れ打立しかば、柴進は家人餘多を從へて關外まで送りけり。

李逵殷天錫を打殺す

時に吳用李逵に命じて云く、汝は先柴大官人の館に逗留して、朱長兄の怒りを息給ふを待て再び山陣に回るべし。必ず事を惹出して人を患しむることなかれとて、遂に別れて梁山泊へと進發す。柴進は李逵と共に再び私宅に回りけり。扱三人の者は夜を日に續で急ぎしかば、日あらず朱貴が酒店に至り、先山陣に人を馳て注進しける處に、晁蓋宋江自ら諸頭領を引いて朱同を迎へ、遂に山陣の聚義廳に至て諸豪傑一々對面し、頓て酒宴を設けて朱同を饗應し、衆皆悦ばざるはなかりけり。仍又滄州の知府は其夜三更の時迄待けれ共、朱同更に回らざりしかば、人許多四方に分遣し尋けれ共、會て消息なきゆゑ、翌日又人を馳て尋しめける處に、小衙内の林内に斬殺されて居給ふと告げれば、知府是を聞て大に驚き、親自林の内に至り、小衙内が屍を見て忽ち地上に倒れ哭悲み、即日公文を所々に遣し、遍く朱同を捜さしめ、賞錢の札を國郡在々に懸しめけり。偕又黒旋風李逵は柴進が家に一月餘り逗留して在ける處に、一日一人の飛脚忙はしく馳來て、柴進に書簡を呈す。柴進是を披讀して大に驚き、已にかくの次第に於ては、我自ら馳行べしと騒ぎけるを、李逵これを問て、大官人何等の事出來て斯周章給ふや。柴進が云く、我一人の叔父柴皇城と云ふ者、今高唐州に在けるが、彼處の知府高廉が妻舅

般天錫と云ふ者に、花園を奪れんとして痛く打れ遂に病となり、朝夕の存亡定がたき體になんぬとなり。叔父は原來自子なきゆゑ、此度我を呼寄せ遺言を命せんとのことなれば、我自ら往すんば協ふべからず。李逵が云く、某も大官人に從て彼地に往んは可ならんや。柴進が云く、賢弟肯て來り給はば、我宜しく同往すべしとて、則家僕數人を携へ、其翌日五更の前後に館を出、直に高唐州を望で急しかば、日あらず柴皇城が家に至り、柴進先内に入て叔父が病體を見、忽ち聲を發て大に哭ければ、皇城が晩妻出て、柴進を勸めて云く、大官人遠路を來り給ひ、鞍馬の疲もあるべきに、先哭を忍で歌給へ。柴進これを謝し、抑ことの起りを問ひけるに、晩妻答て云く、當地の知府高廉は乃ち東京の太尉高俅が姪なるが、専ら高俅が權威を頼て惡虐を行ひ、剩へ妻舅般天錫と云者を携へ來て民間を惱ましむ。彼般天錫尙年小者といへ共、姐夫高廉が勢を借り、動不動人を害して浪に威勢を振ふ。彼頃日我家に花園水亭有て風景好きことを聞き及び、則ち二三十個人を引て我家に亂れ入、擅に我家を追出して己が住所にせんと、傍若無人の非道を云しゆるゑ、皇城彼に對して云ぬるは、我家は當朝の金枝玉葉として、太祖皇帝より丹書鐵券を賜て家に傳へしかば、人敢て我家を欺かす。汝妄りに我家を追出して、居宅を奪はんとするは何の非道ぞやと、良久しく爭論ありし處に、彼遂に拳を擧て皇城を打けるゆゑ、皇城是を憤り、其日より病起り、飲食進す服藥も驗なく、漸々死を待のみなり。今日幸ひ大官人の來臨を蒙りしは、我一家の男女頗る力を得たり。いかに共宜様に商議し給

へ。柴進云く、嬭々速に憂を休め、只良醫を請て療治を加給へ。叔々若再び般天錫に欺れ給ふことあらば、我家の丹書鐵券を取寄て彼と理論せんに、縱天子の御前に出たり共、何ぞ怖ることあらんやとて、再び外面に出て李逵並に家人等に對して、終始の様子を語りければ、李逵忽ち躍り起て大に怒り、彼いかにぞ天下に人もなき舉動をなすや。我幸ひに二ツの斧を携たれば、先彼が頭を打碎きて、其後別に商議せば可なるべし。柴進が云く、賢弟先志を息給へ。彼今高俅が權威を借て人を欺くとも、我家には鐵券を傳へければ、天子の御前に於ても更に怖るゝ處なし。先彼を饒して動靜を窺ひ給へ。李逵が云く、鐵券も太平の世には用ひらるべけれ共、今朝廷には奸臣佞人充滿して天子を誑く時なるに、何ぞ鐵券のみを頼んや。我先般天錫を殺し世の爲に一害を除くべし。柴進が云く、我自ら彼が勢ひを伺ひ、賢弟を用ふべき處あらば、我早速知らしめん。其内は先房裡に在て歇み給へと、いまだ云も終らざるに、一人の下女忙しく走り出で柴進を請ひければ、柴進又内に入て皇城が前に至りけるに、皇城涙を洒て柴進に對して云けるは、汝は義氣昂々として先祖を恥かしめざる豪傑なるに、我は愚にして般天錫に打れ死をいたす。汝若骨肉の情を思はば、親自東京に上て般天錫が仇たることを天子に訴へ奉り、我爲に此冤みを雪ぐべし。然らば我九泉の下に於ても深く汝が孝義を感せん。我遺言は是のみなり。必ず忘るゝことなかれとて、遂に息絶たり。柴進是を見て大に哭きしかば、阿嬌再三勤めて云く、大官人先哭を忍て後事を商議し給へ。柴進が云く、我這回は鐵券を携ざる間、急

に人を馳て是を取寄せ、近々東京に上て我親自朝廷に訴奉り、叔父の仇を報じ、此冤を雪んとて、先死骸を棺槨に收め皆孝服を着し、一家都て悲ざるはなかりけり。既にして第三日に至りける處に、彼殷天錫一疋の馬に乗て、二三十個人を従へ直に柴皇城が門前に至る。柴進之を聞て門邊に出ければ、殷天錫はや柴進に問て云く、汝は此家の誰なるぞ。柴進答て云く、某は皇城が姪柴進と云者なり。殷天錫が云く、我前日皇城に家を空て出よと命じぬるに、何ぞ我言に違くや。柴進が云く、前日皇城重病に臥ける故、想はず延引に及し處に、皇城終に没しぬる間、一七日を経なば家に移るべし。殷天錫が云く、我已に三日を限ぬるに、何ぞ再び三日を延さんや。汝若我言に違は忽ち頸枷を加へ、一百杖を策つべし。柴進が云く、汝頼りに欺くことなかれ。我家は先朝の末葉として、しかも太祖皇帝より賜りたる鐵券あり。率爾に來て、後悔することなかれ。殷天錫が云く、汝いよく鐵券あらば、今これを出して我等に見せしめんや。柴進が云く、鐵券は今我滄州の居宅にあり。我近々これを取寄て汝にみせん。殷天錫大に怒つていはく、汝何ぞ妄りの言をなすや。縦ひ何人の末葉にもせよ、我豈恐れんやとて、遂に家人等に命じて、柴進を敲しめんとせし處に、黑旋風李達雷の如く吼て走り出で、頓て殷天錫を馬より扯落しければ、二三十人の漢子共一度に馳聚りしを、李達急に手足を飛せ七八人打倒し、其餘の者共は四面八方へ追拂ひ、殷天錫を揪へ汝非道を舉動、剩へ柴皇城も汝に打れたるより、病附て死失ぬ。汝は世の惡魔と云べし。我が一拳を請て試よと云ふまゝに、鐵槌

のごとき拳を擧て、唯一ツ眉間を打ければ、殷天錫忽ち血を吐て死にけり。柴進は李達を引て後堂に至り、即ち商議して云けるは、賢弟今彼を殺し給ふ上は、少刻官府より土兵共多く來て賢弟を搜し捉ふべき間、一刻も急に梁山泊に逃回り給へ。李達が云く、我若奔り行は、必ず大官人の身の上に禍ひ至るべし。柴進が云く、我家には鐵拳を携へけるゆゑ、能く禍を免るべし。足下は唯疾々奔り給へ。李達こゝに於て二ツの斧を提げ、遂に後門より奔り出で、直に梁山泊へ馳往けり。

論者いはく、此卷の小衙内を殺し棄てたる次第は、殊に世に毒を流せり。強きを凌ぎ弱を扶くるは、排命三郎石秀にて、豪傑の好む所なるべし。晁蓋宋江兩人共、朱同が活命の恩を請し故、是を報はんとて山陣に邀んと願ふは左も有べし。其故に東西も知らぬ小兒を奪て林中に害し捨るは、朱同もし今日の義に依て、ともに林中に入り小衙内の屍の傍に自害せば、晁蓋が活命の恩に朱同を殺すなるべし。幾十歳も齡を経べき小兒を害し、殘忍無道の所爲を豪傑の志なりとせば、猛虎と豪傑と同類たるべし、嗟くべきかな。又云く、通俗忠義水滸傳には、朱同に父母なきのみにて、家族有て山陣に迎置たる條洩せり。

五編卷之五

柴進高唐州に失陷す

扱柴皇城が家には頓て二百餘りの士兵共、追々に群り來つて四方より取圍みしかば、柴進便ち門外に出で云く、我汝等とともに官府に馳て、分説すべしとて、自ら索にかゝりし處に、士兵共は猶家内に亂れ入り、李逵を搜しけれ共、李逵ははや見えざりしかば、先づ柴進を引て官府に至りけり。此時知府高廉は妻舅が殺されたと聞て大に怒り、即ち柴進を階の下に引き出させて、怒り罵り云ひけるは、汝いかんぞ殷天錫を殺したるや。柴進が云く、某は柴世宗の子孫として、太祖皇帝より鐵券を賜り、今則滄州に居住す。這回叔父柴皇城が病を訪んが爲めのみに、當地に至りし處、叔父不幸にして死去いたし、某悲歎に逼りぬる折り節、殷天錫來つて頻りに家を移れと催促し、刺へ某を敵んとして二三十人を進めけるゆる、李大と云ふ者某を救はんと欲し、誤て殷天錫を殺し候なり。知府益怒て云く、李大とやらんは汝が家人なるべければ、汝が言を請すしていかなぞ敢て人を殺さんや。汝又擅に彼を逃し安に官府を欺んと圖るや。我今汝に白狀させんとて、已に左右に命じ、鞭打せんとせし處に、柴進大に呼はつて云く、家人李大我を救んと欲し、誤つて人を打ち殺したるに、何ぞ我身に

干らんや。況んや我は太祖皇帝の鐵券を所持したる者なるに、汝私の仇を來で刑罰を行はんとするは、是れ何の道理ぞや。知府が云く、鐵券は何れにありや。柴進が云く、我滄州の居宅に置きし故、はや人を馳てこれを取寄せしめたれば、近日の内必然來るべし。知府大に怒て云く、汝奸賊我を誣し欺んと欲とも、我何ぞ汝に誣れんやとて、遂に左右の下官に命じ打しめければ、柴進忽ち皮肉を打ち破られ、鮮血滾々として紅に染みにけり。此時柴進は鞭に勝へず、家人李大に命じ、殷天錫を殺させけるよし云ひければ、知府頓て柴進に頸枷を枷しめ、先づ死囚牢の内に遣はし緊くこれを守らせけり。扱黒旋風李逵は、連夜に馳せて梁山泊に歸り、則ち諸頭領にまみえし處に、朱同是を見て大に怒り、急に刀を抜て李逵に砍て蒐る。李逵も斧を揮て相迎ふ。晁蓋、宋江并に諸豪傑忙しく座を立て、兩人を扯住む。別して宋江詞を盡して朱同を宥諫め、向に小衙内を殺したるは、全く李逵が私の所爲にあらず。是則ち賢弟を山陣に邀んが爲の計にして、李逵に命せしことなれば、晁天王、吳軍師、宋江三人が罪なり。賢弟今日山陣に上り給ふうへは、速に舊惡を忘れ、一向心を同じうし力を協て共に大義を興し給へとて、又李逵を呼んで云ひけるは、汝宜しく朱兄を拜し罪を謝せよ。李逵これ聞て大に吼り呼で云ひけるは、彼いかなぞかくのごとく放肆なるや。彼山陣に上てより以來、未だ曾て半點の功を建てたるを聞ざるに、我いかなぞ却て彼を拜せんや。宋江が云く、前日小衙内を殺したるは、汝が罪にはあらざれ共、朱長兄は原汝よりも年長なれば、唯宜しく我が爲に罪を謝して、朱長兄を拜せ

よ。李逵毛頭拜せん氣色はなかりしか共、宋江に諫られ、即ち朱同に對して云ひけるは、我一點も汝を怕るゝにあらねども、宋長兄再三諫め給ふゆゑ、我曲て汝を拜すぞとて、遂に斧を撤て兩拜を行ひしかば、朱同是を見て漸怒りを息し處に、晁蓋頓て酒宴を設けて、和睦の義をぞ調へけり。此時李逵又諸頭領に對して、柴進が叔父柴皇城が家にて、殷天錫を殺したる所以詳に語りしかば、宋江大に驚て云く、己に斯くのごとくんば、必定柴大官人に禍を蒙らしめ、官府に捉るべし。吳學究が云く、長兄先づ驚き給ふことなけれ。戴院長歸りなば消息分明にしれ候はん。李逵問うて云く、戴院長は何れの處に行きぬるや。吳用が云く、我汝が柴大官人の館に在つて事を惹出さんことを恐れ、戴宗を馳せて汝を山陣に呼び回へさせけるが、汝が高唐州に往きたると聞て、彼れ又高唐州に馳て汝を尋んこと必然ならんと、いまだ云ひも終らざるに、一人の小賊來つて戴院長の歸山と報じければ、宋江自らは是れを迎へて、柴大官人のことを問ひければ、戴宗答へて云く、柴大官人李逵を携へ高唐州に往き給ふと聞きし故、某も高唐州に馳せて消息を探聽し處、李逵己に殷天錫と云ふ者を殺して去りぬる故、官府より人を馳せて柴大官人を捉へ、己に今牢中に入れ置き、其性命尤も旦夕を保ちがたし。晁蓋又李逵を責て云く、汝何ぞ到る處に於て禍を惹出し、剩へ人を苦しむるや。李逵答へて云く、柴大官人の叔父柴皇城は、彼の殷天錫が非道に宅を奪はんとする上に、打辱られ、遂に是より病て相果たるに、殷天錫其死亡悲歎の中へ、又た來て柴大官人を打んとせしゆゑ、我是を救んとて却て彼を殺せ

しなり。縦ひ活佛たりとも焉んぞ能く是を見るに忍びんや。晁蓋が云く、柴大官人は原來山陣に大恩あり。己に今縲紲の危きに遇ぬるに、いかにぞ山を下つて是を救はざらんや。我自ら高唐州に馳せ行ん。宋江が云く、長兄は山陣の主なるに豈輕々しく親自馳せ給んや。某は從來柴大官人の恩を蒙むりしことなれば、長兄に替て早々彼地に發向すべし。吳用が云く、高唐州は城大ならずといへ共、人馬おほく兵糧も又多し。是等閑に看べからず。先づ林冲、花榮、秦明、李俊、呂方、郭盛、孫立、歐鵬、楊林、鄧飛、馬麟、白勝等十二人の頭領に、五千餘の人馬を與へ先陣とし、宋江吳用并に朱同、雷横、戴宗、李逵、張横、張順、楊雄、石秀等十人の頭領は三千の人馬を領して後陣とし、尤嚴に備へて馳せ向はば可ならんとて、手分定り兵已に調りしかば、宋江等衆人終に晁蓋等に別れて山陣を下り、即ち前後を備へ、高唐州へ進發す。先陣の人馬はや高唐州の界に至りし處に、官軍どもこれを見て、急に知府高廉に告げしかば、高廉冷笑ていはく、彼の盜賊等梁山泊に藏れ在るさへ、我猶自ら兵を發して打ち平げんと思ふ折節、今日彼れ自ら此處に來り、天我に功を成さしめ給ふ者なりと悦んで、忙しく百姓等呼び聚て城を守らせ、己は城中の人馬悉く引率して、城外に打ち出る。原來高廉が帳下に三百の勇兵あり。是を名けて飛天神兵とす。此兵共は都て山東、河北、江西、湖南、兩淮等の地より擇び出したる勇士等なり。此三百人各一様に結束して、嚴に披掛衆皆高廉に隨つて同じく城外に打て出で、既に陣勢を張列ね、金を鳴し鼓を撃つて専ら敵の寄するを待ちわびけり。偕林冲、



花榮、秦明等は五千の軍馬を引て馳せ來り、遂に兩軍相ひ對し、箭軍を始め互に陣脚を射仕ける處に、枕冲馬を陣前に騎出し高聲に呼はつて云く、もし高唐州に豪傑あらば、速に出て勝負を決せよ。高廉是を聞いて二三十人の勇士を左右に従へ、同じく當先に進み出て罵りけるは、汝盜賊ら猶自ら死をしらす、敢て來つて我界を犯さんとするや。林冲大に怒て云く、汝民を害する大賊何ぞあへて大言をいふや。我今此の賊を打ち破つて直ちに東京に攻上り、汝らが一族君を欺く高俅が輩を殺して、天下の大害を除くべきぞ。高廉是を聞いて大に憤り、則ち左右を顧て、誰かある彼を活捕と呼はりしかば、統制官于直と云ふ者、馬を躍せ刀を輪して陣前に斬て出づ。林冲是をみて同じく馬を飛ばせ鎗を燃て相ひ迎へ、戦ひわづか四五合に至つて、于直遂に林冲に搦れ、馬より下に眞倒に落にけり。高廉是を見て大に驚き、又左右に呼はつて戦はしめける處に、同じく統制官温文實と云ふ者、長鎗を燃て林冲到に搦かゝる。時に秦明林冲に替てこれを迎へ、遂に馬を交て相戦ひ、兩將互に秘術を盡して觸みければ、戦ひ已に二十餘合に至れ共、未だ勝負を分たざりし處に、秦明故意左の脇を開きけるに、温文實便を得て搦入んとせし時、秦明急に根を擧て打ちしかば、文實忽ち頭を碎れ死にけり。こゝに於て兩軍喊の聲を合せて、散々に攻め戦ふ。高廉は兩人の統制を殺されて、心中に怒り、頓て寶劍を抜て邪術を行ひしかば、忽ち己が陣中より一朵の黒雲生じ、直ちに半天に沖て四方に散し處に、俄に恠風大に起て砂を飛せ石を走らせ、盡く林冲が陣に落ち入りしかば、諸軍大に驚き、自ら潰亂れて奔走す。高廉是を見て、三百の飛天神兵を進めて緊しく撃たしめしかば、林冲が兵ども、恰も星隕雲の散ることく、七斷八續して東西南北に逃げ走り、遂に一千餘人討れ、漸五十里ばかり引き退て、陣を荒れ野に取りけり。此時宋江が後軍も已に至りしかば、林冲相迎へ、軍の次第詳に語りしに、宋江是を聞いて大に驚き、即ち吳用に向つて云ひけるは、這何等の術なれば、かくのごとく利害なるや。吳用答へて云く、想ふに是れ必定幻術ならん。若し親方にも亦彼が術を破つて風を回し火を返へすの法を得ば、彼却て己が術を以て己が兵を傷ふことあらん。宋江是を聞いて、彼の九天玄女より賜りたる天書を開みるに、果して敵の幻術を破つて風を回し火を返へすの法あり。宋江大に悦んで、其咒語其秘法を心中に記え、此夜五更の前後に金を鳴し鼓を搦て、直ちに城下に攻め來る。高廉これを知て再び人馬を催し、頓て城門の外に馳せ出陣を對す。宋江劍を揮ひ馬を躍せて、陣前に跑出遙に敵軍を望み見るに、高廉が陣中に黒色の旗を搖動して三百の神兵左右に相列る。吳用宋江に對して云く、彼黒色の旗を搖動す者共は、都て幻術を行ふ人馬なり。恐らくは又妖法をなさん。長兄自ら心を留め給へ。宋江が云く、軍師心を安すんじ給ふべし。我自ら妖術を破るの法あり。諸軍疑すして只願すすめと下知をなす。扱又高廉は三軍に命じ、敵進むとも妄りに戦ふことなかれ。只宜しく諱の響くを聞て相圖と定め、此時一度に力を併せ斬て出で、速に賊首宋江を生捉べし。しからば我必ず重く恩賞を行はんとて、遂に寶劍を提て陣前に進み出でしかば、宋江大に罵て云く、高廉奸賊我れ昨夜未だ

す。高廉是を見て、三百の飛天神兵を進めて緊しく撃たしめしかば、林冲が兵ども、恰も星隕雲の散ることく、七斷八續して東西南北に逃げ走り、遂に一千餘人討れ、漸五十里ばかり引き退て、陣を荒れ野に取りけり。此時宋江が後軍も已に至りしかば、林冲相迎へ、軍の次第詳に語りしに、宋江是を聞いて大に驚き、即ち吳用に向つて云ひけるは、這何等の術なれば、かくのごとく利害なるや。吳用答へて云く、想ふに是れ必定幻術ならん。若し親方にも亦彼が術を破つて風を回し火を返へすの法を得ば、彼却て己が術を以て己が兵を傷ふことあらん。宋江是を聞いて、彼の九天玄女より賜りたる天書を開みるに、果して敵の幻術を破つて風を回し火を返へすの法あり。宋江大に悦んで、其咒語其秘法を心中に記え、此夜五更の前後に金を鳴し鼓を搦て、直ちに城下に攻め來る。高廉これを知て再び人馬を催し、頓て城門の外に馳せ出陣を對す。宋江劍を揮ひ馬を躍せて、陣前に跑出遙に敵軍を望み見るに、高廉が陣中に黒色の旗を搖動して三百の神兵左右に相列る。吳用宋江に對して云く、彼黒色の旗を搖動す者共は、都て幻術を行ふ人馬なり。恐らくは又妖法をなさん。長兄自ら心を留め給へ。宋江が云く、軍師心を安すんじ給ふべし。我自ら妖術を破るの法あり。諸軍疑すして只願すすめと下知をなす。扱又高廉は三軍に命じ、敵進むとも妄りに戦ふことなかれ。只宜しく諱の響くを聞て相圖と定め、此時一度に力を併せ斬て出で、速に賊首宋江を生捉べし。しからば我必ず重く恩賞を行はんとて、遂に寶劍を提て陣前に進み出でしかば、宋江大に罵て云く、高廉奸賊我れ昨夜未だ

至らざりしゆゑ、誤て汝に一陣を破られぬ。今日我汝を生捉て仇を報はんぞ。高廉大に怒て云く、汝反賊早く馬を下り綁を請よとて、口中に咒語を念じて寶劍を左右に揮しかば、忽ち又一朶の黒雲生じ一陣の怪風起り、砂を走らせ石を飛せて宋江が陣中に落ちかゝる。宋江是を見て同じく口中に咒語を念じ、劍を輪しける處に、彼の怪風忽ち己が陣中に吹回つて、宋江が陣中には來らざりしかば、宋江急に軍馬を進め喊き叫で攻め來る。高廉術を破られて心中に怪み、又彼銅の牌を取て響かせけるに、忽ち一つの猛獸露れ出で牙を張り爪を舞して宋江が陣中に跑來る。宋江が軍馬これを見て大に驚き、盡く皆右往左往に逃散しかば、宋江も又諸頭領と共に馬を回して奔走す。高廉また劍を揮て妖法を行ひし處に、飛天神兵忽然として前面に繞り出で、前後より夾て攻けるに、宋江が人馬大に敗れ、我後れじと先を争ひ逃げ走る。高廉後に從て追撃すること二十餘里に至て三軍を收め、遂に勝喊を揚て再び城中に引き入りけり。宋江は山坡の下に陣取て敗軍を聚みるに、多く士卒を討れたれども、尙悦ぶらくは諸頭領は一人も戦死なし。宋江又た吳用と商議して云く、我軍勢已に兩軍打負今更敵の妖法を敗り、神兵を討の計策なし。しらす何を以てこれに當らんや。吳用が云く、彼必ず勝に乗じて今宵夜討に來るべし。豫じめ先づ計を設けこれを防がしめんとて、楊林白勝等に兵少し與へ、此處に留め置き、其餘の頭領は都て舊陣の内に引き退て、先づ人馬の力を歇めけり。扱楊林白勝は兵を引いて、半里ばかり傍の草深き處に埋伏してありけるに、其夜一更の時に至て、四面に雲生じ、八方に

霧降り、一陣の怪き風驟に起て、少刻大雨頻りに下り、雷電霹靂天地も崩る、許なり。楊林白勝三百餘人を領して草の内に伏し、稍頭を擡げて陣邊をみるに、かの高廉三百の神兵を引て、直ちに陣中に突入けるが、陣中には人なきを見て急に馳回らんとせし時、楊林白勝喊の聲を揚げて一度に咄と斬て出でしかば、高廉計に中りぬと驚きて、慌忙き奔走す。楊林等あへて刀打せず、一向亂箭を放つて雨よりしげく射蒐けるに、果して高廉が左の臂に流箭中りしかば、已に危くみえし處に、三百の神兵齊しく高廉を扶け逃げ走る。楊林白勝雨を冒して追打し、敵兵餘多欲殺したり。高廉は三百の神兵に扶られて漸遠く逃延しかば、楊林等あへて深入りせず已に兵を退けし處に、忽ち雨過ぎ雲收りて、再び一天に星現れ月明らかなり。此時楊林白勝二十餘人の神兵を生捉つて、宋江が陣中に引せ、彼風雲雷雨のことを詳に語りければ、宋江吳用大に驚て云く、此處より彼地へは僅五里に足らざる路なるに、又いかんぞ此邊には風雨なきや。諸人議論していはく、是かならず高廉が妖術なるべし。楊林又た云く、高廉自ら髪を披劍を揮て陣中に斬り入りけるが、遂に一箭に中つて城中に逃回りぬ。我輩は小勢なるによつて、敢て長追せずして唯神兵二十餘人活捕しのみなりと、帳前に引き出しければ、宋江即ち白勝に命じて一々頭を刎させけり。已にして諸頭領七手に分つて陣を七ヶ所に列ね緊しく固め、又夜打あらんことを防ぎ、暗に人を山陣に馳て救ひの兵を求めけり。高廉は矢に中て城に引き退き、則ち三軍に下知して城を堅固に守らせ、矢疵愈ば再び戦をなし、宋江を活捉べしとぞ圖

りける。宋江は先に兩陣を破られ、多く兵を討せて心中深く愁へ、則ち吳軍師と商議して云ひけるは、此高廉すら猶敗ること能はず、もし他所より救の兵來つて戦ひを助けなば、いかなる計を以てこれに敵せんや。吳用が云く、某つら／＼想ふに、高廉が妖法だに破らば親方早速勝を取るべし。但し此妖法を破らんには、只蘇州に人を馳て公孫勝を邀へ來らば、高廉が妖法に勝て立ち處に城を乗取べし。諸頭領これを聞いて、衆皆其言に服しけり。時に宋江が云く、向に戴院長を蘇州に遣はし、公孫勝を訪はしめけれ共、遂に尋遇すして虚く歸りぬ。今更に何れの處を尋させんや。吳用がいはいく、蘇州の支配には村郷極めて多し。いかんぞ數日の間に遍く尋盡んや。然れ共公孫勝は原清深の道家なれば、定めて名山幽洞の内に居し、郷には在るまじ。今回又戴宗を馳せ給はし、蘇州の支配下に於て名山仙境の地のみを尋しめ給へ。然らば必然公孫勝の消息有べし。宋江其言に同じ、則ち戴宗を請て云ひけるは、賢弟又我爲に蘇州に馳せて公孫勝先生を邀へ來らんや。戴宗が云く、某馳行んは最易けれ共、唯一人の頭領を得て共に同往せば愈可ならん。李逵進み出て云く、某敢て長兄に隨ひ行ん。戴宗が云く、汝若し我に同往せんならば、宜しく我言語を容て違ふことなくんば、等しく伴ん。李逵が云く、我れ決して違ふまじ。宋江吳用も又齊しく李逵を戒め、汝必ず禍を惹出すことなけれ。若公孫勝先生に遇なば、速に引いて回るべし。李逵が云く、我れ殷天錫を殺して柴大官人を苦めぬるゆゑ、我れこれを救はんと欲して、蘇州に往んと願ふなるに、豈敢て又禍を惹出さんや。長兄必ず心を安んじたまへ。

此度は是非公孫勝先生に尋ね合ひ、速に此處に邀へ來らん。もし來ることを肯はずば、我即ち先生の首に繩を着ても拖すり來らん。宋江吳用責て云く、汝又魚言を吐や。來ることを肯せずば、戴院長宜しく説話すべし。汝必ず怒を發せず魚言失禮を慎むべし。李逵深く領掌しければ、戴宗四ツの甲馬を取て、二ツは己が腿につけ、又二ツは李逵が腿に着て、遂に宋江吳用其外の面々に辭別し、高唐州を馳せ出で神行の法をなし、李逵と共に蘇州を望て進發し、一日八百里の路を馳て急しかば、未だ旬日にも過ぎるに、蘇州の城外に至て旅宿に歇み、翌日兩人城中に入て終日尋ねしか共、公孫勝を知りたる者一人もなく、次の日又四下にて轉て尋ねけれ共、同じく消息を得ざりけり。

戴宗智をもつて公孫勝を取る

斯れば、李逵大に焦燥て云、彼愚道人何れの處に隠れて我輩を苦しむるや。我若し彼に遇ば頭を揪へて拖すり回るべし。戴宗是を聞て大に怒り、汝亦亂言を吐くや。必ず無禮のことをなすべからずとて、此日も空しく旅宿に歸り、次の日又村里郡縣遍ねく捜し尋ね、一軒の酒店に入り酒食を求めけるに、酒店の小厮是を見て内に引入り、支度を申通じける處に、暫らくして又一人の老翁入り來て酒食を求めければ、小厮早速申通じ忽ちに酒食を備へ、先づ老翁が前に具へ、戴宗李逵には未だ拿來らざりしかば、李逵是を見て大に怒り呼はつて云、我ら兩人は先に來たるに何故老翁を先にし我等を後にするやとて、老翁が前の酒を取て地上に投丟ければ、老翁忽ち大に怒り、則ち來て李逵を揪へて罵

しりけるは、汝は何奴なれば、此のごとき無禮をなすや。李逵これを聞き大に怒り吼しり拳を擧て打んとせし處に、戴宗忙はしくこれを止め、老翁に對して云けるは、願はくは老翁無禮の罪を免し給へ。彼はもと村中の野人にて曾て人の禮をしらず。老翁もし彼に對し怒りを起し給は、畢竟老成しからず。願くは唯これを忍び給へ。老翁がいはいく、足下はいまだ知り給ふまじ。我は是より猶遠路を回して長生不死の法を聴聞す。もし延引する時は講談の時刻を差ふ。此店の小厮原來此故を知りぬるゆゑ、我少し足下より後れて來りしか共、先づ我前に酒食を具ふ。進莫此漢子はいかんぞかくのごとき無禮をなすや。戴宗が云、老翁はもと何れの所より來り給ふ人にて、又何れの處に行て長生不死の法を聞き給ふや。老翁答へて云、我は即ち此蘇州の内九宮縣の二仙山の下に住す。我今日私用有て此邊に出ぬるゆゑ、急に歸りて二仙山に上り、羅真人の講じ給ふ長生不老の法を聞かんと欲す。戴宗これを聞き、心中に想ひけるは、恐らくは公孫勝も彼山に蟄居して在るならん。宜しく此老翁に問はんとて、便はち問うて云、老翁の在處に公孫勝と云ふ人はあらずや。老翁が云ふ、公孫勝と云ふ人は他に問ひ給ふ共、これを知る者あるまじ。此人は則ち我が隣家にして猶一人の老母あり。前年は久しく雲遊して他國に在りけるが、比日又家に回りぬ。當初は公孫一清先生と云ひしかども、今は俗姓を稱へずして唯清道人と號す。戴宗が云ふ、某此數日公孫先生を尋ねて方々に至りぬれ共、公孫勝といふ名を人みな知らざるこそ理なり。又此處より二仙山へ幾何の路有りや。老翁云ふ、此處より彼地へ

は四五十里の道あり。戴宗又問うて云、清道人今他國には出でざるや。老翁が云ふ、清道人は則ち羅真人の門弟頭にて旦暮老師の左右を離れず。何の邊ありて再び他國に出んや。戴宗これを聞き大に悦こび、則ち老翁に告げて云ひけるは、老翁は先づ二仙山に歸り給へ。我輩は再び旅宿に回り、跡より少刻尋ね來らんとて、遂に酒食をしたゝめ調へ別れるに、彼老翁もまた酒店を出て二仙山へ回りけり。戴宗、李逵は旅宿に至り、甲馬を着て兩人九宮縣に馳ければ、暫時に二仙山の下に至り、此風景を見るに、高山峨々と聳え、鶴東林に嘖き、深溪幽々と遙かにして水西谷に響き、彩雲岫を出て清風洞に入る。此山若し道士修行する處にあらずんば、定めて仙翁の藥煉所ならん。決して凡人の住所とはみえざりけり。此時戴宗一人の樵夫に遇うて問ひけるは、しらす清道人の家は何れに在りや。樵夫指さして此山口を過て門外に石橋ある處、乃ち清道人の住宅なり。戴宗李逵これを聞いて大に悦こび、頓て山口を過て此處を見るに、果して十餘間の草屋あり。周遭は都て短牆にして、門前に石橋ある家あり。戴宗、李逵已に橋を過て門邊に至りし處に、一人の童子出でければ、戴宗これに問うて云、清道人は家に在りや。小童答へて云、清道人は後堂の外に在つて丹を煉居給ふなり。戴宗心中に悦こび、則ち李逵に對して云、汝は暫らく此處に在つて待つべし。我は先づ内に入つて問はんとして、頓て門内に入りける處に、一人の老娘すゝみ出づる。戴宗これを見て忙はしく禮を行つて、某は清道人にまみえんが爲、今日貴宅に拜候せり。老娘問うて云、官人の姓名はいかん。戴宗答へて云、

某は戴宗と申者にて山東より來れり。老娘はいはく、我忤清道人は異郷に雲遊して未だ回らず。戴宗が云、某は昔より識荆にて、唯一句肝要のことを告げんが爲、特地來て候ひ奉る。老娘が云、忤は實に家にあらず、いかんぞよく對面ならんや。よろしく回つて再び來り給へ。戴宗之を聞いて、先づ門外に出で、即ち李逵に對して云ひけるは、今日はすべからく汝を用ひん。汝内に入つて清道人を問ふべし。老娘もし忤は家にあらずといはば、汝忽ち怒り吼つて、家内を鬧がすべし。必らず老娘を傷ふことなけれ。我又走り入て汝を責らば、汝まさに怒りを息て靜まるべし。李逵これを聞いて、先づ二ツの斧を腰に挿し、直に門内に入て人や在ると問ひしかば、老娘出でて李逵を迎へ、相貌甚だ兇惡なるを見て、心中先づこれをおそれ、則ち慇懃に問ひけるは、官人は何れの所より來り給ひしぞ。李逵答へて云、我は梁山泊の豪傑黑旋風と云ふものなり。今宋長兄の命を奉り來つて、公孫勝を請待す。汝老娘速に彼を出さば、我深くこれを感悦すべし。若し萬一彼を出さずんば、我今一把の火を以て汝が家を焼拂ひ、立處に一片の白地となさん。老娘が云、清道人は雲遊して未だ家に回らざるに、豈よく彼を出さんや。李逵これを聞いて大いに怒り、忽ち斧を揮つて先づ壁を打搦しければ、老娘是を欄當んとせし處に、李逵恰も霹靂のごとくに吼つて、汝何ぞ公孫勝を出さぬや。我今汝を害せんとして、又斧を揚げて狂ひしかば、老娘此の光景を見て大いに驚懼し、忽ち眼を眩まし地上に暈倒しぬ。時に公孫勝後堂より走り出で、無禮をなすことなかれと呼はりし處に、戴宗早く進み入つて、

故意深く李逵を責り、則ち老娘を扶け起して罪を謝しければ、李逵も同じく斧を擲て罪を請ふ。公孫勝が云、兩兄弟先づ裡面に入り給へとて、遂に兩人を延て後堂に至り、先づ謝して云ひけるは、兩兄弟遠路駕を枉げ給ふこと、我甚だこれを感激す。戴宗が云、先生山を下り給ひて後、向にも已に蘇州に來つて城中城外遍く尋ねしかども、終に先生の貴宅を知らずして空しく歸山せり。這次宋長兄柴大官人を救はんと欲して、高唐州に發向ありし處に、知府高廉が幻術に兩陣を破られ、親方に討たれたる人馬若干にして、今更計の施さすべきものなく、已に危急に及べり。此故に今日又某と李逵とを馳せ、先生を請待あらんとなり。先刻途中の酒店に於て幸ひ一人の老翁に遇ひけるが、先生とは隣家たるよしにて、貴宅を指教へしゆゑ、敢て伺候すといへども、尊母詐て先生は未だ雲遊して、家に居給はずと宣まひしゆゑ、故意李逵をして家内を鬧がしめ、漫りに先生を賺し出しまゐらせり。伏して願はくは無禮の罪を免し給へ。宋長兄今高唐州に在つて先生を待ちわび、日を過すこと年のごとし。若し先生舊日の情を顧み給はば、早々駕を移し給ひて、始終大義を全からしめ給へ。公孫勝が云、我幼年の時より天下に雲遊し、多く豪傑の士と交はりを結んで、梁山泊に聚まりし處に、某向き不圖故郷に回り、再び山陣に上ること能はざる所以は、第一は老母晩年に至て奉養する者なきゆゑ、我自らは是に仕ふ。第二は則ち老師羅真人再三苦りに留めて、長生不死の法を修せしめ給ふに因てなり。我常に梁山泊より人來つて訪らはんことを怕れ、則ち名を清道人と改たためて此處に隠れ在り。我毛頭

大義を忘れたるにはあらざれ共、唯止むことを得ずして、山陣に回らざるなり。戴宗が云、今宋公明危急に臨んで居給ふに、先生廣く仁慈を惠み給ひて、先づ一旦駕を枉げ給へ。公孫勝が云、我尤も長兄のことを憂ふるといへども、只恨むらくは老母を棄がたし。況んや老師羅真人且暮某を左右に侍らしめ給ふことなれば、いかんぞ肯て放ち給はんや。這回は實に請に應せんこと能ふまじ。戴宗これを聞いて忽ち地上に拜伏し、再三涙を洒いで哀しみしかば、公孫勝これを見て同じく心中に哀しみ、則ち扶け起してはいはく、賢弟先づ哭きを休め給へ。再び爲に商議をせんとて、頓て酒宴を設けて戴宗李逵を饗應し、盃已に數遍巡りしかば、戴宗又頻りに悲しみ告げてはいはく、先生もし此遭來り給はずんば、宋長兄は必然高廉に活捉となり給はん。然らば山陣の大義、是より七顛八倒して必らず天下の人に咲はれん。公孫勝が云、已にかくのごとくんば、我まづ老師に告げ、若し萬一許容あらば、早速兩兄弟と共に馳せ行かん。宜しく我に隨て老師の觀中に來り給へとて、即日戴宗李逵兩人を引て、二仙山に上りけり。此時冬の初なりしかば、日短く夜長くして晩るに易し。公孫勝等三人、漸半山に至りし處に、紅日西に落ち四方漸暗し。公孫勝自ら戴宗等兩人を引て、松樹の蔭の小路を過り、直ちに羅真人觀門の前に至りしかば、戴宗頭を擡て門上をみるに、大いなる一片の額あり。額の上には金字を以て紫虛觀と書きたり。三人遂に觀門の内に入つて廊下を過ぎ行きける處に、兩人の童子立ち出で、公孫勝等を延て松鶴軒の内に入る。當時羅真人は閑かに雲床の上に坐して、公孫勝を近く招

きしかば、公孫勝向ひ前んで拜をなしけるに、戴宗も亦忙はしく身を翻して地上に拜伏す。獨り黒旋風は側に立て、暗に羅真人を白眼けり。真人先づ公孫勝に問うて云、此兩人は何人ぞ。公孫勝答へて云、愚弟向に老師に告げる處の、梁山泊の義弟等なり。今宋公明高唐州を攻めて、知府高廉が妖法に數陣を敗られ、こと危急に及びしゆゑ、宋公明此兩人を馳せて愚弟を邀ふ。然れ共未だ敢て妄りに承允せず。先づ來つて老師に伺ひ奉つる。羅真人が云、汝幸ひに火坑を脱れ出で、今既に長生の法を修せんとするに、何ぞ再び世俗に礙はつて自ら大事を誤まらんや、必ず撞まにことをなすべからず。戴宗是を聞いて云、宋公明暫時公孫勝先生を請待して、敵を破らんと欲す。もし高廉をだに撃ち候はば、再び當山に還し進らせん。伏して願はくは快く許容あつて、公孫勝先生を借し給へ。羅真人が云、足下兩人は道家のことを知り給ふまじ。長生を修せんとする者、豈よく俗事に礙はつて身心を塵さんや。足下らは宜しく速やかに歸り候へ。公孫勝に於ては決して許すまじ。公孫勝命を背くこと能はず、遂に兩人を引いて再び山を下りし處に、李逵問うて云、彼真人は何等の事を云ひたるにや、我偏にこれを聞き取り難かりし。戴宗が云、羅真人堅く公孫勝先生を戒めて山を下らしめ給はぬなり。李逵これを聞いて大に吼り、我輩若干の路を経て此處に至り、偶公孫先生に逢ぬるに、何ぞ空しく回らんや。若し再三我が怒りを惹出さば、二ツの斧を揮て彼賊真人が頭を打碎かんと罵しりしかば、戴宗又これを呵つて云、汝亂言を云ふことなかれとて、二人遂に公孫勝が後堂に至りし處に、公孫勝又

兩人に對して云ひけるは、今宵は先づ我が家に歇み給へ。明日重ねて宜しく商議すべしとて、各床に上つて歇みけり。時漸々三更の前後に至り、李逵暗に起て戴宗を窺ひみるに、戴宗は他念なく睡りしかば、李逵殆んど悦んで想ひけるは、我たま／＼公孫勝に尋ね遇ひぬる所に、又彼賊真人一言を以て欄當たれば、明日早速公孫勝を引て高唐州に歸るべしと、擅に主意を定め、遂に二ツの斧を搶取て門外に馳せ出で、則ち月光に乗じて二仙山に跑上り、直ちに真人が紫虛觀の邊に至つてこれをみるに、兩扉の大門を闢して開かざりしかば、李逵輕々と身を躍らせ、短牆の上に跳上り、頓て大門の傍に下りて、悄悄に松鶴軒の前に至り、裡面を望み見るに、唯閑寂の體なりけり。

論者の曰く、往昔漢の張良は、黄石公に遇て兵書を授かり、本朝の牛若丸は鬼一法眼が軍術の秘書を寫し取と言ひ、又鞍馬山の天狗僧正坊に劍術と飛翔の術を學ぶと云、皆是私意を用ひず、其道を貴くし衆人に尊信せしめん事を希ふは、和漢同日の論なり。されば此書にも宋公明九天玄女に見えて天書を授り、公孫勝羅真人に學ぶ。詭譎恠談は一部の文華、強て咎むべきものにあらず。然に公孫勝が學ぶ處は、道家の事にて清道人と稱すれば、其師羅真人も尤も老莊より出たる末流なる可と思へば、釋氏にて、汝幸ひに火坑を脱れ出等の佛語をなす。正法に不思議なしと聞に、其術奇しからずや。且斯る清修をもなす人にして、誕辰慶賀の進物十萬貫を、天より賜る富貴なりとて、晁蓋以下三阮まで七人合體して是を奪ひたる人數の内なるも、笑ふべき事ならずや。

### 五編卷之六

李逵斧をもつて羅真人を劈る

黒旋風李逵は一己に主意して、羅真人を殺さんがため、三更に忍び出で、真人の居に近づき窺がひみるに、獨り自ら雲床の上に坐し、卓に向ひ兩枝の燈燭を點じ、一爐の名香を炷て經を讀誦し、其他は専ら寂しく物音もなし。李逵心中に罵しり、這賊真人今宵絶命なりと冷笑ひ、遂に戸を推明て走り入り、二ツの斧を揮て羅真人を砍りしかば、真人は雲床の上より滾び落、白血流れて座上に滿たり。李逵これを見て大に悦び、再び外面に跳出けり。真人只白血のみ流れて、紅血聊さかも出でざるは、元陽の眞氣を養ひ得たる驗なり。かゝる處に又一人の童子出で來つて大に罵しりけるは、汝兇賊いかなぞ我が師を殺せしぞや。李逵是を見て只一言も答へず、急に斧を揮て是をもともに砍殺し、飛がごとく觀門の外に走り出で、二仙山を下り再び公孫勝が後堂に入て歇みけり。翌日公孫勝酒食を設けて兩人を饗應、今日又山に上て老師に哀しみ告げ、いかんともして許容を蒙らんとて、二人又山を望みて上りしかば、李逵心中に冷笑ふといへども、只何もしらぬ體にもてなし、はや松鶴軒の内に入りし處に、兩人の童子出でて公孫勝を迎へしかば、公孫勝問て云、老師は何れにましますや。

兩童子答て、眞人は今雲床に坐し清氣を養ひ居給ふ。李達此言を聞て大に恠み、暗に舌を伸し覺えず。龔れ慄きけり。三人遂に雲床の前に至り跪きしかば、羅真人問て云、汝三人又來るは何の事ありや。戴宗謹んで云、願くは眞人一點の慈悲を垂給て、諸人の急難を救ひ給へ。羅真人が云、我先汝に問はん。彼大漢子は誰なるぞ。戴宗答へていはく、是は某が義弟姓は李、名は達と申者なり。羅真人打笑て云、我もと公孫勝を遣はずまじと思ひしか共、其李達とやらんが一片の善心を感じて、公孫勝を許すなり。李達は聞て想道、我が心汝を害せんと欲するを知て、かくは云ならんと察しけり。羅真人又云、我今汝三人を片時の間に、高唐州に至らしめば可ならんや。三人の者は謝して云、もしかくのごときことを得ば、莫大の幸ひならん。戴宗又暗に想ふやう、羅真人の法は定めて我が神行の法よりも、大に勝りつらんと感じけり。羅真人三ツの手帕を取出して云けるは、汝三人宜しく我に隨て來れ。試みに法を行つて見せしめんとて、則ち三人を延て觀外の大石の邊りに至り、先紅き手帕を石の上に敷て公孫勝を坐せしめ、眞人自ら一句の咒語を念じけるに、手帛忽ち一片の紅雲と變じ、公孫勝を載せ直に半空の裡に飛び行きぬ。眞人又青き手帕を石の上に鋪て戴宗を坐せしめ、再び一句の咒語を念じければ、又一片の青雲と變じ、戴宗を載せ半天に飛び去りぬ。眞人又白き手帕を石の上に敷て李達を坐せしめ、再び一句の咒語を念じければ、忽ち一片の白雲と變じ、李達を載せ同じく半空の裡に飛起りぬ。總て三片の雲、三個の人を載せて空中に飛びしかば、三人のものは夢中に在る心

地して、奇異の思ひをなす。良久しうして後、眞人右の手をあげて招きしかば、先づ青紅の兩雲平々として穩に落ちけるに、戴宗は就中これに感歎し、深く眞人を拜謝しけり。李達は尙空中に在つて大に呼はりけるは、いかにぞ我一人を空中に留め給ふや、同じく速に下し給へ。眞人天を仰て云けるは、我が輩は本出家の身なれば、曾て汝を犯したることなきに、汝は何ゆゑ昨多暗に忍び入て我を欺りけるや、我若し道徳なくば遂に汝に殺されん。況んや我が一人の童子をも欺殺せり。李達呼つて云、某豈あへて斯る無禮をなさんや。恐らくは眞人自ら人差ひ有るべし。眞人又笑うて云、汝已に兩人を欺りぬるといへ共、實に我が二ツの葫蘆を砕れり。汝が心極めて不善なる所あるゆゑ、我今汝に禍を蒙らしむとて、再び一句の咒語を念すれば、忽ち一陣の惡風起つて、黒旋風を雲中に吹入し處に、忽然として兩人の黄巾力士神現はれ出で、李達が左右に隨て空中を飛行す。李達は只耳の裡に風雨の聲のみ聞て直に蘇州の城中に至て、知府が家の瓦の上に落ければ、知府を始めとして、一家中の者これを見て、衆皆大に駭き稀有のことに思ひけり。下官共遂に李達を捉へ、塔の下に引出しければ、知府馬士弘大いに怒つて云、汝はいかなる妖人なれば、半天の裡より降けるや。李達は此の時瓦に撞て面を衝破りしかば、渾身血に染只昏々と呆れたる計にて、更に聲をも做さざりけり。知府又云、此者妖人に疑なし。妖法を破るには、醒醒たる泥水を以て面上に澆ぐと聞及ぶ。速に是を行なふべしとて、左右に命じければ、下官共頓て二便の糞水などを汲で、李達が面に澆ぎし處に、李達大に苦んで呼は



り云けるは、我は是妖人にあらず、乃ち羅真人の弟子なり。必ず率爾のことをなし給ふな。時に一人の下官進み出て、知府に告て云、羅真人は是天下に有名の活神仙なり。若し彼が弟子にて有ならば、刑罰を加へ給ふことなけれ。知府笑ていはく、我千卷の書を讀で、毎に古今のことを聞ぬれ共、神仙の弟子にかくのごとく、兇相の者あることを見ず。彼必定妖人に紛あらずとて、早速下官らに命じて策せければ、下官共遂に李逵を扯倒して、散々に打けるに、忽ち皮開肉破れて鮮血滾々と流れけり。李逵これに堪へずして、妖人なるよし白狀したりしかば、知府先づ節級に命じて、李逵を牢中に遣はしけるに、李逵は此日より牢中に在て、小牢子等を赫して、我は實に羅真人の弟子直日神將なり。汝ら斯く我を辱むるといへども、凡夫なれば後の災をしらす。我決して蘇州城の人民を害せんこと日久しかるまじ。其時必ず後悔することあらん。小牢子等これを聞て暗に想ひけるは、羅真人は原來道徳清高たる活神仙なり。もし其弟子に詐なくば、是又神通廣大ならん。萬一術を以て牢中を脱れ出づることあらば、仇をなすも又大いならん。只宜しくこれを尊敬すべしとて、衆皆李逵に向ひ懇懃に問ひけるは、長兄はいよく、羅真人の弟子に偽なきや。李逵が云、我何ぞ偽る處あらん。我不圖師命を違きしゆゑ、老師故意我を此處に擲て難苦を受けしめ給ふ。若し二三日を経なば、必ず來て我を取復し給ふべし。汝ら多く酒食を與へて我に用ひしめば、我肯て汝等を免すべし。もし又軽く見て侮ることあらば、我去牢の後汝らが家に仇をなさん。小牢子共是を聞て大に怕れ、淨水の湯を浴せ、新衣を着

せ、酒食を欸待こと豊かなり。扱羅真人は李逵を蘇州に捨て、難を蒙らしめたることを戴宗に語りければ、戴宗大に驚き、只願哀しみ告げ、李逵を救ひ給はるべしと説にけり。羅真人其日より戴宗を觀裡に留めて、山陣のことを問ひしかば、戴宗告げて云、晁宋兩頭領は、原來義を重んじ財を輕んじ、専ら只天に替て道を行ひ、毫髪も忠臣烈士義夫節婦等を害するの心なし。今梁山泊に上つて權らく朝廷に反くは、已むことを得ざるが故なり。羅真人これを聞て大に悦び、戴宗を留むること已に五六日に至りし處に、戴宗は公孫勝にも語り合て、真人と童子とを李逵が欲りしとの事、竝に其故に李逵を罰するとの詞更に心得ず、李逵いつの間斯の大膽の働を成たるを知す。真人に再應尋ね問て始めて驚入り、彼何の談合にも及ばず、己が私の主意に任せて、斯る事有しやと恐入て再三拜謝し、何とぞ李逵が一命を助け給へと哭しかば、羅真人是を聞て、此事汝も公孫勝も知らざる所以は我元來察知せり。但し彼如き狂徒を山陣に携て何の益有や。戴宗が云、彼尤も愚蠢にして禮法を曉さずとへい共、頗る取る所あり。第一直實にして人を掠めず。第二には、人に誂はず死すとも其忠を改す。第三は淫慾邪心なく、財を貪り義を背くことなく、若し事に遇ふときは、敢て勇みて當先に進む。是によつて宋公明甚た彼を愛す。若し我李逵を救はずんば、再び宋長兄にまみえがたし。羅真人笑て云、我も已に彼は天罡星の數にして、今下界に降りし所以を曉し在るなり。我豈天に逆うて此人を傷はんや。唯暫く彼に難を受けしめ性を改ためさせんためなり。我少刻彼を取り寄せ汝に還すべきぞ。戴宗是を聞

て深く真人を拜謝す。真人又聲を揚て力士何れに在りやと呼はりしかば、忽ち松鶴軒の前に一陣の風起り、其風過ぐる處に、一尊の力士神現はれ出でて真人に告げけるは、我師何の事有て愚弟を呼び給ふや。羅真人が云、我前日汝らに命じ蘇州に撤しめたる彼李達、今已に罪業満ぬる間、汝再び蘇州に馳せて彼を牢中より奪ひ取て速に回るべし。力士神命を奉つて忽ち空中に飛び上り、已に形を雲中に隠し未だ半刻も過ぎざるに、又空中に現はれて、李達を鶴軒の前に墜しければ、戴宗忙はしく李達を扶け起して、羅真人の前に出けるに、李達は真人を見て再三禮拜し、恭しく罪を謝し悔にけり。真人が云、汝自今以後宜しく性を戒め、力を竭し宋公明を扶けよ。必らず悪心を起すことなかれ。李達再拜して真人の教化を蒙りぬ。戴宗又李達に問て云、汝此數日はいづれの處にありしや。李達答へて云、前日白雲に駕し飄然として空中に在りしが、忽ち兩人の力士神現はれて左右に従ひ、猶一陣の猛風に吹放たれ、蘇州城の知府が家に落ちぬるに、知府我を捕へて妖人ならんと拷問し、醒れたる穢水を昏で我が面上に澆ぎ、剩へ痛く數十杖策て、牢中に入れ置きぬ。諸々の牢子共我に問うて、いかなる神ぞと云ひけるゆゑ、我答へて我は羅真人の弟子直日神將なり。少し過あるに依て、老師故意此地に撤て、苦しみを受けしめ給ふ。二三日の内には又來て我を取復し給ふべし。汝ら若し我を饗應さずんば、我去牢の後仇をなすべきぞと赫しければ、牢子共大に恐れ、毎日美酒佳肴を具へて款待けるに、先刻一人の力士神來て牢門を開き、我に命じ眼を閉さしめ、暫時の間に此處に携へ來れり。公孫勝が

云、我老師は常に黃巾の力士神一千餘人を使ひ給ふ。汝等閑に看ることなかれ。李達これを聞いて益感歎し、只羅真人を拜しけり。戴宗又問、汝羅真人と童子を砍りたるよし、いつの間にかゝる働せしや。我一所に在つてさらに知らず。李達恐れ入て答へけるは、前夜長兄熟睡の間に忍び出で、觀門に竊入り、羅真人を砍殺したる實情を語て誤り入ければ、公孫勝戴宗一ツには其大膽を驚き、真人の神通を恐懼しけるに、李達も今更ら一圖に羅真人の尊きこと肺腑に染て覺えけり。戴宗又真人に告げて云、我が輩高唐州を出でて已に久し。定めて宋公明危急ならん。老師速に公孫先生を放ち、某らと共に宋公明を救はしめ給へ。もし高唐州を破りなば、早速公孫先生を當山に還し奉らん。羅真人が云、我もと公孫勝を許すまじけれ共、汝らが正義を感じ、我まげてこれを許すなり。彌義を全うし忠を成すべし。又公孫勝に對して、汝常に學びたる所の法術は、只高廉と等しうして、彼に勝れたる所なし。我今汝に五雷天罡の正法を授けんとて、則ちこれを傳授せしめ、又云、汝此法に依て宜しく行なひ、宋公明が急難を救うて、國を保ち民を安んじ、天に替て道を行なふべし。必ず人の爲に惑はされて、本心を味ましむることなかれ。汝が老母は我朝夕介抱せん上は、汝一點も憂へず、唯心を同じうし力を併せ宋公明を助けよ。我又八ツの字を彌に示さん。汝是を始終心中に記して忘れず、期に臨んで自ら誤つことあるべからずとて、頓て八ツの字を授けて云、逢幽而止遇汴而還と示し給ひければ、公孫勝これを拜誦し、則ち戴宗李達と、もに三人同じく羅真人に拜し別れて麓に下り、又老母に

巨細を語り聞け、別れを告げ家を出で、三人齋しく高唐州を望して進發し、僅か三四十里ばかり馳ける處、戴宗が云、我は先に回り宋長兄に斯くと告げ知らせんま、公孫先生は李達と共に大路を過ぎて來り給へ。然らば我再たび半途に出て相迎ふべし。公孫勝が云、是尤も可なり。賢弟は彌速に馳歸つて、豫じめ宋長兄に斯くと訴たへ給へ。我が輩兩人は後より相續いて來るべし。こゝに於て戴宗は遂に兩人に別れ、神行の法をなし、恰も飛ぶがごとくに急ぎけり。

入雲龍法を聞はしめて高廉を破る

斯て公孫勝李達は、路を行くこと已に三日にして、地名を武岡鎮と云處に至りぬるに、此街極めて繁華にして、人煙しげく起ちのぼり、賣買又混雜せり。公孫勝これを見て、李達と、もに一間の酒店の内に入て、酒を酌て飲みける處に、李達公孫勝に對して云けるは、此店には都て牛肉猪肉のみ買うて先生の用ひ給はん素食を賣らす。我今先生のために素食を求めて來らんとて、遂に酒店を立出で街の上りに馳來る。斯る處に一簇の人、街を取圍んで在りけるが、只顧聲を揚げて無雙の勇力かなと喝采ければ、李達は是を聞て同じく立ち住まり一覽するに、圍の内一人の大漢子在て、三十餘斤の鐵鎚を使ひ諸人に看せしむ。李達片時是を見て、暗に冷笑ひ、忽ち圍の内に入り、大に呼はり云けるは、汝いかなぞ傍若無人に鐵鎚を使うて、諸人に見せしむるや。我今不圖是を見て想はず眼を汚しぬ。我懸の爲に使うて汝に見せしめん。彼大漢子打咲つて云、汝は何者なれば、安りに我が鐵鎚を使はん

と云や。我肯て汝に鐵鎚を借ん。速に使うて見せしめよ。若しこれを使ふこと能はずんば、汝が面に三ツの拳を與へんぞとて、則ち鐵鎚を取て李達に借ければ、李達これを取て恰も筋を弄ぶが如く、輕と一場使うてみせけるに、彼大漢子この體を見て大に驚ろき、忽ち地上に跪きて李達が姓名を問ひしかば、李達答へて云、先づ汝が姓名はいかん。且つ汝が住所は何れに有るや。彼漢子が云、我が住所は則ち此前面にあり。先づ我家に來り給へとて、頓て李達を引て回りける處に、李達家内を見に、多く鐵砧、鐵鎚、火爐、鉗、鑿等の道具有しかば、李達暗に想道、此漢子は定めて打鎚匠なる可。若し彼を山陣に誘引せば、其用多からんに、我宜しく是を諫て同往せば可ならんとて、則ち問うて云ひけるは、汝早く姓名を通じ我に知らせよ。彼漢子答へて云、某姓は湯、名は隆と號す。亡父はもと延安府に事へしかども、我は唯遊興を好て家財を失なひしゆゑ、今落魄して此處に逗留し、かくのごとく打鐵匠をなして今日の過活とす。人皆某に諱名を施して金錢豹子と稱ふ。しらす豪傑の貴姓大名はいかん。李達が云、我は是れ梁山泊の頭領黑旋風李達と云者なり。湯隆是を聞き、大禮を行なうて云ひけるは、長兄の大名を聞く事雷の耳に轟ろくがごとし。何の幸にや今日尊顔を拜し奉る。李達が云、賢弟此處に在りとも立身の期遠からん。しかし我に従て梁山泊に來らば、早速頭領となつて福を保つべし。湯隆大に悦こび云、長兄もし某を山陣に携へ給はば、犬馬の勞を施すべしとて、則ち李達と義を結んで、兄弟の盟を誓ひければ、李達大に悦こびけり。湯隆又いはく、我家には幸ひ眷屬あらざれ

ば、早速長兄に隨ひて山陣に上るべけれ共、暫く街に出でて三盃を傾け、今宵は曲て我家に一宿ありて、明日我を携さへて山陣に回り給へ。李逵が云、我一人の先生に同伴し、今前面の酒店にあつて待ち給ふなれば、今日急に回るべし。湯隆がいはい、長兄何ゆる斯く頻りに急ぎ給ふや。李逵が云、汝は未だこれを知るまじ。宋公明今高唐州に發向して、高廉と戦ひ給ふ。此故に彼先生忙はしく馳せて親方の陣に至り給ふ。汝いよ、山陣に上らんとならば、早く家内を收拾めて來れとて、頓て用意を調へしめ、兩人又彼酒店に回りにて公孫勝に見みゆ。公孫勝深く李逵を埋怨て云、汝何ゆるかくのごとく遲滞せしや。李逵が云、少しき縁故有りしなりとて、則ち湯隆を引て公孫勝に見えしめ、義兄弟の盟を結びし事共委細に語りければ、公孫勝これを聞て奇特なる計ひと思ひけり。既にして三人の豪傑酒店を出でて武岡鎮を離れ、直ちに高唐州を望て馳せける處に、戴宗はや此處に出でて迎へしかば、公孫勝是を見て大に悦び、則ち戰の勝負を問ひけるに、戴宗答へて高廉今箭疵平復し、毎日出でて戰を挑めども、宋長兄堅く陣を守りて出戦はず。只先生の至り給ふを待ち侘てなり。李逵又湯隆を引て戴宗にまみえしめ、義を結びし次第を精しく告げしかば、戴宗これを悦び、四人同じく路を急ぎける程に、已に高唐州の堺に至り、宋江が陣を望むこと、猶十里計を隔てける處に、呂方、郭盛はや百餘騎を領して出迎へ、遂に延て陣中に至りしかば、宋江吳用これを接へて、各大に喜悅し、頓て酒宴を設けて風霜の疲を慰さめけり。此時李逵湯隆を引て宋江吳用并に諸頭領にまみえしめ、其日は

各 飲酌を催しける。其翌日五更の時分已に軍の用意を相調へ、宋江、吳用、公孫勝、魯智深、林冲、花榮、李逵、張林、關公、周倉、孫乾、曹正、樊瑞、韓伯、王植、呂方、郭盛、馬麟、鄧飛、馬麟、郭盛等の五に馳せ出で、金鼓齊しく鳴らさせて、遂に城下に攻來る。高廉城中に在つて敵寄來ると聞き、急に衣甲を着して城外に打て出で、三百の神兵を左右に従がへて、早や敵陣に對しければ、互に攻鼓を搦て喊の聲を合せけり。時に宋江が陣中より、大將十騎進み出でて兩邊に相分る。左の方には花榮、秦明、朱同、歐鵬、呂方等、馬を並べて相勸へたり。右の方には林冲、孫立、鄧飛、馬麟、郭盛等の五將、同じく鋒を並べて勸へたり。中軍には宋江、吳用、公孫勝馬を勸へて敵陣を望み見るに、門旗の下より二三十人の官軍共、知府高廉を圍んで陣前に進みけるに、知府先づ大音聲に罵つて云、汝水泊の盜賊ら若し戦はんと欲ふ心あらば、唯一戰の内に勝負を決せよ、必ず走ることなけれ。宋江是を聞て大に怒り、誰かある彼れ活捉と呼はりしかば、小李廣花榮鎗を燃り、馬を躍らせて突出る。高廉が陣中よりは、一人の上將薛元輝と云者兩刀を揮て跑出、直ちに花榮を望んで斬てかゝる。花榮も又鎗を擧て相迎へ、兩將陣前に在つて、各勇を奮ひ、戦ひ已に二十餘合に至りし處に、花榮忽ち馬を回し逆しかば、薛元輝計とは知らずして、同じく馬を飛せ刀を舞して起來る。花榮これを見て暗に弓箭取て打搭へ、暫し拽滿て漂と放ちければ、其箭あやまたず薛元輝が喉に中つて、馬より下に射落したり。こゝに於て兩軍喊き叫んで入亂れ、功を争ひ死を捨て攻戦ふ。高廉は馬上に在て、元輝が討れたるを見て大に怒り、即ち口中に咒語を念じ銅の牌を敲しかば、神兵隊裡より驟に怪風起り、砂を

走らせ石を飛ばせて天地を暗まし、喊の聲起ると齊しく、豺狼虎豹等の性獸毒虫空中に現はれ出で、直ちに宋江が陣を望んで飛び来る。公孫勝馬上に在てこれを見、早くも寶劍を抜いて咒語を誦へしかば、忽ち一道の金光生じ、敵陣の中に冲入りし處に、彼獸共此光を見て即時に神通を失なひ、盡く皆紛々として地に墜けり。諸軍是を見るに、都て白紙を以て造りたる豺狼虎豹なり。此時宋江勢に乘じて、三軍を進め緊しく散々に攻しかば、城兵數多討れて右往左往に敗走し、遂に城中に逃げ入りけり。梁山泊の兵共勝に乗て城下まで攻寄けれども、城中より矢石雨のごとく打出しければ、宋江急に金を鳴して兵を收め、且要害の地を擇んで陣を取り、即ち諸頭領を聚めて其功を論ずるに、各大いなる勝を得たり。宋江吳用并びに諸豪傑、都て公孫勝が神功道徳を感歎せり。翌日又宋江兵を分つて城の四面を圍ませ、緊しく一齊に攻めさしむ。公孫勝則ち宋江吳用に對して云けるは、昨日敵の一陣を破りしか共、彼三百の神兵恙なく城中に引入しかば、高廉が人馬猶頗る尖し。今日此の如く緊く城を攻めば、彼必定我軍馬の疲を料り、今宵夜討に來て陣を劫ふこと有るべし。天色已に晚なば、豫がじめ兵を分て四方に伏置、此處には空陣を設け、三軍に號令を傳へ、霹靂響きて陣中に火起るを相圖と定め、四方の伏兵一度に進ませ、前後左右より取圍んで撃しめば、只此一戦に全き勝を得べし。宋江吳用この計を聞て其義に同じ、いよく三軍を進めて城を緊しく攻させ、未の下刻に至て遂に兵を陣中に收め、三軍に酒食を賞して氣力を養なはせ、紅日漸々西に沈んで天色看昏しかば、諸頭

領先づ兵を領して、各四方に馳て埋伏す。扱宋江、吳用、公孫勝、花榮、秦明、呂方、郭盛等は、三軍を引て坂の上に登り、暗に敵の寄するを候ひけり。此夜高廉果して敵の疲を料り、宜しく夜討して陣を劫ふべしと三軍を催はし、彼神兵等には、各器の内に硫黄焰硝等の火薬を藏さしめ、二更前後に至て城外に打出で、當先には三百の神兵を進ませ、高廉は自ら三千餘騎を引て後より進み、漸敵陣に近付しかば、高廉馬上にあり、妖法を行ひけるに、忽ち黒氣天に沖て妖法大に起り、砂を飛ばせ石を走らせ土を播げ塵を揚ぐ。三百の神兵各火薬に火を着て、一向陣中に投入し處に、公孫勝高き處に上つて寶劍を揮ひ、咒語を誦へ法をなしければ、空陣の内俄に刮刺々々と響て霹靂大に起る。三百の神兵是を見て、急に退かんとせし處に、空陣の内又猛火起りて光焰半天に飛び、四方明亮なること恰も白晝のごとし。此時四面の伏兵一度に並び發し、引包んで撃ちしかば、三百の神兵一人も漏さず討取り。高廉これを見て大に驚き、僅か三十餘人を引て、城中に逃入らんとしける時、豹子頭林冲馬を飛ばせて追ひ來り、散々に撃ちしかば、高廉は只五六騎を領し、這々城中に逃げ入りけり。此夜或は討れ又は捉はれたる官軍、其數を知るべからず。翌日又宋江兵を引て城を重々に取圍み、水をも洩さず四面より攻めければ、高廉益駭ろき、暗に心中に想ひけるは、我多年學び得たる妖術、料らず今日敵に破られ、今更迎へ戦はん計なし。只能く急を告げて援の兵を乞はんとて、忙がはしく書簡を修のへ、兩人の統制官に命じ、先づ東昌寇州兩所に馳けるに、兩人の統制は此日城門を開

いて斬て出で、直ちに西を望んで走り行く。梁山泊の兵これを見て、急に追討せんと進みし處に、軍師吳用三軍に下知して云けるは、必ず彼を追ふことなかれ、我宜しく計を以て計に就かん。宋江問うて云、軍師はや良しき計ありや。吳用が云、今城中には將寡なく兵乏し。このゆゑに今人を馳せて援兵を隣國に求む。我此便機に乗じて一ツの計あり。親方の兵兩彪を僞はりて隣國の援兵に假て終路再三是を戦かはしめば、城中より此光景を見、必ず兵を出して戦を助くべし。此時暗に人馬を分て城を乗取しめ、又た高廉を小路に引き入れ、終にこれを生捉べし。宋江是を聞て大に悦び、即日戴宗を梁山泊に回して兩彪の兵を取らしめ、則ちこれを假て、兩國の援兵となしにけり。扱高廉は毎夜城中に烽火を揚させて、援兵の至るを待ちける處に、ある日宋江が陣中、戦かはすして自ら亂れしかば、城兵どもこれを見て、忙はしく高廉に告げけるに、高廉急に衣甲を着し、自ら城樓に上り城外を臨み見るに、兩國の援兵攻鼓を鳴して左右より攻來りしかば、宋江が人馬大に亂れて奔走す。高廉これを見て、援兵はや到りしぞ。戦を助けて宋江を活捉よとて、頓て正手の門を押ひらき、主從突て出で、直幕に宋江が本陣に押懸けり。

黒旋風穴を探て柴進を救ふ

宋公明は此時花榮秦明兩人を引て、戦も交へず小路を過て逃走る。高廉大に罵て云、宋江賊首何國に逃がさんやと、喊き叫んで進み來る處に、石炮の聲大に響きしかば、高廉心を疑がはしめ、遂に宋

江を棄て引回さんとせし處に、兩邊に又金鼓の聲大に起つて、左に呂方、右に郭盛雙方より突て出で、都て五百餘騎を引て攻めしかば、高廉戦はん氣力なく、急に路を索めて逃げけるに、はや兵過半討せ高廉大に駭き遂に城下に至て城をみるに、城中には都て梁山泊の旗號を、風に翻して立てければ、高廉甚だ仰天し、援兵を尋ねて左右を顧みるに、只一人の援兵もあらざれば、高廉限りなく後悔し、急に敗軍を收めて徑路を馳せ行き、十里ばかりに至りし處に、山の後より一彪の兵突き出で、當先に馬を進むるは病尉遲孫立道を擱て呼はつて云、我老早此に在て汝を待侘ぬ。早く馬より下て絆に就け。高廉是を見て、益々恐懼し、再び引回らんとせし處に、又一彪の兵馳せ出づるは、美髯公朱同諸勢を引て、高廉速に縛を受けよと呼はり、前後より挟んで攻ければ、高廉今は士卒皆討たれ、馬鞭等く棄て山の上に馳上らんとせし處に、雷横横合より突き出で、歩軍に命じて山に趕上らしむ。高廉必死の時及んで、慌て忙し眼を閉ぢ頻りに口中に咒語を念ずれば、足下に一片の黒雲起り、冉冉高廉を引き包んで空に騰り、直ちに山頂にあり。公孫勝急ぎ此處に乘切來て、則ち馬上に寶劍を揮り、口中に咒語を唱へ大に一聲一喝せしかば、高廉雲中に在て神通を失なひ、倒に地に墜來りて、山より足下迄轉び來る處を、插翅虎雷横朴刀を横たへ馳せ寄り、高廉を斬て兩段となし、頓て首を取りけり。憐むべし高廉は半世の英雄にして、一時に南柯夢裡の人と化しぬ。宋江は高廉已に討れしと聞き、三軍を引て城中に進み入り、堅く諸軍に觸て民を撫しめ、秋毫も犯すことなかりける。宋江先づ大牢の邊

に馬を進め、牢中の罪人を悉く出さしめ、其内を尋ねしかども柴進はみえず。只柴進が眷屬共は、都て別牢の内に在りしかば、先づ是を救ひ出して、再び柴進を方々捜しけれ共、曾て消息しれざれば宋江大に憂へ、我かく入馬を起して此城を攻めたるは、まつたく柴進を救はんがためなるに、柴進のみ牢中に在らざるは、必定殺されたと覺えたりとて、兩眼に涙を浮めしかば、吳用が云、我猶これを尋ねみん。先づ悲しみ給ふことなかれとて、頓て牢中の節級等を此彼より引出し、柴進が死生を問ひければ、其内一人が云けるは、某は當牢の節級蘭仁と申者なり。前日知府が命を受けて柴進を預り、もし何等の事出来らん時は、早速柴進が命を害すべしとの事なり。三日以前にも知府又刑罰を加へんとて、柴進を引出せと命じけれ共、某熟々柴進が動靜をみるに、相貌端嚴にして等閑の人にあらざるゆゑ、刑罰を行ふに忍びず、唯偽て病に托ける處に、次の日又知府より柴進を引出せと命せし故、某又詐て柴進ははや病死せりと申けるに、専ら合戦の事に間なく、知府又これを問はざりけり。某知府が捜さんことを恐れ、昨日柴進が頸枷を除き、井の内に藏し置けり。只彼が今日の存亡いかゞぞやしらす。宋江是を聞て大に驚き、忙しく蘭仁とも其所に至りみるに、牢後にある枯井にて、内を見るに只暗々と黒くして、其の深淺幾何たることを知るべからず。蘭仁に命じ索を枯井に落し入れて、其深さを探らせけるに、約莫八九丈あまりなり。宋江これをみて云ひけるは、柴大官人は必定此内に死し給ひしならんとて、頻りに愁涙を催しけるを、吳用諫めて長兄先づ哭き給ふな。井

の内に人を入れて其存亡を見せしめ然るべしとて、則ち左右を顧み誰かある此枯井に入て、柴大官人の存亡を見んやと、未だ云も終らざるに、黒旋風李逵大に呼はつて、我肯て井に入て柴大官人の死生を見届くべし。吳用が云、汝入らば尤も可ならんとて、大いなる竹籃の大丈夫なるに箆を着け、大いなる鈴二ツを結付け、李逵を此上に坐せしめ、頓て井の内に落ち入れけるに、漸々井の底に至りしかば、李逵竟に籃の内より扒出でて、一向四方を探りける處に、果して一個の人に探り著りぬ。柴大官人柴大官人と呼ながら、推動かしけれ共、更に答應なかりしかば、李逵手を以て柴進が口に著て死生を伺ふに、猶微し氣の絶ざる所有りければ、李逵心中にこれを喜び、遂に柴進を籃の内に扛載、己も俱に乗つて彼の鈴索を動かしかける處に、諸人索を取て一度に拽上しかば、宋江是を見て大に悦び、先づ柴進を少しづつ温ため、尙漸々火氣を増して氣力を引立養育を加へ、終に車に載て梁山泊へ送りけり。諸頭領已に高廉が家に亂れ入り、眷族悉く斫殺し、又金銀米錢を搜し取て、車に積み三軍都て高唐州を離れ、梁山泊へ馳せ回る。終路秋毫も民を犯さず。一度に咄と凱歌を唱へて、不日に山陣に至りしかば、晁蓋を始めとして、衆皆出迎へて大に賀し悦びけり。此時柴進は病を推して廳上に出で、深く諸頭領に謝しけり。此度山陣に柴進湯隆を得て、彌光りを増し、則ち酒宴を設け飲酌を催し、各興に入りけり。扱東昌寇州兩所の官府には、高廉已に殺されたと聞えしかば、急に表を具て京に使者を馳せ、軍の次第一々詳に朝廷に奏聞す。且つ又高唐州の敗軍共悉く京に上つ

て、此事を訴たへ奉る。此時太尉高俅は、姪高廉が殺されたるを聞いて大いに怒り、翌日五更の時分朝廷に至りし處に、帝紫宸殿に出御ありしかば、文武百官袂を連ね左右に拜候す。時に殿頭官高らかに呼つて、事あらば列を出でて奏聞せよ。事なくんば簾を捲て退去せよと云ける時、太尉高俅百官の内より進み出て奏しけるは、今濟州梁山泊には兩人の賊首晁蓋宋江、妄りに衆を聚めて山陣を守り、専ら隣國を犯し兵糧を奪ひ擅まに賊威を振ふ。向にも已に濟州の官軍を害し、其後又江州を鬧がし無爲軍を打、今又高唐州を乗取て若干の軍民を殺し、城中の金銀米錢は悉く奪ひ取て山陣の用に供へ、近々大軍を催して、京を侵さんと圖るの聞えあり。若し急にこれを滅ぼし給はずんば、彌賊勢を養つて大敵となるべし。伏して望むらくは、陛下明らかにこれを察し給へ。帝叡聞有て大いに驚かせ給ひ、則ち高太尉に命じ軍馬を調のへしめ給ふ。高太尉また奏して云、彼尤も賊威を振ふといへども、いまだ大軍を差し向くるに足らず。臣今一人の勇士を薦めて賊を撃しむべし。帝又勅命有て宣ひけるは、卿眼力をもつて薦めん者は、定めて文武兩全の名將たらん。速に其名を報じて兵を起さしめよ。高俅奏してはいはく、此者は則ち河東の名將たりし呼延灼が玄孫にして、呼延灼と申者なり。原來萬夫不當の勇あり。彼汝寧郡の都統制となつて、手下に又精兵多し。若し彼に兵馬指揮使の職を授け給ひて、梁山泊を攻めさせ給はば、暫時に山陣を掃ひ清めて、叡慮を安んずべし。帝叡聞あつて大に悦び、頓て勅書を以て呼延灼を朝廷に宣給ふ。此日呼延灼は汝寧郡に在て公事を辨じ居ける處に、朝

廷より勅書到來すと報じければ、呼延灼急に城外に出て勅使を迎へ奉り、直ちに統軍司に至て勅書を拜讀し、即日用意を調へて天使と、もに京へと急ぎしかば、日あらず東京の殿帥府に至て、高太尉に見えける處に、高俅悦んで呼延灼が人品を見るに、誠に一表の人物、文武兼備の大將と見えけり。抑此人兩條の銅鞭を使うて、神妙を得たりとて、綽名して雙鞭將と呼ぶとかや。高俅翌日早朝帝闕に召具して、徽宗天子の天顔を拜せしめければ、則ち兵馬指揮使の綸命下り、踢雪烏騮と云一日千里を行く名馬を賜ふ。此馬は渾身墨錠のごとく黒く、四蹄白雪のごとく白きを以て名とす。呼延灼天恩を拜謝して、再び殿帥府に至れば、高俅軍事を談話し、呼延灼に向かひ、將軍此度誰を以て先鋒たらしめんや。答へて云、陣州の團練使、姓は韓、名は滔と云者あり。原東京の人にて武擧の出身なり。一條の棗木の櫛を使ひ得て、八百勝將軍と呼ぶ。是を正先鋒たらしめん。又外に潁州の團練使、姓は彭名は玘、是ももと東京の人にて累代將門の子なり。一口三尖兩刃刀を使うて、天目將軍と呼はる。此人を副先鋒たらしめん。凡そ此兩人樊噲の勇力あつて、武藝衆人に秀でたれば、軍利眼前たらんと。高俅大に悦び、速に此兩人へ急使を馳せて殿帥府に呼び寄せければ、不日に來て高太尉と呼延灼にまみえけり。高俅此度の軍務を申し渡しけるに、兩將畏つて領掌す。高俅三將に問ひけるは、各三路の人馬總べて幾何の勢有りや。呼延灼答へて、三路の人馬約莫一萬に足るべし。高太尉が云、既に然あらば足下ら自己に歸りて軍馬を催し、各速に出陣有るべし。呼延灼が云く、某ら三路の人



馬は原來健にして、能く物馴たる者共なれば、これを催すに易し。只恐らくは衣甲全からずして、日限を延引することあらんか、太尉宜しう是を察し給へ。高俅が云、若し衣甲全からずんば、御藏の衣甲を取り出だして與ふべし。只急に日を選んで出陣有るべし。呼延灼命を奉はりて大に悦こび、則ち鐵甲三千領、并に馬甲五千領、其外鎗三千、刀一千、炮五百、及び弓矢若干を乞ひ取て、已に高太尉を辭しければ、高俅又三千の戰馬を以て饒に送り、早々賊を打ち平げ、速に歸陣有るべしと命じける故、三人の大將終に太尉高俅に別れ、各先づ本國に歸りて軍馬を催しけり。

### 五編卷之七

#### 高太尉大に三路の兵を興す

斯て呼延灼并びに先鋒の二將、各州に歸りて軍馬を催し、半月の間に都て調ほりしかば、呼延灼より出陣のことを、太尉高俅へ候ひけるに、高俅又二人の軍官に酒肴を持ちしめ、呼延灼が陣中に遣し、用意調ほる上は心次第早く出陣有るべし。且つ此瓮酒疎肴を以て、三軍を賞する微意を表すと申送りければ、呼延灼使者に對面して厚誼を謝禮し、早速進發して、梁山泊へ攻來る。山陣にははや此事聞えしかば、晁蓋、宋江、吳用進み出でて、諸頭領衆皆聚義廳に集會し、計を商議す。時に吳用進み出でて云ひけるは、我聞く呼延灼は河東の名將、開國の功臣呼延贊が嫡派の子孫にて、文武兩全の大將たれば、定めて軍中にも勇士多かるべければ、等閑の敵にあらず。某愚意を以てこれを量るに、先に力を以て敵し、後に智を以て破らば可ならん。宋江是を聞いて其議に服し、則ち霹靂火秦明に第一陣を打しめ、豹子頭林冲に第二陣を打しめ、小李廣花榮に第三陣を打しめ、一丈青扈三娘に第四陣を打しめ、病尉遲孫立に第五陣を打しめ、宋江は自ら十人の頭領を引て、後陣より進む。則ち左軍の五

太將は、朱同、雷横、穆弘、黃信、呂方なり。右軍の五將は、楊雄、石秀、歐鵬、馬麟、郭盛等なり。水軍の大將は、李俊、張横、張順、阮小二、阮小五、阮小七等なり。李逵楊林兩將は歩軍を引て兩路に埋伏す。既にして秦明はや兵を引て山を下り、要害の地を擇んで、陣勢を列ねたり。此時冬の天氣たりといへ共、幸ひに風和らぎ日暖にして、春の天氣と等しかりければ、三軍寒に苦しむことなかりけり。翌日官軍の先鋒、百勝將軍韓滔、人馬を率し已に至り、秦明と其間近く陣を對す。此夜は先づ軍馬を休めて戦はず。次の日兩軍互に攻鼓を打て、喊の聲山谷を響かせけり。宋江が陣中より霹靂火秦明馬を躍らせ棒を横たへて、陣前に進み出しかば、寄手の陣中よりは、百勝將軍韓滔鎗を燃つて跑出、大に秦明を罵しつて云、天兵已に至りぬるに、汝何ぞ馬を下りて降參せざるや。若し我兵を抗拒ば、忽ち山陣を踏増して汝が首を街に示衆ん。秦明これを聞て大に怒り、棍を揮て韓滔に打て蒐る。韓滔鎗を擧てこれを迎へ、戰已に二十餘合に至り、韓滔漸々疲れて逃しかば、中軍の總大將軍呼延灼已に至つて此體を見馬を飛ばせ棒を輪して、陣前に馳せ出づる。此時又第二陣の大將豹子頭林冲これを見て、飛ぶがごとくに跑出、直ちに呼延灼を迎へて相戦ふ。此兩將もとより萬夫不當の勇士なれば、互に威を振ひ勇を勵んで、鬪已に五十餘合に至れ共、未だ勝負を分たず。第三陣の大將少李廣花榮大に呼つて云、林將軍暫く歇み給へ、我これを活捉んとて、馬を進めて馳せ出ければ、林冲は呼延灼を棄て引退く。呼延灼は林冲が強勇なるを見て、敢て追はず。同じく馬を勒へ





て本陣に引回しぬ。此時天目將軍彭玘、馬を陣前に乗出して、花榮を罵つて云、汝反賊何ぞいふに足らん。我と三十合戦て勝負を決せよ。花榮大に怒つて、彭玘に搦蒐る。彭玘これを迎へて馬を交へ、戦已に三十餘合に至つて、彭玘頗る疲れしかば、呼延灼又馬を馳せて跑来り、遂に彭玘に替つて、花榮と鋒を交へ、戦ひ未だ三四合にも及ばざるに、第四陣の女大將、一丈青扈三娘已に至つて大に呼はり云けるは、花將軍先づ歇み給へ。我一戦を助けんと馬を進めしかば、花榮は是に譲りて引回しぬ。彭玘又跳來つて一丈青と戦ひける處に、第五陣の大將病尉遲孫立、已に至つて兩人が戦ひを見るに、はや二十餘合に及べども、いまだ、雌雄を分たざりしが、一丈青忽ち馬を回して逃ければ、彭玘急には追かけ、漸々近くなりし所に、一丈青暗に鈎索を投て、彭玘を馬より下に鈎落しければ、孫立急に兵を馳てこれを捉けり。呼延灼これを見て大に怒り、鐵棒を揮つて一丈青に打て蒐る。一丈青是を迎へ十合計戦ひしかば、呼延灼只一打と大に焦燥て打し處に、一丈青兩刀を交へて鐵棒を隔住ければ、響に應じて火光を撥と散しけり。呼延灼是を見て益々怒り、又鐵棒を擧て打んとせし處に、一丈青終に敵すること能はず、馬を回して本陣に逃來る。呼延灼後に隨つて趕蒐しかば、孫立鎗を拵つて相迎へ、兩將勇を奮て攻戦ふ。此時宋江も十人の大將を引て陣前に至り、諸頭領と俱に兩將の戦を遠見す。扱此兩人の大將は、各有名の勇士なれば、互に秘術を盡して精神を揮ひ、戦已に三十餘合に至れども、勝負さらに分たず。宋江是を見て、只顧感歎止ざりけり。時に官軍の陣中より、韓滔

大軍を引て一度に咄と寄來る。宋江是を見て左右に下知しけるに、十人の大將並に林冲等四陣の大將、兩路に分つて緊しく夾んで攻しかば、呼延灼も同じく人馬を分て迎へ戦ふ。宋江が兵共勢に乗じて撃しか共、未だ全き勝を得ざるはいかぞなれば、官軍共は都て馬に甲を着せ、能く箭を防いで進むゆゑ、宋江が人馬は動もすれば跑立られて、討る者多かりけり。宋江これを見て且金を鳴し、三軍を收めければ、呼延灼も又兵を二十餘里退ぞけて、陣を堅固に列ねける。宋江は兵を引て西山の下に屯しぬ。此時軍卒等彭玘を縛り引出しければ、宋江自ら彭玘が絆の索を解て帳中に入れ、賓主席を分て坐すに定まりけるに、宋江先づ身を翻して、彭玘を拜しければ、彭玘急に拜を還して云、某は擒となりし敗軍なれば、理まさに死につくべき處に、將軍却て大禮を施し給ふはいかん。宋江が云、某ら衆人は身を容れんずる所なき故、暫く梁山泊に籠城して、難を避け禍を脱かる。今已に天兵を受くる上は、早々頭を延して縛に就くべきことなれ共、只一命を害せられんことを恐れ、自ら罪を負て鋒を交へ、敢て將軍の威風を犯しぬ。願くは罪を免し給へ。彭玘云、某もとより宋將軍の仁徳を聞及びけるに、果して其言虚しからず。若し彌某が一命を助け給はば、歸京の刻宜しく帝に奏聞して、將軍の忠義を訴ふべし。宋江が云、某ら諸々の兄弟共都て心を一ツにして、朝廷の御赦免を待奉る。若し萬一恩赦を蒙らば、生を忘れて國に報い、死を捨て忠を盡すべし。秋毫も謀反の企あらざる間、將軍いよ／＼吹嘘を垂給へとて、即日彭玘を山陣に送つて、晁天王に遇しめけり。扱も呼延

灼は兵を收めて陣を取り、則ち韓滔と商議して云けるは、いかなる計を以て梁山泊を攻破らんや。韓滔が云、明日總勢を一ツに合せて、緊しく攻戦は、必定勝を得べし。呼延灼が云、足下の言我心に合へり、我宜しく計をなすべしと大に領掌しけり。

呼延灼連環馬を擺布す

呼延灼は先鋒の意に隨ひ、宜しく人馬を擺布べて、敵を破る計をなすべしとて諸軍に號令を傳へ、三千疋の馬軍を一擺とし、但し三十匹ごとに一連として鐵環をつけ、若し遠き敵に遇ふときは、箭を放つてこれを攻め、もし近き敵に遇ふときは、鎗を入れてこれを突くべしと計を定め、一人一己の勝を用ひず、一連一環の勝を取る。則ち三千の連環馬軍を分つて一百隊とし、又五千の歩軍を後に備へて救とす。呼延灼と韓滔とは後陣を押へて兵を三面に分け、其便機に依て宜しく戦ふべしと、豫じめ用意をぞ催しけり。翌日宗江又五隊の軍馬を前に進ましめ、後軍の十將は兩路に備へ、又伏兵を分て左右に設く。此とき五隊の前軍は、都てはや陣勢を列ねり。中には秦明あり。左には林冲一丈青あり。右には花榮孫立あり。宋江も又十人の大將を引て、已に至り重々に人馬を備へて敵陣をみるに、約莫一千許の歩軍ありて、只願鼓を搥喊を發するのみにして、出戦ふ者一人もあらざりけり。宋江これを見て心中に疑ひ、暗に號令を傳へて兵を先づ退ぞけんとせし處に、敵陣の内に炮の聲大に響き、彼一千の歩軍忽ち兩路に分れて、三隊の連環馬軍出來る。左右には射手を揃て散々に射さしめ、中には盡

く長鎗の軍士を設けたり。宋江を見て大に驚き、急に三軍に下知して、箭を射さしめしか共、三千騎の連環馬軍三十騎づつ一連になつて、四方八方より夾で攻めしかば、宋江が五隊の前軍、大に亂れて奔走す。中軍の人馬も又是を欄當こと能はず、同じく鎗を倒して逃げ走る。宋江は十人の大將を左右に随へて、慌て忙き走り行く處に、一隊の連環馬軍、はや近々と赶上つて已に危くみえし時、李逵楊林左右より伏勢を出して、敵の馬軍を欄當遂に宋江を救ひけり。宋江は這々水邊に至けるに、李俊、張横、張順、阮小二、阮小五、阮小七等六人水軍の大將、忙はしく兵船を揃へて、宋江を船に乗しめしかば、諸大將も同く船に乗て漕出す。彼連環馬軍直に水邊に趕至つて、散々に射けれ共、船の上に傍牌多かりしかば、傷ふ者もなかりけり。諸の兵船已に鴨嘴灘に至つて岸に上り、水陣の内を兵を屯して、討れたる者を算ふるに、半に過ぐると記しけり。然れ共幸ひに諸頭領の面々は戦死もなかりしかば、宋江是を悦びぬ。斯る處に石秀、時遷、孫新、顧大嫂等慌しく逃げ來て、宋江に告げけるは、敵の歩軍大勢攻寄て店を打毀して、某らも已に活捉れんとせしか共、伴ひに快船來て救ひしゆる、苦き命を脱しなり。宋江一々これを撫慰して、諸大將の内、箭疵を受けたる人を算るに、乃ち林冲、雷横、李逵、石秀、孫新、黃信等六人なり。士卒の内矢に中りたる者は、其數を知るべからず。晁蓋此よしを聞て大に駭ろき、吳用公孫勝らと共に山を下りて水陣に至り、即ち軍の次第を問ひけるに、宋江は唯憂愁の顔色不快なりしかば、吳用諫めて云、長兄何ぞ憂ひ給ふや、勝負は兵家の常事な

り。宜しく心を慰さめ給へ。別に良計を以て連環馬を破るべし。晁蓋此時號令を水軍に傳へて牢く水邊を守らせ、則ち宋公明を山陣に請て、暫らく休息あらしめんとせしか共、宋江敢て山陣に上らず、唯帶傷の大將のみ先づ山陣に送つて、養生なさしめけり。扱呼延灼は大に勝を全うして、本陣に歸りければ、三隊の諸將盡く來て各功を獻す。活捕の軍士五百餘人、奪ひ取りし戰馬五百餘疋、其外得たる處の首は、數を知らずと記せり。呼延灼大に悦び、即日飛脚を京に奉つて捷軍を報じ、重く三軍を賞しけり。扱高太尉、呼延灼が表を得て、心中甚だ悦び、翌早朝帝へ表を奏しければ、皇帝御感斜ならず、御酒一百樽、錦袍十重、并に賞錢十萬貫、これを三軍に賞すべきよし、高太尉に勅命有りければ、高太尉は殿帥府に回り、勅使を撰んで、呼延灼が陣に遣しけり。呼延灼は勅使到着と聞きしかば、韓滔と共に諸將を引いて、二十里外に出で、恭しく勅使を迎へ陣中に至り、謹しんで恩を謝し賞を受けて、勅使を豊かに饗應けり。呼延灼又勅使に對して云けるは、頃日の戰に五百の賊を生捕しかども、賊首宋江を生捉て後、共に京に引かんと欲し、尙陣中に籠置ぬ。勅使問て云、彭玘先鋒は何故賊に捉はれしや。呼延灼が云、彼頻りに宋江を捉へんと欲して深入せし故、却て敵に捉はれぬ。今群賊等銳氣を滅したれば、必定來り戦かふこと有るまじ。某再び兵を分つて攻行き、終に賊首らを生捕て、梁山泊を拂ひ清むべし。然れ共唯恨むらくは、山陣の四方都て水泊にして進み行かん路なし。遙かに賊の寨柵を見るに、若し大炮を以てこれを打ば、忽ち打破つて全き勝を得べし。我

軍馬尤も能く戦ふといへども、進まん道なき故、今更急に破らんこと頗る難し。某聞く東京に炮の上手あり。則ち轟天雷凌振と云者なり。彼能く大砲を放つて、十四五里の間を飛ばしむ。炮子の至る所天崩れ地陥いる。山倒れ、石裂る。若し此凌振を得て賊を攻めば、必ず勝を取ること旦夕にあらん。況んや此凌振は、深く武藝に通じ弓馬に熟練せり。若し天使京に歸り給はば、高太尉に此事を訴たへ給ひて、早々彼を遣はし戦を助けしめ給へ。勅使これを領掌し、翌日遂に別れ不日に京に歸りて、高俅に見え、呼延灼が凌振を索め、炮を打たしめんと願ふことを詳に語りければ、高俅則ち人を馳せて凌振を招く。此者は原燕陵の人にて、宋朝に雙なき炮の上手なり。殊に武藝も亦名譽の達人なれば、人は是を稱せずといふことなし。此とき凌振殿帥府に至つて高太尉に見えしかば、高俅委細を語りて、急に發足すべきよし命じけるに、凌振謹で領掌し、やがて諸色の砲を車に載て百餘人を領し、翌日東京を打出で、遂に呼延灼が陣に至りしかば、呼延灼韓滔これを迎へて對面す。凌振先づ水陣の遠近路數を一々詳に問ひ、險阻の地を撰びて、三様の砲を設くべしとて、豫かじめ其用意を催す。第一は風火炮、第二は金鞍炮、第三は子母炮とて、各利多き炮なり。已に用意調りしかば、是を以て敵の水陣を打たんとぞ圖りける。扱宋江は鴨嘴灘の陣中に在て、軍師吳用と官軍を破らん計を議しけれ共、未だ施こさん計もあらざりし處に、一人の探見來つて報じけるは、東京よりまた新に凌振と云炮の上手至て、三様の砲を設け、親方の陣柵を打破らんと圖る。宜しく是を防ぎ給

へ。吳用が云これ未だ怖るゝに足らず。我山陣の四方は都て水泊港汊甚だ多し。況んや宛子城は、水を離るゝこと、極めて遠ければ、縦ひ飛天火炮を放つとも、奚ぞ能く城邊に至らんや。且つ鴨嘴灘の陣を棄て彼が炮を試み、其後別に計を商議すべしとて、其日宋江、吳用、鴨嘴灘の陣を棄て諸將と共に山陣に上り、則ち晁蓋公孫勝らと聚義廳に會聚して、猶計を商議しける處に、忽ち山下に炮の聲大に響きて、一連に三回放ちぬ。二ツの炮は水中に打ち入れ、一ツの炮は鴨嘴灘の陣を打破りぬと聞えしかば、宋江大に驚き、心中深くこれを憂へ、諸將も同じく色を失なつて驚懼せり。吳學究が云、若し誰にても凌振を誘引して水邊に至らば、計を以てこれを生捕、然して後敵を破るの良計を議すべし。晁蓋が云、李俊、張横、張順、阮小二、阮小五、阮小七等に船を漕がしめて、此の如く行はせば可ならんや。吳用が云く此計最當れりとして、李俊等六人に號令を傳へければ、六人の大將計を請て二手に分る。李俊、張横は先づ四五十人の水軍を引て、二艘の快船に乗、蘆葦深き處を過ぎて、對岸を望んで漕行、其次には張順と三兄弟の阮家、四十餘艘の小船を漕て救應をなす。扱かの李俊張横は已に對岸に至つて涯に上り、直ちに敵の炮を設けたる處に馳せて、一度に咄と喊の聲をあげ、炮架等盡く踏躰しければ、軍卒共慌れて凌振に告げにける。凌振大に怒り、忙はしく鎗槍取て馬に乗り、一千餘人を引て急に追來りしかば、李俊張横兵を引て逃走る。凌振已に蘆葦深き水邊に追至て水面をみるに、四十餘艘の小船一行に相連ね、一艘の船に凡そ四十餘人の水軍あり。

李俊張横はや船の上に跳乗て、故意船を漕開かず、一向猶豫して在りければ、凌振兵に下知して水中に赶入、遂に多くの船を奪ひ取て官軍盡く船に取乗、李俊張横が船を望んで追來る。對岸の上には、山陣の大將朱同雷横、空しく喊の聲を發し金鼓を打鳴す。凌振は三軍と共に船に乗、漸々江心に至りし處に、朱同雷横對岸の上に在て是を見、はや時分は好ぞとて相圖の鑼を打鳴しければ、水底より三百餘の水軍潜り出で、彼官軍等が乗たる船底の屑を抜けるに、水忽ち滾入て諸船悉く水中に沈入る。凌振此光景を見て大に恐れ、急に漕回さんとしけれ共、はや船中水満々と滾入て同じく水底に沈みしかば、玩小二これ待ち請けて終に凌振を水中にて捉へ、對岸の上に拖り上げるに、岸上の兵はやくも是を締めけり。總て水中にて生捕し官兵二百有餘人なり。其外の官軍共は水に溺れ死し畢ぬ。尙幾ばくの官兵有て這々命を脱れ、直ちに本陣に逃歸り、呼延灼に斯と告げければ、是を聞て大に悔、急に兵を引て水邊に打出しか共、敵船は已に對岸に至りしかば、更に益ぞなかりける。晁蓋宋江は凌振を活捉たると聞て大に喜悅し、諸頭領と、もに、第二の關に出て凌振を迎へ、宋江自ら凌振が絆を解て諸人を責て云、我先に汝等に命じけるは、恭しく禮を凌將軍に盡して、山陣に導き參せよと云しに、何故かく無禮をなすや。凌振此言を聞て心中に感じけり。宋江又自ら凌振が手を携て、聚義廳に至りしかば、彭玘も同じくこゝに出て、凌振に對面す。凌振は彭玘が頭領になりたるを見て、只口を閉て詞なし。彭玘再三凌振を諫めて云、晁宋兩頭領は天に替つて道を行ひ専ら豪傑を招ぎ聚め

て専ら只朝廷の御赦免を待給ふ。我輩已に當陣に至る上は、宜しく隨順して共に大義を結び給へ。宋江も又頻りに諫言を加へければ、凌振某山陣に留つて、長兄等に從はんは易けれ共、只恨むらくは眷族都て東京にあり。若し我山陣に隨順せしと、一旦都に洩聞えば、眷族悉く誅戮を蒙るべし。晁蓋が云、將軍心を安んじ給へ。我日を限て貴族を山陣に邀へ取らん。凌振が云、長兄果して此のごとくんば、身を終る迄此恩を忘るまじと感謝す。翌日晁蓋宋江、吳用并に諸頭領皆聚義廳に相聚りて、連環馬軍を破らん計を議しけれ共、更に良計較もなかりし處に、金錢豹子湯隆進み出で云けるは、某不才たりといへ共一計を獻せん。彼連環馬軍を破らんには一ツの軍器あり、某が一人の表兄極めて此軍器を使ふ。若し彼を以て攻めさせなば、立地に破るべし。吳用問て云、賢弟いかなる軍器を用ひんと欲ふや。又其表兄の姓名はいかん。湯隆が云、某は先祖より軍器を打て營とす。此故に能く連環馬軍を破る軍器を知れり。則ち鈎鎌鎗を用ひて破るときは、容易破るべし。某祖父より傳へたる畫圖あるゆゑ、鈎鎌鎗を造らんことは難からざれ共、只これを使ふこと能はず。これをよく使ふ者は某が表兄のみなり。今東京に在て金鎗班の教師をなす。這鈎鎌鎗の法は彼が家にのみ傳へ、先祖より誓つて他人に教へず。此故に許多の教師有りといへ共、鈎鎌鎗の法を傳へたる人曾て一人もなし。是を使ふ則は或は馬上或は步行、都て其法有て神妙奇特なり。もし彼を山陣に得ば必定敵の馬軍を破るべしと、未だ言も終らざるに、林冲進み出で云、金鎗班の教師といふは、徐寧がことにはあらず



や。湯隆が云、乃ち其徐寧なり。林冲大に嘆じて云、誠に我これを忘れたり。彼徐寧が鈞鎌鎗の法は、天下無雙の奇藝なり。我東京に在りし時、毎度彼と參會し互に武藝を較論して、交り極めて睦じかりしなり。唯しらす今いかゞして彼を山陣に邀へんや。湯隆が云、徐寧が家には先祖相傳へたる金の甲あり。是世上に比類なき寶物なるゆゑ、常に皮匣の内に收め、居間の内の梁の上に懸置、朝夕是を打守つて己が生命と稱す。もしこれをだに盗み出さば、彼必ず萬千里の路をも來るべし。吳用是を聞いて、已にかくのごとくば何の難きことかあらん。幸ひ山陣に盗の高手あり。今次は此賢弟を用ひんとて、鼓上蠅時遷を呼で命じければ、時遷領承して云、果して此物あらば、某終に盗み取て來るべし。湯隆が云、汝もし彼甲を取て來りなば、我又彼を賺して山陣に上らしめん。晁蓋宋江同じく問うて云、汝何らの計を以て彼を賺し來らんや。湯隆近く進み寄てかくのごとしと低言しかば、晁宋これを聞いて大に喜悅なしける。此時吳用が云けるは、三人の頭領を同じく東京に馳せ、一人には火薬を買はしめ、二人には凌將軍の家族を取らしむべし。凌振是を聞いて悦びける處に、彭玘座上に進み出で、宋江に告げて云けるは、若し又一人潁州に遣はし、某が家族をも取らしめ給はば、深く山陣の之恩を感すべし。宋江が云、賢弟心を安んじ給へ、我れ是を邀へ來し悦こばしめ申さん。兩賢弟速かに書簡を修のへ給へ。兩人の者これ聞いて、頓て書簡を修のへければ、宋江先づ楊林に彭玘が書簡を持たしめ潁州に遣はし、薛永を藥賣に打扮へ東京の凌振が家に遣はし、李雲を商人に打扮て同じく東京に馳せて火

薬を買はしめ、又樂和と湯隆とを共に東京に馳せて薛永を助けしむ。既にして各支度調はりしかば、時遷は先發て山を下りけり。

吳用時遷をして甲を盗しむ

楊林、薛永、李雲、樂和、湯隆等五人の頭領は、遂に各山陣を離れて急ぎけり。翌日又戴宗を下して、道中に往來させ、専ら吉凶のことを探聽しめけり。扱又時遷は夜を日に繼で急ぎしかば、日あらず東京に至つて旅館に歇み、翌日早々城中に入つて、金鎗班の教師、徐寧が家を尋ねて前後の門を伺ひみるに、後門の邊には一帯の高牆有つて、兩間の樓屋あり。時遷良久しく脚路を相定め、傍の家に入て問ひけるは、徐教師は家に在るべきや。主答て云、定めて朝廷に在て未だ回らるまじ。時遷又問て云、知らず何れの時回らるべきや。主が云、黄昏に歸るべし。時遷是を聞いて且旅館に回り、暗に時を窺つて、再び徐寧が家の左右に至て、徘徊しける處に、はや晩て此夜はしかも月光もなかりしかば、時遷高牆外の栢の樹に上つて、内の動靜を窺ひみるに、徐寧も已に歸れりと覺えて、前後の門はや關しぬ。時遷又樹の枝より高牆の上に移りて、後門の内に跳下、直に厨の邊に忍び入て、遂に樓上を望み見るに、徐寧妻に語つて云けるは、明日は帝龍符宮に行幸あるゆゑに、我輩は五更の時分に、朝廷に伺候する間、下男下女は四更の時分に起して、用意をさせよとて、遂に床の上に打臥ければ、時遷是を聞いて心中に想ひけるは、我宜し五更の前後に手を下して、甲を盗み取らんとて、身を

縮めて藏居ぬ。扱彼下男女等は各々房間に入て歇みけり。漸四更の時に至りしかば、徐寧先づ起て下女を起し、用意已に調りし處に、徐寧は一人の僕を従へ、後門より出ければ、下女は燈を提て、門邊まで送りける。其跡に時遷急に樓上に登り、直に梁の上に伏して、暫く伺がひけるに、下女又燈を吹滅て歇みければ、時遷頓て梁の上に懸たる甲匣を解取て下りんとせし處に、妻此響を聞て下女を呼びて云けるは、梁の上に響あるは何ぞや。時遷此時鼠の聲を假て叫びければ、下女これ聞て同じく呼びりて云けるは、夫人は何ぞ叫ぶ聲を聞給はずや、梁の上なるは鼠なり。此時妻心を安んじて已に睡りしかば、時遷竟に甲匣を盗み取て梁を下り、再び後門の邊に至て暗に探聽けるに、内外静にして人音さらにあらざりしかば、時遷後門を推し開いて走り出で、城外の東路を過りて馳せけるに、天色猶五更の前後にて人音さらに静かなり。已に四五十里馳せければ東方漸曉なんとす。かゝる處に前面より一人の漢子來る。是則ち神行太保戴宗なり。時遷これを見て大に悦び、共に傍に立倚て甲を盗み取つたることを語りしに、戴宗是を聞て云けるは、我其甲を奪て先に歸らん。汝は湯隆と共に跡より歸るべし。時遷此言に同じ、則ち甲を取出し戴宗に與へしかば、戴宗これを取て時遷に別れ、遂に梁山泊へ歸りけり。時遷は只空匣を荷うて、又東の路三十里ばかり行きし處に、果して湯隆に行きあひ、同じく人なき處に至て、盜の次第を具しく告げければ、湯隆が云、汝今宵は此邊に旅宿を求めて一宿し、則ち此甲匣を故意主等が見る所に差置べし。明日は又二三里ばかり馳出て我が來るを

待ち候へ。時遷是を聞て其議に同じ、則ち這邊に旅宿をぞ求めけり。湯隆は城門の邊に宿を借りて、翌日早々城中に馳行ぬ。扱徐寧が家には盗人忍び入て、金の甲を偷去れりと騒動し、急に人を禁裏に馳せて徐寧に告げんとしけれ共、御門を入ること能はず。空しく黄昏まで待けるに、徐寧已に歸りしかば、妻甲を盗まれたる次第委しく語りける所に、徐寧未だ聞もあへずして大に駭き、我此の甲は先祖相傳の寶物なり。我常に是を失はんことを恐れ、乃ち梁の上に懸置いて他人に見せざりしに、しらす何等の賊來てこれを偷みけるやとて、其夜は曾て眼をも合はせず憂へけり。翌日妻徐寧に告げて云けるは、此賊必定能甲のことを知りたる者ならん。宜しく人を僱うて尋ねしめ給へ。若し自ら騒動して人に知らるゝことあらば、却て不可ならんとて、夫婦ひそかに商議して居ける處に、湯隆來て徐寧を訪ふと報じければ、徐寧自らこれを迎へて、客廳に至りけるに、湯隆先づ云けるは、某先父死去の後は、久しく他郷に流落て、這回も山東より來れり。徐公いよく恙なきや。徐寧が云、我久しく消息をも通せざりしに、足下來て我を訪らひ給ふこと、誠にこれを感悦す。先づ路次の勞を休め給へとて懇に饗應ぬ。湯隆故意徐寧に問うて云ひけるは、徐公何故顔色に憂ありや。徐寧が云、我心の憂最も大なり。昨夜賊來て家傳の寶物を竊み取りぬ。湯隆が云、何等の寶物なるや。徐寧が云、先祖代々相傳したる金の甲を竊まれぬ。此故に我大にこれを憂ふ。湯隆が云、其甲は昔日某もこれを拜見せり。誠に天下に比類なき寶物なりしに、何れの處に置いて偷まれ給ひしや。徐寧が云、我常に

失なはんことを恐れしゆゑ、皮匣の内に入れて梁の上に懸置しに、何等の賊なるにや、能く是を知て  
 偷取りぬ。湯隆が云、其皮匣は何皮を以て造らせ給ふや。徐寧が云、紅羊皮を以て造れり。湯隆許  
 て大に驚いて云、我今朝城外の村に至つて暫らく憩らひ居ける處に、一人の漢子皮匣を荷ひ來るを  
 見て心中に恠しみ、則ち其者に問て此皮匣は何の用になすやと云ければ、彼答へてこれは原甲を入  
 しかども、今は只衣服を盛候と語りぬ。恐らくは此皮匣にもあらんか。我輩急に追蒐ばまだ十分後  
 れまじ。徐寧大に悦んでいはく、それは必らず我皮匣なるべし。若し追着かば莫大の福、尤も足下  
 賜なりとて、遂に湯隆と共に城外に馳出、彼村中に至り先づ一軒の客店に立寄、湯隆主に問ひける  
 は、紅羊皮の匣を擔ひたる漢子を見給はずや。主答へて、昨夜一人の男紅羊皮の匣を擔ひて此村に來り  
 ぬ。定めて此邊に旅宿を留めて休みつらん。湯隆これを聞て、徐寧に對して云けるは、徐公聞給へ、  
 果して這人ありしを。徐寧然る上は急に尋ねんとて、方々の客屋を尋ねし處に、一軒の客屋にて云け  
 るは、其紅羊皮の匣荷ひたる旅人は、昨夜我店に歇み今朝こゝを打立ちぬ。若し用事あらば跡を慕ひ  
 て尋ね給へ。未だ遠くは行くまじ。湯隆これを聞て徐寧に催促し、ひたすら息をも繼ぎ追蒐しかば、  
 漸黄昏に至つて前面を望み見るに、時遷古廟の前の木蔭に、匣を卸して憩らひ在りければ、湯隆  
 徐寧に告げていはく、古廟の前に歇み居る漢子則ち彼賊なり。徐寧これを見るに、果して皮匣ありけ  
 れば、恰も飛ぶがごとく跑着、終に時遷を揪へ、汝漢賊いかなぞ大膽に我甲を偷みぬるや。時遷が云

汝叫ぶことなかれ、我此甲を偷みしかども今匣の内にはなし。汝らこれを見給へとて匣を披いてこれ  
 を見るに、甲ははやあらざりしかば、徐寧大に怒つて云、汝死賊甲はいづれの處に遣はしぬるや。  
 時遷が云、某は張一と申者にして、泰安州の民なるが、一人の商人我を頼んで云けるは、老种經略  
 相公、徐寧が家に所持したる金の甲を求めたく思ひ候へども、徐寧肯て賣らず。汝もし是を盗み取て  
 來らば、一萬貫を興ふべしと云し故、某又李三といふ者を語らうて、兩人同じく公の家に忍び入り  
 て、終に此甲を偷みしかども、某其夜梁より落ちて脚を傷なひ、道を行くこと叶はざるに依て、  
 先づ甲を李三に持たせて商客が宿に遣はし、唯空匣計りを留めぬ。若し我を捉へて官府に訴たへ給は  
 ば、我死すとも還すまじ。若し又我を免して官府に訴へ給はずんば、我公共に行きて再び甲を還  
 し奉らん。徐寧これを聞て只顧躊躇決せざりし處に、湯隆が云、徐公何ぞ躊躇し給ふや。我ら兩人彼  
 を監押して馳行、宜しく甲を取復すべし。若し甲なくんば、其處の官府に訴へて決斷を乞はんに、何の  
 不可なることかあらん。徐寧其事に同じ、則ち時遷を監押して、共に東を望んで馳行、其夜は旅宿  
 を求めて三人同じく歇みけり。徐寧初めは時遷を緊しく守りしか共、時遷は詐て脚を傷なひたる體に  
 もてなし、路を行くこと果敢取らざりしかば、徐寧漸心を安んじ頗ぶる怠りぬ。

湯隆徐寧を賺し山に上らしむ

斯て道を往くこと三日に至りしに、傍の小徑より二三疋の驢馬一輛の虚車を拽來る。後に一人の旅客

あり。漸つう近ちかくなりしに、彼かの旅客たきやく湯隆たうりゆうを見て、忽たちち地ちに跪ひざまづきて禮れいをなす。湯隆たうりゆうこれに問とうて云いはく、足下そくげんは何故なにゆゑ此處このところに至いたれりや。彼かの旅客たきやくが云いはく、鄭州ていしゅうにて商賈しやうがを完了しじゆし、今いままさに泰安州たいあんしゅうに歸かへらんとす。湯隆たうりゆう又またみれば、車くるまを使つかふ者もの傍かたはらに控ひかへあり。湯隆たうりゆう商客しやうかくに對たいし、我輩わがら三人さんにんも同じおなく泰安州たいあんしゅうへ赴おもむく。汝なんぢの車くるまに駕がして俱ともに行いかんこと可かならんや。旅客たきやくが云いはく、三人さんにんはおろか十人じゆんたり共駕ともが給たまへ聊いささも妨さまたげなし。湯隆たうりゆう大たいに悦よろこび、彼かの旅客たきやくを徐寧じゆねいに見まえしむ。こゝに於おいて徐寧じゆねい問とうて云いはく、此人このひとは誰たれなるぞや。湯隆たうりゆうが云いはく、我去年わがこぞ秦州しんしゅうを過すりし時とき、幸さいひ此人このひとと契ちぎりを結むすびぬ。則すなはち姓せいは李り、名なは榮えいと云いふなり。徐寧じゆねいが云いはく、已すでにかくあらば、此張このちやうしやう一いつをも車くるまに乗のすべしと、四人にんおん同じおなく車くるまに駕がし、はや二三里にさんりばかりも行いきし處ところに、徐寧じゆねい再三さんじ時とき遷せんに問とうて、汝張なんぢちやうしやう一いつ嚮きやうに云いひし商人あきびとが姓名せいめいは何なにと云いひしぞ。時遷じせんが云いはく、郭大人くわくたいじんと云いて名なのしれたる者ものなり。徐寧じゆねい又また李榮りえいに問とうて云いはく、泰安州たいあんしゅうに郭大人くわくたいじんと云いふ人ひとありや。李榮りえい答こたへて云いはく、是こゝは泰安州たいあんしゅう第一だいいちの大おほ商人あきびとにて、これを知らざる者ものなし。彼人かのひと常に官人くわんじん軍官ぐんくわん等らと交まじはりを結むすび給たまひ、勢いきほひある大家たいかなり。徐寧じゆねい是こゝを聞きて心中しんちゆうに想おもひけるは、賊ぞくの棟梁とうりやう已すでに明あきかなるうへは、甲よろひを取復とりさんこと易やすかるべしと、暗ひそかに悦よろこんで一向急ひたすらぎける程ほどに、日ひあらず梁山泊りやうざんぱくの近邊きんぺんに至いたりし處ところに、李榮りえい車使くるまつかひに命いのちじ酒さけを沽かしめければ、車使くるまつかひ頓いっせうて一瓢いつぱうの酒さけと些せしの肉にくとを求もとめ來きたる。李榮りえい先まづ此酒このさけを徐寧じゆねいに送おくりけるに、徐寧じゆねいこれを取とつ遂つひに飲乾のみほぬ。李榮りえい又また車使くるまつかひに命いのちじ、再び一瓢いつぱうの酒さけを沽かしめんとせし處ところに、徐寧じゆねい忽たちち口中こうちゆうに涎よだを流ながし、車くるまの上うへに倒たふれけり。扱さて此李榮このりえいと云いふ者は鐵叫子てつしやうし樂和がくわなり。此時このとき樂和がくわ、湯隆たうりゆう、時遷じせん、三人さんにんの頭領とうりゆう已すでに車

を下くだり、徐寧じゆねいを早地かんち忽たちち律朱貴りつしゆきが店みせに携たづへしかば、朱貴しゆき遂つひに山陣さんじんに送おくる。晁宋兩人てうそうりやうにんこれを聞きいて、諸頭しよとう領りやうとともに、關前くわんぜんに出いでて徐寧じゆねいを迎むかへけるに、徐寧じゆねい漸やうく蒙汗藥もうあせりやくの毒氣どくき醒さて眼まなこを開ひらき、想おもはず諸豪傑しよがうけつを見みて大おほに駭おどき、則すなはち湯隆たうりゆうに問とうて云いはく、汝なんぢは何ゆゑ我われを賺すかして此處このところに携たづへ來きたるや。湯隆たうりゆうが云いはく、徐公じゆこう宜よろしく我が云いふことを聞き給たまへ。我われ此こゝたび晁宋兩公てうそうりやうこう、豪傑ごうけつを招まねき給たまふことを聞き及およびし處ところに、幸さいひ武崗鎮ぶかうちんにて黑旋こくせん風ふう李達りだつに逢あひ、竟つひに引ひかれて當山陣たうさんじんに加くはりぬ。今呼延灼いまこへんせつに連環馬軍れんわんばぐんを用もちひられて、親方みかた大おほに利りを失うひ、再び敵たてを破やぶらん計はかりなし。これによつて我われ鈎鎌鎗こうけんさうの法はふを獻けんじけれ共ども、これを使つかふ者は只徐公ただじゆこうのみなり、故ゆゑに此度このたび計はかりを用もちひ、時遷じせんに公こうの寶物ほうぶつたる甲よろひを盜ぬすましめ、漫みだりに徐公じゆこうを賺すかして山陣さんじんに誘い引いんせり。伏ふして願ねがはくは我罪わがつみを免ゆるして、一臂いつびの力ちからを施ほし給たまへ、然しからば山陣さんじんの諸豪傑しよがうけつ皆みな此恩このおんを感激かんげきあるべし。徐寧じゆねいこれを聞きて、只惘然ただぼうぜんと呆あれける處ところに、宋江そうかう近ちかく進すすんで告つげけるは、某それ晁天王てうてんわうと共に暫しばらく當陣たうじんに居住きやうじゆし、専せんら朝廷てうていの御赦免ごしやめんを待たち奉たてまつる。我われが輩ら都つて忠ちゆうを盡つくし、國くにに報むかはんことを欲ほつす。毛頭もうとうも財さいを貪むさり殺ころすを好このみ、不仁ふじん不義ふぎのことを行おこなふにあらす。望のぞむらくは徐公じゆこう明あきらかに是こゝを察さつし給たまひて、同おなじく天てんに替かつて道みちを行おこなひ給たまへ。林冲りんしゆうは原もと來き舊友きゆうゆうなりしかば、怒いかに諫いさめて云いはく、某それ已すでに高太尉かうたいに世よを逼せまめられ、今此處いまこのところに在あつて禍わざはひを脱だかる。徐公じゆこう敢あへて山陣さんじんに留とまり給たまはば、我われ深ふかく舊友きゆうゆうの情なさけを感かんずべし。徐寧じゆねいが云いはく、某それ今悔いまこゝろるにはあらねども、只恨ただうらむらくは妻子さいしら都つて官府くわんふの擒とりとなるべし。晁宋齊てうそうししく云いひけるは、徐公じゆこう必ずかならずこれを憂うれへ給たまふこと勿なかれ。近々ちかく貴族きやくを山陣さんじんに邀かへ取とつて、一處しよに在あらしめ進すすらすべし、先まづ宜よろしく休やすみ給たまへ給たまふこと勿なかれ。近々ちかく貴族きやくを山陣さんじんに邀かへ取とつて、一處しよに在あらしめ進すすらすべし、先まづ宜よろしく休やすみ給たまへ給たまふこと勿なかれ。

へとて、種々珍物を重ねて饗應を盡し、又戴宗湯隆を東京に馳せて、徐寧が妻子一家を取り來らしめ、已に十日を経ける處に、楊林は潁州より彭玘が妻子を取て回り、薛永は東京より凌振が妻子を取つて回り、李雲も同じく東京より五車の火薬を買取回り、又數日過ぐれば、戴宗湯隆も徐寧が妻子を取て回りければ、徐寧夫婦對面して、半は悦び半は驚きけり。徐寧又湯隆に對して云けるは、妻子已に山陣に至る上は我が心全く安んせり。只惜むらくは、我が甲は何れの處に失ひぬるや。湯隆笑つて云、甲のことはさて置き、家内の財寶皆收拾めて山陣に至りぬれば、心を安んじ給へとて、甲を皮匣に收め、并に家財等一品も紛失なく取揃へ徐寧に還しければ、是を見て徐寧は再び東京に歸る念を斷けり。且彭玘凌振も各一族を身邊に在らしめ、各心を安じ、皆梁山泊に止まりぬ。然れば宋江陽隆に命じ、多く鈎鎌鎗を造り出さしめ、晁、宋、吳用、公孫勝、其外諸頭領聚義廳に集會し、則ち徐寧を請て鈎鎌鎗を諸軍に教へしめける。此鎗の利あること、次卷を見れば分明に知るべし。

旅客は樂和なりと有りて、車使は誰なりしを記さず。且つ又た時遷姓名を隠し、我姓は張にて、排行第一なりと百回本にあれば、張一と云べし。通俗忠義水滸傳には、張二と書く是見誤りなり。

五編卷之八

徐寧教て鈎鎌鎗を使しむ

扱此徐寧と云人は、身の材六尺有餘にして、面の色白く腮の髯長く、威風凜凜然としてあつばれ一人の大將なり。時に一筋の鈎鎌鎗を取て、自ら一場是を使ひしかば、諸の英雄一度に咄と喝采て、暫らく鳴も休ざりけり。徐寧諸軍に教へて云けるは、凡そ此のごとき軍器を使ふ時は、其變法を肝要とす。總て九變あり。初め八歩四撥と云ふ法を遣ひ出して十二歩に變ず。是又十六歩に變じ、是より裏の法を名づけて大轉とす。鈎を東西南北に向て能く變化利用をなし、其硬きを奪ひ強きを鈎る。我委しくこれを使うてみすべし。諸人心を留て精しく此法を記ゆべしとて、再び鈎鎌鎗を繰り出で、秘密たる裏の手を、半時ばかり使うて見せければ、諸豪傑各これを見て神妙の高藝かなと、感歎止まざりけり。此人東京にあつて教師たれば、諸人金鎗手と綽名せり。今日此奇藝を見て、諸頭領大に興を得、是を始めとして、大勢晝夜怠たらず學びし所に、半月の内に先づ千人餘りの兵共これを熟しければ、其餘は熟するに及ばずとて、宋江諸頭領と共に敵を破る手段を催しけり。扱官軍の大將呼延灼は、彭玘凌振を捉はれてより以來は、毎日本邊に寄て戦ひを挑みしか共、水軍の大將等牢く水

邊の陣を守つて兵を屯しければ、呼延灼は西山北山の兩路に在て、暗に道を尋ねしめられ共、攻上るべき便機の路もあらずして、日を空しく打過せり。梁山泊には凌振に命じ品々の炮を造らしめ、諸事全く調はりしかば、宋江諸將に對して、我不才たりといへども頗ぶる所存あり。しらす諸將の心に合ふべきや。吳用が云、願くは高議を承はらん。宋江はいはく、明日は一騎も馬軍を用ひず、諸將も都て歩戦をなし、歩軍を引率し、即ち備を十手に分て山を下り、擅に敵を誘いて水邊に至らせ、彼若し急に馬軍を進めておひ來らば、悉く蘆葦の内に逃げ入るべし。蘆葦の内には豫じめ、鈎鎌鎗の兵を伏置き、敵の馬軍已に追至らば、鈎鎌鎗の伏兵一度に並び起らしめ、夾んで攻めさすべし。然らば敵を活捉こと多からん。吳用が云、此計究めて神妙なり。徐寧が云、鈎鎌鎗の兵はかくのごとく用ふるるときは其利彌多し。速に用意を調へ給へと催しければ、宋江此日歩軍を十隊に分て諸將に與ふ。則ち劉唐杜遷一隊を領し、穆弘穆春一隊を領し、楊雄陶宗旺一隊を領し、朱同鄧飛一隊を領し、解珍解寶一隊を領し、鄒淵鄒潤一隊を領し、王英一丈青一隊を領し、薛永馬麟一隊を領し、燕順鄭天壽一隊を領し、楊林李雲一隊を領す。此十隊の歩軍二十頭領に從て、先づ山を下つて敵を誘引しむ。又李俊、張橫、張順、三阮、二童、孟康等九人、水軍の大將は兵船に取り乘て救應をなす。花榮、秦明、李應、柴進、孫立、歐鵬等六將は各馬に乗て兵を引き、只山邊に在つて戦を挑む。凌振杜興は専ら相圖の炮を放つ。徐寧湯隆兩人は共に鈎鎌鎗の兵を掌る。中軍には、宋江、吳用、公孫勝、戴宗、呂

方、郭盛等、大軍を領し號令を下す。其餘の諸將は各陣柵を守る。宋江已に手分を定めしかば、此夜三更の時分に、先づ鈎鎌鎗の兵を下して、四方に埋伏せしめ、四更の前後十隊の歩軍山を下る。凌振杜興は高き處に炮架を設け、種々の炮を架置。徐寧湯隆は各軍器を拿て水を渡る。五更過に至て、宋江が中軍の人馬山を下り、則ち水を隔て、鼓を搥、喊の聲を揚げて戦を挑む。呼延灼は此聲を聞いて大に怒り、先鋒韓滔を馳せて、敵の動靜を探聞しめ、其次に呼延灼御賜の踢雪烏騾の名馬に打乗、鐵棒を輪し、彼連環馬軍を引て陣勢を相對す。先鋒韓滔已に回つて、呼延灼と商議して云けるは、正南の方に一隊の歩軍あり。只其何れより來りぬることをしらす。呼延灼が云、縦ひいかやうの處より來りし軍兵たり共、唯宜しく連環馬軍を進めて突破り候へ。韓滔其言に服し、則ち五百の馬軍を引て馳出しけるに、又東南の方に一隊の歩軍出來る。呼延灼是を見て、兵を分け遣はさんとせし處に、又西南の方に一隊の軍兵進み出て、旗を翻し鼓を搥つて戦を搦む。韓滔是を見て、再び兵を引て馳せ回り、則ち呼延灼に對して云けるは、南の方に三隊の賊兵進みけるが、都て梁山泊の旗號なり。呼延灼が云、彼久しく出戦はずして、今日かく戦を搦むは、必ず計有るべしと未だ云も終らざるに、北邊に炮の聲大に響く。呼延灼これを見て、忽ち罵しつて云、此炮必定從賊凌振が放つ處ならん。先づ南の方の敵を追拂はんと議しけるに、北邊に又三隊の歩軍現はれ出でしかば、呼延灼が云、是必然賊等が奸計なり。兵を兩路に分て撃べき間、韓先鋒は南の軍兵を攻給へ。我は北の軍兵を突べしとて、已に

兵を分んとせし處に、西の方に又四隊の人馬出でければ、呼延灼是を見てや、驚きけるに、正北の方に又大小の炮頻りに放て、天地を響かせしかば、官軍共戦かはすして自ら亂れけり。

宗江大に連環馬を破る

呼延灼此光景を見て甚だ焦燥、韓滔と共に兵を四面に分て嚴しく突出けるに、彼十隊の歩軍は東に趕ば東に逃、西に追ば西に逃、一向奔走して、敢て回し戦ふことなれば、呼延灼大に怒り、三軍に下知して、正北の方に突き入らんとしけるに、宋江が兵共都て蘆葦の内に逃げ入り、呼延灼是を見て大に連環馬を進め、地に捲て追來る。彼連環馬一度に馳出しかば、恰も山の崩るゝ勢にて、止めんとすれども止まらず、盡く蘆葦の内に跑入し處に、鈎鎌鎗の兵左右より並び起て、一度に軍器を擧、先づ兩邊の馬足に鈎て引倒しければ、中に在る馬軍共も同じく自ら倒れ、盡く敵の手に生捉れたり。呼延灼は鈎鎌鎗の計に中りたるを見て、大に慌て急に馬を引回して、南の方へ逃げ行く處に、背後に炮の聲大に發り、山に漫こり野に遍ねく、都て歩軍ども追來る。呼延灼、韓滔、馬軍多く捉はれ易からず思ひ、一向四面に繞つて敗軍を納め、直ちに西北を望んで五六里計り馳せけるに、此邊に又一隊の人馬突出で、當先に穆弘穆春兩人の豪傑路を攔當、同じく刀を舞し大に呼つて云、汝敗軍いかんぞ馬を下て降參せざるや。呼延灼大に怒り、鐵棒を舞し直ちに穆弘に打てかゝる。弘穆纒かに二合戦て遂に逃走る。呼延灼計あらんことを恐れ、敢て追戦はず、正北の大路を望んで、山坡の下に

至りける處に、又一彪の兵斬て出づる。當先に兩人の豪傑路を攔當る。一人は解珍、又一人は解寶なり。各鎗を拵つて、直に呼延灼を望んで擡かゝる。呼延灼鐵棒を擧て兩人を迎へ、戦いまた十合に至らざるに、兩人同じく身を回して逃去る。呼延灼半里計り趕行ける處に、左右より二十四人の鈎鎌鎗の兵突出る。呼延灼敢て戦を好まず、馬を東北の方に進めて走り行く。此邊に又王矮虎一丈青兵を引て、呼延灼を追趕しかども、終に追著ずして山陣に馳回りけり。呼延灼は大に打破られ、東北の方に馳せ走りけり。扱宋江は金を鳴し兵を收め、先づ山陣に上つて三軍を賞せり。此度三千の馬軍、過半鈎鎌鎗を用ひて鈎倒し、軍士等は盡く活捉て山陣に引かせり。五千の歩軍等も三面より圍まれ、急に躲れんとしたる士卒どもは、都て又鈎鎌鎗に鈎住られ、終に擒になりけり。其外水邊に逃來りし軍兵共は、一々水軍の隊より生捉りける。初めの戦に呼延灼に打崩されたる小陣、ならびに酒肆等再び嚴に建て、又右の頭領共を遣はし守らせけり。劉唐杜遷は韓滔を活捕て山陣に引かせければ、宋江自ら絆を解て座上に請ひ、殷勤に禮を以て、親方に隨順のことを諫めけるに、彭玘凌振も再三諫言を加へしかば、韓滔深く宋江等が義を感じ、遂に心を傾けて頭領となりけり。宋江又人を陳州に馳せ、韓滔が妻子を山陣に邀へ取りて、一處に在らしめぬ。諸頭領は此一戦に連環馬軍を破り、若干の軍馬を得て衆皆大に悦び、毎日酒宴を設け、諸將の功を賀しける。呼延灼は若干の官軍人馬を失なひしかば、敢て京に回らず、只一騎半途に走り出でにける。され共盤纏の貯あらずして、盔甲鞍等

に鑊たる金を取てこれを盤費とし、暗に心中に想ひけるは、今日戦ひに打負て身に罪を干り、家あれ共奔りがたく、國あれ共投りがたし。今更何れの所に落行かば可ならんやと、暫らく沈吟して在りけるが忽ち想ひ出し、青州の慕容知府は、昔日已に相見し我がことを知れり。只宜しく彼を頼んで難を避け、慕容貴妃の一言を借りて、帝の御憤りを慰め奉り、再び軍馬を引て梁山泊を攻破り、遂に此仇を報ひ、恥辱を雪がんとて、此より直に青州を望んで落行き、第三日の午の下一刻に至て殊更疲れしかば、今日は先づ早く歇まんと、頓て旅宿を求め則ち下廐を呼んで云ひけるは、我は是朝廷の軍官にして、這回梁山泊を攻めければ、不幸にして利を失ひ、今又青州の慕容知府が方へ赴むかんとす。汝須からく我が爲に馬に喂養ふべし。彼馬は是れ天子より拜領せし良馬にして、名を踏雪烏驪馬と云。必ず等閑にみることなかれ。明日再び兵を起すことあらば、我重く汝を賞すべし。小廐が云、此處の近邊に桃花山あり。山の上には強盜住す。總て兩人の頭領あり。第一人は打虎將李忠、第二人は小霸王周通と申す。山中に六七百の小賊を集め、専ら往來の人を惱し貨を奪ひ取る。相公今宵自ら用心を堅固にし給へ。呼延灼が云、我は是萬夫不當の勇あり。彼縦令幾千騎來る共、我彼馬に乗て働かば、何の恐ることあらん。汝只よく馬に喂養うて得さすべしとて、良久しく酒食を用ひ、其夜はこゝに歇みけり。直に三更の前後に至つて、屋の後に叫ぶ聲ありしかば、呼延灼急に起きてこれをみるに、彼小廐此處に在つて只願叫ぶ。呼延灼問うて云、汝何ゆゑに再三かく叫ぶや。小廐答へて

云、某今離の響くを聞いて恠しく思ひ、暗かに起てこれをみるに、果して賊籬を推倒して進み入り、相公の馬を偷み取りぬ。相公前面を見給へ、尙遙かに火把の光あり。呼延灼が云、彼我が馬を偷んで何れの處に去るや。小廐が云、彼邊の路を行くは、必然桃花山の賊ならん。只桃花山に引回しならん。呼延灼これを聞て大に驚ろき、急に鐵棒搶取て小廐と共に二三里計り追蒐けるに、火把の光忽ち見えすして其行方を知らず。呼延灼が云、帝より賜つたる馬を無くして、これをいかせんや。小廐が云、明日青州府に訴たへ給ひて多く官軍を催し、共に馳せて賊等を捉へ給はば、彼馬再び得給ふべし。呼延灼心中甚だ愁へ、曉るを待ちけるにはや五更過に至りしかば、衣甲を小廐に擔はせて、直ちに青州府に赴むきけり。已に城中に入りければ、天色早晩て此日は官府に出づること能はず、先づ旅宿を借りて其夜を過し、翌日早々官府に至つて、慕容知府にまみえしかば、知府大に驚いて云、將軍は此度梁山泊の賊を征伐あるとこそ聞ぬるに、何ゆゑ此處に至り給ひしぞ。呼延灼戰の次第を一詳に訴ふ。知府是を聞て云けるは、將軍已に若干の人馬を失ひ給ひて、殘悔千萬なれ共、是又功を慢るの罪にあらず、賊等が奸計に申りしは、いかん共することなし。將軍先づ心を安んじ給へとて懇に慰さめけり。呼延灼又馬を偷まれたることを告げけるに、知府が云、我が支配の地面に盜賊極めて多し。先づ桃花山の賊を撃平らげて將軍の馬を取復へし、次は又二龍山、白虎山の強賊等をも掃ひ清めんに、將軍宜しく力を盡し給へ。這等の強賊をだに打平らげば、我れ必ず將軍の爲に帝へ奏聞し、



再び人馬を將軍に與へて、梁山泊を撃しめ申さん。呼延灼是を聞て深く感謝す。知府頼て呼延灼を饗應し、即ち客廳に歇ませけり。呼延灼ははや三日を過しけるに、彌早く馬を取回さんことを欲し、即日知府に告げて速に軍馬を催し給へと願ひしかば、知府竟に三千の軍馬を以て呼延灼に借與ふ。呼延灼人馬を得て大に恩を謝し、翌日早々兵を引て打出で、直に桃花山へと寄來る。扱又桃花山には兩人の頭領打虎將李忠、小霸王周通、此度は想はず踏雪烏騾馬を得て大に悦び、毎日山陣に在て酒宴を催しける處に、青州より軍馬寄せ來ると聞きしかば、小霸王周通が云、李公は牢く山陣を守り給へ。某官軍を退ぞげんとて、一百有餘の兵を引て山を下りけり。呼延灼は已に人馬を引て、山前に至り當先に進みて、大に呼はり罵しつて云けるは、汝奸賊何ぞ馬を下りて絆を請ざるや。周通これを聞て、鎗を振り馬を飛ばせて、陣前に跑出しかば、呼延灼鐵棒を舞はして、周通に打つて蒐る。周通これを迎へて鋒さきを交へ、戰纒か六七合に至つて、周通はや敵すること能はず、急に回して山陣に跑上る。呼延灼半里許りも追けるが、伏兵もやあらんと恐れ、再び本陣に回り兵を屯す。周通は山陣に逃上つて、呼延灼が武勇を李忠に告げて云けるは、我彼に敵すること能はず、慌忙しく逃回りぬ。彼もし山陣に追上らば、何を以てこれを防がんや。李忠が云、我聞く二龍山寶珠寺には、花和尚魯智深在て山陣を守り、又青面獸楊志とやらんいふ豪傑一處にあり。頃日また新に行者武松と云者加はり、各々萬夫不當の勇有て、千軍萬馬の内に突入こと、恰も人なき所を行くごとしと聞く。我今一封の書簡を送

つて救を求むべし。若し此度危急を脱かれなば、彼が幕下に屬し、毎月進貢を送るべし。周通が云、某も曾て彼陣には、豪傑あることを聞及べり。只恐らくは彼和尚昔日のことを恨みて、來り救ふこと有るまじ。李忠打笑つて云、昔日彼汝を打つのみならず、我財寶を奪ひ取て逃けるに、何ぞ却て我等を恨みんや。殊更彼は直性の英雄なり。若し我書簡を以て援兵を乞はば、彼必定自ら兵を引て救ふべし。汝これを疑がふことなかれとて、遂に一封の書簡を修のへ、物馴たる聰明の小賊兩人を後山より下して、二龍山に遣はしけり。兩人の小賊書簡を携へて急ぎしかば、第二日の午の時刻に二龍山寶珠寺に至りぬ。此の山の頭領は大小都て七人あり。三人の大頭領第一は花和尚魯智深、第二は青面獸楊志、第三は行者二郎武松なり。又四人の小頭領は、先づ一人は金眼彪施恩なり。此人はもと猛州牢の施管營が息なりしが、昔武松張都監が一家の男女を殺せし時、官府より施恩が家に事を干からしめ、急に武松を捉へ出すべしと再三責ける故、一家盡く連夜に猛州を走り出で、久しく異郷に落魄在りし内、兩親已に相果けるにより、施恩は再び武松を問うて、此山に上り遂に止まりて頭領となりぬ。又一人は操刀鬼曹正なり。此人は初め魯智深楊志と共に、此寶珠寺を奪ひて登龍を殺し、其後久しからずして、山陣に來り加はりぬ。又一人は菜園子張青、又一人は張青が妻母夜叉孫二娘なり。此夫婦兩人は原孟州道十字坡と云處に住し、専ら往來の旅人を害し、貨を劫ひけるが、其後家を捨て同じく山陣に上りぬ。此時諸頭領總て七人、寶珠寺の殿中に會集し在りける處に、桃花山より書簡を奉るよし

告しかば、魯智深語て云、我れ當初五臺山を初めて下りし時、桃花村に一宿し、彼周通を痛く打、已に戦に及ばんとしける處に、彼打虎將李忠は原來我を識認、早速戦を休て我を山陣に請ひ、再三留めて山陣の主を我に譲らんとせしか共、我熟々彼ら兩人をみるに、専ら寶を慳み物を吝んで、其志爽ならざりし故、我遂に彼等が財寶を奪ひ取て山を下りぬ。然るに今日援兵を求むるは、定めて蹠蹠有るべし。先づ使を呼んで遇はんとて、頓て使を殿の下に呼びしかば、使者恭しく再拜して云けるは、青州の慕容知府、頃日一人の大將を得たり。此將は前日梁山泊を攻めて敗北したる、呼延灼と云英雄なり。知府今此將を以て、先づ桃花山二龍山白虎山を掃ひ清めて、其後又梁山泊を攻めんと圖り、數千の人馬を呼延灼に借して、某が山陣を攻めさしむ。滅亡旦夕にあり。此故に三大王の救を乞ひ奉る。若し肯て出馬を給は、無事の後は必ず大王の幕下に屬し、毎月進貢を獻すべしと、李忠周通懇懇に啓上し奉る。願くは仁慈を垂給へとて書簡を呈す。楊志が云、各々山陣を守て今専ら防ぎを設くる時節なれば、稀にも人馬の力を勞し難く、本援兵を出すまじと思へ共、第一は豪傑の名を腐さんことを忍す。第二は官軍もし桃花山を破らば、我山陣をも軽く見ん。是所謂唇亡びて齒寒しと云、虞虢二國の譬に等し。此度は張青、孫二娘、施恩、曹正四人を留めて山陣を守らせ、我輩三人自ら五百の人數を引て、桃花山を援ふべしとて已に人馬を催し、使には速に救兵を向べしとの返簡を渡し、早々回らしめ、引續いて三頭領人數を率し山を下り、桃花山へ向ひける。扱李忠は二龍山の消息を聞て大に悦

び、自ら千百の人馬を率して馳せ下り、先づ呼延灼が陣に突かゝる。呼延灼これを見て牙を噛み齒を切り、彼鐵の棒を輪して陣前に進み出で、直ちに李忠を迎へ相戦ふ。李忠は祖父より武藝を業として、名高き勇士なりしかども、呼延灼が武藝には大に劣り、纔か十合ばかり戦ひしに、はや力衰へ急に逃走る。呼延灼これを見て、汝何國に逃んやと、後に暮がひ追來り、漸山の腰に至りしに、小霸王周通木石を雨のごとく打下しければ、呼延灼進み上ること能はず、竟に馬を回し山を下りける處に、軍中大に騒ぎしかば、呼延灼其故を問ふに、後軍答へて云、遙か後へより、一彪の軍馬飛ぶがごとく馳來る。呼延灼是を聞き、後軍に繞り出て望みるに、當先に一人の大和尚一疋の白馬に乗て跑來り、恰も猛虎の吼るが如く大音聲に呼はりけるは、汝梁山泊に追散されたる敗軍、いかにぞ敢て我輩を犯さんと欲するや。呼延灼大に怒り、鐵棒を輪し馬を飛ばせて打てかゝる。魯智深も同じく鐵禪杖を揮つて相迎へ、互に龍の勢ひ虎の勇をなして軍器を交へ、一往一來秘術を盡して戦ひけるに、精神ますます盛んにして、呼はる聲は山谷に響かせしかば、敵親方相共にこれを見て、當世の勇士誰かよく此兩將に如んやと、各々舌を揮ひ汗を捏つて、心を驚しむるばかりなり。已にして戦ひ八十餘合に至れ共、兩將少しも疲れず雌雄分たざりしかば、呼延灼心中に想ふやう、此和尚はもといかなる出生の者なれば、かくのごとき大勇ありや。是必らず凡人にあらじと、又十合計り戦ひし處に、兩軍一度に一向金を鳴しければ、兩將先づ戦を休本陣に馳回り、暫く休息し呼延灼又進み出で大に呼り

罵りけるは、賊和尚早く出て勝負を決せよ。智深焦燥て跑出んとせし處に、青面獸楊志馬を飛せて馳出で和尚先づ休み給へ、我これを活捉んと、刀を振て呼延灼に斬てかゝる。呼延灼これを迎へて馬を交へ、又兩將勇を奮ひ力を盡し、戰已に六十餘合に至れ共、勝負いまだ決せず。呼延灼又密に想道、此賊も同じく萬夫不當の勇あり。いかんぞ此山陣に、是等兩人のごとき豪傑ありや、是必定有名の剛の者ならんとて、又七八合戦ひけるに、楊志も私かに呼延灼が武藝の、尋常ならざるを見て深く心中に感じ、馬を勒へて引回しければ、呼延灼も敢て追はず、共に兵を收め本陣に引取りけり。魯智深は楊志武行者と商議して云けるは、我輩初めて此處に至り、敵陣と近く陣を對するに宜しからず、且づ二十里引退ぞいて陣を取り、明日再び勝負を決すべしとて、遂に兵を收めて山崗の下に屯しぬ。扱呼延灼は鬱々として心中に想ひけるは、我は只一攻に破つて賊を生捉んと圖りしに、豈知らん、彼ら兩人がごとき敵に遇はんとは。是都て我命の拙き所なりと、只顧歎息して居ける處に、慕容知府使者を馳せて云けるは、將軍早々兵を引回し且城を守り給へ。今白虎山の強賊孔明孔亮人馬を領し馳せ來り、擅に糧を借んと欲す。恐らくは誤らあらん。急ぎ歸陣有るべしと催促したりしかば、呼延灼これを聞て幸ひ此便機に乗じ、此夜三軍を引て青州に歸りけり。翌日魯智深、楊志、武行者は各兵を引て喊き叫んで攻來りけるに、敵の陣屋には只一人の兵もなかりけり。魯智深是を見て大に愕し處に、李忠周通兵を領し山を下り、恭しく三人の英雄を請て山陣に上り、山海の珍物品々を設け、尤

も豊かに款待けり。扱呼延灼は兵を引て城下に至りけるに、はや一彪の軍馬來る。此大將は白虎山下なる孔太公が男、毛頭星孔明、獨火星孔亮なり。此兄弟向に同村の富貴人と争ひを惹出し、遂に富貴人が一家の人を斬殺して白虎山に上り、今已に七八百人の衆を集めて山陣を守る。青州城には彼が叔父孔賓といふものありけるが、慕容知府に生捉れ、入牢しけるゆゑ、孔明兄弟これを救はんがため、此度兵を起して、青州に推寄、遂に呼延灼が兵に行遇て、互に喊の聲を合せて戦を挑む。呼延灼これを見て、馬を躍らせ棒を輪して陣前に馳せ出でしに、慕容知府は城樓の上にて戦を一覽す。孔明鎗を燃つて呼延灼を迎へ、兩將勇を振つて相戦ひ、漸々二十餘合に至りしかば、呼延灼暗に知府が前にて武勇を現はさんと思ひ、頓て孔明が擲鎗を打落して、左の手を伸し、遂に孔明を馬上にて活捉けり。孔亮これを見て突出しかども、呼延灼に敵すること能はず、急に馬を引回し逃げ走る。知府城樓に在てこれを見るに、呼延灼兵を引て追蒐小賊百十餘人を生捉て、其餘は四面八方へ打散せり。孔亮は這々の體にて命を脱れ、其夜は敗軍少しを收めて、古廟の内に歇みけり。呼延灼は孔明を活捉て城中に入りしかば、知府大に悦び先づ孔明を牢中に遣はして、孔賓と一處に擲ぬ。知府又呼延灼が戰勞を慰さめ、今日すみやかに孔明を捉へたるを稱美し、且つ桃花山の消息を問ければ、呼延灼答へて云、桃花山の賊を捉へんは、囊の内を探つて物を取るがごとくなりしか共、又一夥の賊兵來て戰を助けしゆゑ、未だ彼を生捉ず。彼賊兵の大將、一人は大和尚、一人は大漢子なりけるが、某彼兩人

と兩度まで戦ひたれ共、各勝負を分たざりしなり。彼兩賊が武藝尋常ならず、定めて縁故ある輩ならん。知府が云、其和尚は延安府老种経略が幕下の提轄、魯達と云ひし者なり。今は髪を落して僧となり、其の名を花和尚魯智深と號す。又彼大漢子は東京殿帥府の制使官、青面獸楊志と云者なり。又一人の行者武松と云ものあり。是は則ち景陽岡の上にて、猛虎を拳殺したる武都頭なり。此の三人かくのごとく強勇にして、二龍山に陣を設け、専ら賊威を振うて官府を蔑如にす。向にも數度兵を發して攻めさせけれ共、彼三人に敵すること能はず、却て五七百の官軍を討取れぬ。此故にいまだ彼等を生捉す。呼延灼が云、某昨日彼等が武藝の精熟したるを見て、必定有名の豪傑ならんと思ひしに、果して魯達楊志にてありつるよな。誠に聞しに増る英雄なり。然れ共相公心を安んじ給へ。某已に彼等が武藝を看破せし處あり。近日一々生捉て尊覽に入奉らん。知府是を聞いて大に悦び、種々珍物を累ねて呼延灼を款待、又若干の酒食を以て三軍を賞しけり。翌日孔亮は敗軍を引て馳せ行ける處に、林の中より一彪の人馬進み出で、當先に一人の大將あり。孔亮これをみるに、頭陀武行者なりしかば、忽ち馬より飛び下り拜を行つて云けるは、分手以來恙がなきや。武行者急に禮を回して云、足下兄弟兩人は白虎山に在陣を守り給ふと聞しゆゑ、幾度か訪んことを欲すれ共、第一は山を下ることを得ず。第二は路次不順なるに依て、空しく疎遠に打過ぬ。今日は又何等の事有て、此邊に出馬し給ひぬるや。孔亮答へて、叔父孔賓を救はんとして、兄孔明が活捉れしことを、一々詳に語りけ

るに、武松が云、足下先づ心を惱まし給ふことなけれ。我今七人の豪傑と義を結んで二龍山に在り。此度桃花山の李忠周通官軍の緊しく襲ふが故に、救ひの兵を我輩に求めけるゆゑ、魯、楊、兩頭領は我より先に兵を引て馳來り、昨日呼延灼と鋒を交へて終日戦しか共、いまだ勝負決せざりし處に、呼延灼は昨夜兵を引て青州に回りぬ。李忠等是を悦こんで、我等三人を山陣に請て響應し、即ち呼延灼が帝より拜領したる名馬を、桃花山に偷み取て置きけるを、今日我輩に送りしゆゑ、我先づ是を率せて二龍山に歸る。魯楊兩公は小刻後より回らんとす。我れ足下のことを彼兩人に告げ、再び兵を起して、青州城を攻破り、速に足下の叔父兩人を救へし。孔亮是を聞て大に悦び、再拜して感謝しぬ。武松此處に留つて暫らく待ちけるに、果して魯智深楊志轡を並べて已に武松が前に至りしかば、武松則ち孔亮を引て兩人に見えしめ、詳に告げて云けるは、我向に宋江と、もに此孔亮が家に逗留して、多く懇情を蒙りぬ。今彼叔父兩人を青州に捉はれ、自らは救はん力なし。我が輩宜しく義を顧りみ、二龍山、桃花山、白虎山、此三山の勢を集めて、再び青州城を攻め、終に慕容知府を殺して、呼延灼を活捉、快よく孔賓孔明を救うて、猶城中の兵糧を奪ひ、各これを分て山陣の用に供ふべし。知らず兩公の尊意はいかん。魯智深が云、既に然らば急に人馬を催すべしとて、則ち桃花山に人を馳て此事を告げにけり。當時楊志が云けるは、青州の城柵堅固にして人馬強勇なるに、況んや又大剛の呼延灼を添しかば、尋常の敵と同じからず。某自ら威風を減すに似たれ共、愈青州を攻めんとす

らば、我一言に順ひ給へ。武行者問て云、楊公何等の良計ありや、願くは是を承はらん。楊志が云、青州城を打たんに須く大軍を催すべし。我聞く梁山泊の及時雨宋公明は、智仁勇を兼たる良將なり。況んや呼延灼とは仇ありければ、此節宋公明の人馬を借るべし。我輩は先づ三山の人馬を一ツに合せて、青州城を競はん間、孔亮は自ら梁山泊に上り、急ぎ宋公明の合力を請て、共に青州を攻めさしめ給へ。宋公明は原來孔亮兄弟とは交り睦じきことなれば、必ず救兵を出すことあらん。唯しらす列位の所存はいかんと理論に及び、先づ孔亮共に陣取て居たりけり。

三山義を聚て青州を打つ

二龍山の頭領共商議に及び、魯智深が云、今日も人あつて宋公明の徳を稱し、明日も人あつて宋公明の徳を稱す。誠に宋公明の大名を聞くこと、恰も雷の耳に轟がごとし。此人必然當世の義士ならん。かるがゆるに天下の人其名をしらすと云ふことなし。前番彼人花榮と共に清風山に居給ひし時、我已に尋ね行かんとせし處に、はや清風山を棄て、行方知らずと聞きしゆる、我終に止て未だ相まみえず。孔亮いよく叔兄兩人を救はん欲ひ給はば、親自梁山泊に赴きて、宋公明を請來り給へ。我輩は此處に在て専ら消息を待ち、共に青州を攻落し、足下兄弟が恨を雪ぐべし。孔亮これ聞いて大に悦び、手勢ことごとく魯智深に預け、己は一人の兵を引て遂に梁山泊へ進發す。魯智深等三人は、又施恩曹正并に二三百の兵を呼下し、軍中に加へけり。扱李忠周通は、魯智深が招きに應じて山陣の兵を

催し、只四五十人の小賊を留めて山を守らせ、其餘の人馬はことごとく引て山を下り、終に智深が兵と一處に會合せり。孔亮は此日青州を離れ急ぎしかば、不日に李立が店に至りて、梁山泊の道を問ひけるに、李立は此體を見て、必ず蹊蹶あらんと推察し、則ち孔亮に答へて云ひけるは、足下梁山泊の路を問ひ給ひて、何の事ありや。また何れの處より至れる人なるぞ。孔亮が云、某は青州より來れり。山陣に識人有てこれを訪らふ。李立が云、山陣には都て諸豪傑居住す。汝何ぞ能行んや。孔亮が云、某則ち宋大王を尋ねんと欲す。李立が云、足下已に宋頭領を訪ふ人ならば、先づ後堂に入て歇み給へとて、種々款待ければ、孔亮深くこれを謝し、一刻も早く宋頭領にまみえんことを願けるに、李立則ち孔亮を請うて、共に小船に乗直に金沙灘に至つて岸に上り、遂に關前を過ぎて行く處に、宋江は是を聞いて自ら此邊に出でて迎へしかば、孔亮已に宋江に見え、地上に跪きて大に哭く。宋江問て云、足下心中に何等の難義有てかく哭き給ふや。宜しく我に告げ給へ。我水火を避すして、足下の難を救ふべし。孔亮が云、某宋君に別れて後は老父も已に相果ぬ。然る處に兄孔明不圖同村の富貴人と争を惹引し、彼が一家盡く殺害し白虎山に逃上り、已に六七百の兵を聚めて山陣を守り居ける處に、叔父孔賓青州の慕容知府に捉はれ入牢しけるゆる、某兄弟これを救はんと圖り、青州を攻めけるに、彼呼延灼に孔明を生捉れ叔父をも救ひ得ず、剩へ兄を捉はれ、某深くこれを恨みて戦ひしか共、呼延灼に敵すること能はずして大に敗北せり。翌日半途に於て武行者に遇ひける處に、彼某を引て兩人の

頭領、花和尚魯智深、青面獸楊志にまみえしむ。彼兩人一たびまみえて、しかも舊友のごとく、懇情を垂れ、兄孔明を救はん計を商議して、魯楊兩頭領并に桃花山の李忠周通、總て三山の人馬を以て青州を打んと欲し、猶宋君の救を冀ひ、城を夾んで攻むべしと則ち某を遣はしぬ。伏して望むらくは、宋君先父の情を顧み給ひて救ひを垂給へ。某齒を没るまで此洪恩を忘るまじ。宋江が云、これ尤も難からず。足下先づ心を安んじて、晁天王にまみえ給へ。我宜しく晁天王に告て、共に商議を遂げんと、即ち孔亮を引て、晁蓋、吳用、公孫勝、并に諸頭領に見えしめ、呼延灼が遂に青州に落行きて、慕容知府が幕下に屬し、今孔明を生捉し故、孔亮來て救ひを求むる始終詳に語りしかば、晁蓋是を聞て云、魯楊兩人は孔亮とは未だ親しからざるとなるに、尙ほ且つ兵を起し、孔明を救はん」と圖る。況んや宋頭領は原來孔亮が家とは舊知なれば、いかんぞこれを救はざらん。然れ共宋頭領は數度の戰に疲れも有るべければ、此度は先陣を守り休息有るべし。我自ら足下に替つて出馬せん。宋江が云、晁君は山陣の主なるに、豈輕々しく出陣し給はんや。殊に此度の事は某が身に干りし上は、晁君もし某に替り給ふ時は、孔亮ならびに魯楊兩人が想はくも悪かりなん。願くは某馳向はん。數人の頭領同じく山を下て助け給はんや。諸頭領是を聞き、一度に答て云けるは、某等都て宋君に従ひ犬馬の勞を盡すべし。宋江大に悦び、此日は先づ酒宴を設て孔亮を款待、宋江又鐵面孔目表宣に命じて人馬を催させ、則ち五軍に分つて山を下らんと議定せり。花榮、秦明、燕順、王矮虎を先陣とし、

穆弘、楊雄、解珍、解寶を第二陣とし、宋江、吳用、呂方、郭盛を中軍とし、朱同、柴進、李俊、張橫を第四陣とし、孫立、楊林、歐鵬、凌振を後陣とす。此五軍の頭領總て二十人なり。共に三千の人馬を領す。其餘の頭領は皆晁蓋と同じく山陣を守る。翌日五更の時分に宋江はや晁蓋に別れ、孔亮と共に山を下る。總て五軍三千の人馬終道秋毫も居民を犯さずして、已に青州に至りけり。孔亮は先づ魯智深が陣屋に來て斯と告げるに、諸豪傑都て陣外に出て相迎ふ。宋江が中軍已に至りしかば、武行者遂に魯智深、楊志、李忠、周通、施恩、曹正等を引て宋江に見しむる。宋江先づ智深を讓りて、坐せしめける處に、智深が云、我久しく宋君の大名を聞きしかども、縁熟せずして未だ尊顔を拜せざりしに、今日幸ひに謁を下風に取て、喜望外に出でぬ。宋江答へて云、某何ぞ道ふに足らんや。我がつて和尚の清徳を聞及び、常に渴想に逼りしに、今日法顔を拜し、奚ぞ齋齋躍のみならんや。楊志も又た再拜して云けるは、某昔日梁山泊を過りし時、豪傑等某を山陣に留めしか共、其刻は頗る所存あつて山陣に留まり得ざりしが、今日天の憐みを蒙ふりて宋君を拜し、誠に感悦極まりなし。宋江答へて云、楊制使の威名は四海に流れ人皆仰慕ふ。我今日却て相見の晩きを恨むるのみ。向後彌心を同じうし力を併せて、共に大義に聚まるべしと。衆皆大に悦びけり。此時魯智深は美々しく酒宴を設け、宋江以下の諸豪傑を款待、一々對面を遂げにける。翌日宋江青州の戦ひ勝負いかんと問ひけるに、楊志答へて云、孔亮已に梁山泊に馳せて後、約莫六七度戦ひしか共、各勝負いまだ決せず。今

青州城には、唯呼延灼が武勇を頼むのみ。もし彼をだに生捉なば、城を破らんこと旦夕にあり。吳學究阿々と笑つて云、彼を活捕んには、力を用ひずして、計を用ひば可ならん。宋江問て云、軍師何分の計あつて、彼を活捕給はんや。吳用が云、今彼を活捕には此の如くくと低言しかば、宋江大に悦び、此策至て神妙なりとて、此日人馬手分を定め、翌朝遂に兵を起して城下に至り、四面を取圍んで鼓を播ち旗を翻し、喊の聲は天に震ひ地に響く。慕容知府はこれ聞き、急ぎ呼延灼と商議して云けるは、今日又梁山泊の宋江自ら軍馬を引て至れり。何を以てこれを攔ざらんや。呼延灼が云、相公先づ心を安んじ給へ。彼此處に至て地の利を失なひ、畢竟何事をか做出さん。彼等は皆水泊の内にては、戦を能すといへども、陸上の軍には怖るゝに足らず、某一々これを活捕らん。相公城樓に上つて戦を一覽し給へとて、遂に衣甲を着し鐵の棒を提さげ、一千の人馬を引て城外に突出けるに、宋江が陣中より一人の大將進み出で、高聲に呼はり罵しつて云けるは、汝民を害する賊官、我々頭を刎て街に示衆べし。知府此大將を見るに、乃ち霹靂火秦明なりしかば、忽然としく大に罵つて云、汝潑賊多年朝廷の高祿を食み、今日聖恩を背いて朝敵となること、最も是れ重罪なり。我先づ汝を捉へて骨を抜かんとて、呼延灼に下知しければ、呼延灼馬を躍らせ鐵棒を揮て直に秦明に打てかゝる。秦明も同じく狼牙棒を輪して相迎へ、兩將精神を揮うて四五十合戦ひしか共、勝負いまだ分たざりしかば、知府是を見て、呼延灼もし誤もやあらんとて、急に金をならしけるに、呼延灼遂に秦明を捨て城中に

引入りけり。秦明敢て是を追ず、再び本陣に回りけり。宋江先づ十五里退いて陣を列ねけり。呼延灼は知府に對して云けるは、某已に秦明を活捕んと圖りしに、何ゆゑ金を鳴して軍を收め給ひぬるや。知府が云、將軍久しく戦ひ給ひし故、恐らくは疲れもやあらんと思ひ、先づ金を鳴し暫らく休めしめ申したり。秦明は原原幕下の統制使の官にてありしかども、花榮と一同に我に背いて梁山泊に入りぬ。彼亦輕々しく敵すべからず。呼延灼が云、相公心を安んじ給へ。某必定彼反賊を捉ふべし。某今彼と戦ひし時、彼棒法少し亂れぬ。明日は立處に彼を生捉か、若しくは打殺して相公の尊覽に呈すべし。知府が云、將軍果して此のごとき豪傑なるに、明日は先づ一筋の道を切開いて、三人の使者を出ださしめ給へ。一人は東京に遣はして援兵を求めさせ、兩人は隣國へ馳て兵を借らしめ、内外より挾んで攻べし。呼延灼これを聞て、相公の高論尤も明なりと同じければ、知府頓て救ひを求むるの文書を修へて、これを三人の使者に與へけり。翌日未明に一人の軍士來て呼延灼に告げけるは、城の北門の外に三騎の敵在て私に城を望み見る。中なる敵は紅の袍を着し白馬に乗ぬ。右に勒へし敵は正しく小李廣花榮なり。左に在る敵は長衣を着し、羽の團扇を持ちぬ。呼延灼が云、紅の袍を着したるは賊首宋江ならん。長衣を穿たるは、軍師吳用にてぞ有るべし。汝ら先づ渠等を驚かしむることなかれ。我速に百餘騎の軍馬を引て彼等三人を生捉らんとて、遂に軍馬を催し、暗かに城の北門より打出る。宋江、吳用、花榮三人は一向頭を擡げ、城を望み居ける處に、呼延灼勇を振うて近々追至

りしかば、宋江等三人は等しく木蔭に立倚て、馬を勒へて居たるに、呼延灼ははや宋江が面前に跑来りければ、俄に喊の聲大いに起る。呼延灼これを見て急ぎ馳回らんとせし處に、豈知らんや、陷坑の上を踏で馬人ともに坑の内に陥入りけり。此時兩邊より五六十の兵出て、遂に呼延灼を生捉しかば、彼百餘騎の馬軍共は花榮に散々に射られ、四方八方に逃げ散りけり。宋江は已に本陣に歸りし處に、兵ども頓て呼延灼を高手小手に嚴しく縛り引出す。宋江はしく座を立て、絆の索を解しめ、自ら呼延灼が手を携さへて帳中に入り、慇懃に禮を行なうて、呼延灼を拜しければ、呼延灼慌て忙き拜を回して云けるは、宋將軍何故我を拜し給ふや。宋江が云、某豈敢て朝廷に背かんや。只官府より世を逼められ、已むことを得ずして梁山泊に籠城す。我輩都て心を一ツにして、朝廷の御赦免を待のみなり。想はず這般將軍の威風を犯して、多く罪を蒙りぬ。願くばこれを免し給へ。呼延灼が云、某は擒となりし者なれば、萬死するとも猶輕からんに、何ぞよく將軍の重禮に當らんや。宋江が云、某何らの者なれば安りに將軍の生命を害せんや。某は只心事を將軍に告げて、議を求めんと欲す。呼延灼が云、宋君今更我に議を求めんと云給ふは、我を東京に回して御赦免のことを、帝に奏聞あらしめんと欲し給ふならんか。宋江が云、將軍いかにぞよく東京に回り給はんや。彼太尉高俅は原來氣量窄き鼠輩にして、人の大恩を忘れ人の小過を記ふ。將軍今若干の軍馬錢糧を失なひ給ひぬるに、彼豈あへて將軍を罪せざらんや。今韓滔、彭玘、凌振等も已に山陣に止つて、大義に聚りし間、將軍も曲て某らと共に

に梁山泊に馬を歇め給はんや。然らば我上座を將軍に譲りて尊敬を盡すべし。呼延灼これを聞て、良久しく沈吟して在りけるが、忽ち地上に跪いて云、某國の恩を忘れぬるにはあらざれ共、實に宋君の義氣を慕ふ。今日より宋君に隨順して、驚鈍の力を盡すべし。彌く深く憐みを垂給へ。宋江吳用ならびに諸頭領此言を聞て大に悦び、此日は先づ酒宴を設けて、各呼延灼を慰さめけり。頓て青州城を攻めて孔賓孔明を救ふや否や、次卷に明らかなり。



五編卷之九

衆虎心を同じして水泊に歸す

宋江は呼延灼を請て諸頭領に遇しめ、又彼呼延灼が乗たる御賜の名馬は、李忠是を奪て魯智深に送りしか共、此度又乞ひ取つて、呼延灼に還しければ、大に是を悦び謝しけり。諸豪傑再び孔明を救はん計を商議しければ、軍師吳用が云、もし呼延灼將軍をして、城門を開かしめ、容易孔明を救はば、諸將の勞有るまじ。宋江是を聞き呼延灼に對して云けるは、我實に城を落さんことを貪るにはあらね共、今孔明孔賓青州の牢中に在つて、縲綬の危に遇り。この故に我是を救はんと欲し、心痛こゝにあり。若し將軍の計にて城門を開かしめ給はば、彼等を救はんこと尤も易からん。呼延灼が云、我已に宋君の情に一命を饒されしかば、理まさに力を盡すべきことなるに、いかなぞ是を辭せんやとて、其夜秦明、花榮、孫立、燕順、呂方、郭盛、解珍、解寶、歐鵬、王英等十人を軍士の形に打立てて、呼延灼これを引、ともに二十一騎直に城の邊に至つて、大に呼つて云、早く城門を開け。呼延灼一命を脱れて逃回り候ぞ。城兵共呼延灼が聲を聞いて慕容知府に斯と告げるに、知府は呼延灼を擒にせられて、憂居たる折節なりしかば、今此言を聞て大に悦び、慌て忙き城樓に上つて城外を望み見るに、總て十

餘騎轡を並べて相勸へたり。知府いまだ其面をば見しらざりしか共、只呼延灼が聲を聞き知り、則ち問うて云ひけるは、將軍今般敵の謀に中て擒となり、いかゞして再び回りぬるや。呼延灼が云、某向に陥坑に陥され、捉はれしかども、幸なるかな我が手下に在りし兵、今宋江に降参して陣中にありけるが、我活捉れたるを見て、暗に此馬を盗んで某に與へ、共に陣中を逃去つて、同じくこゝに至れり。知府これを聞て城樓を下り、馬に乗り自ら城門の邊に來て、軍士に城戸を開かせければ、呼延灼遂に十人の豪傑を引て城中に跑入し處に、秦明早くも棒を擧げて知府を馬より下に打落しぬ。解珍、解寶は火を放つて城中を燒拂ふ。歐鵬王英は官軍等を砍散す。此時宋江は城中に火の起りたるを見て三軍を引て馳せ來り、一齊に咄と城内に亂れ入り、宋江急に號令を傳へて居民を撫しめ、先づ牢中より孔明叔姪を救ひ出し、庫の内なる金銀米錢ことごとく奪ひ取つて城外に運ばせ、慕容知府が眷屬一首を刎にけり。翌日宋江火難に遭たる百姓共には、金銀を分かち與へ、其燃眉ごとき難を救ひ、又得たる處の兵糧は都て六百車、其外馬物の具を得たるは、其數を知るべからず。宋江大に三軍を賞せしめ、即日歸陣と聞えしかば、魯智深、李忠、孔明等、三山の頭領も共に梁山泊に加はるべしと議定して、各山陣の人馬ならびに兵糧等を拾收め、同じく宋江に隨て梁山泊へと急ぎけり。宋江三軍に命じて終道民を犯すことなかりしかば、到る處の百姓共都て老を助け、幼きを抱いて拜迎す。宋江是を見て心中に悦こび、一向三軍を催促して路を急ぎしかば、不日に梁山泊の邊に至りけるに、水軍の

頭領等船を具へて相迎ふ。晁蓋は自から諸豪傑と共に、金沙灘に至つて宋江等を迎へ、直ちに聚義廳に至りて、各座を列ねし處に、呼延灼、魯智深、楊志、武松、施恩、曹正、張青、孫二娘、李忠、周通、孔明、孔亮、都て十二人の新參頭領は、晁蓋を始めとして、山陣の諸頭領に一々對面し、各悦ぶこと限りなし。林冲昔日魯智深に救はれたることを語つて、深くこれを謝しけるに、魯智深が云、我彼日滄州に於て、教頭に別れてより以來、久しく音耗をも通せざりけるに、今日再び相違ふこと、縁深きゆゑなりとて相互に悦びけり。晁蓋又楊志に對して、當初黃泥岡にて生辰の禮物を奪ひ取りしことを語り、吳用、公孫勝、劉唐、三阮兄弟、白勝迄、一笑を催はしけり。扱宋江は這回又十二人の豪傑を得て、心中益喜悅し、則ち湯隆に命じて若干の軍器を造らしめ、侯健には三才九曜、四斗五方二十八宿の旗を造らしめ、山陣の四方には高く臺を造らしめ、西南の兩路には又二間の酒店を作り添て、張青孫二娘に南路の酒店を守らせ、孫新顧大嫂に西路の酒店を守らせ、専ら世間の善惡吉凶を探聽しめ、天下の英雄を招かしむ。此より梁山泊日々に隆んじて、諸頭領各嚴密に守りけり。已に數月過しける處に、花和尚魯智深宋江に語つて云けるは、我等一人の朋友有りけるが、其名を九紋龍史進と號して、今は則ち華州華陰縣少華山に住す。此山に原來三人の頭領あり。一人は神機軍師朱武、一人は跳澗虎陳達、一人は白花蛇楊春と申す。史進此三人の者と、もに、人馬を集めて少華山を守る。我先に瓦罐寺に於て頗る難義致せし時、史進が助けに依つて難を脱かれぬ。これによつて我

朝夕史進がことを渴想す。此節我少華山に馳せて彼を訪らひ、宜しく四人の者を誘引して山陣に歸るべし。しらす尊君の尊意はいかん。宋江が云、我も曾て九紋龍が雷名を聞けり。若し和尚彼地に馳せて彼等四人を誘引し給はば、是十分の福ひならん。武行者を伴なうて行き給へ。武行者是を聞て、我和尚に隨て馳行べしと領承したりければ、此日魯智深武行者と、もに旅粧を調へ、諸頭領に別れて山を下り、直に華陰縣を望んで急ぎけり。扱宋江は魯智深武行者兩人がことを、深く思うて心を安んぜず。則ち戴宗を馳せて、兩人が消息を探聽しめけり。魯智深武行者は、不日に少華山の麓に至りけるに、小賊等路を攔て問ひけるは、汝兩人の僧は何ゆゑ此處に至りぬるや。武松が云、此山陣に九紋龍史進と云人ありや。小賊が云、汝兩人若し史大王を訪ひ給ふ人ならば、少く此處に在つて待ち給へ。某山陣に上つて頭領に告しらせて來るべし。武行者が云、汝去て頭領に告んには、魯智深來て史進を訪ふと云べし。小賊是を聞て山陣に上りけるに、少刻神機軍師朱武ならびに跳澗虎陳達、白花蛇楊春、此三人は馬を下りて魯智深等兩人を迎へ、しかも獨り史進は見えざりければ、魯智深問て云、史大郎は何れにありや。朱武恭しく禮をなして云けるは、和尚は延安府の魯提轄にてはあらずや。智深が云、我則ち魯提轄なり。又此行者は景陽岡にて、虎を殺したる武松と云ものなり。三人の頭領これを見て忽ち地上に跪いて申けるは、某ら兩位の大名を聞くこと久し。此間には二龍山に居給ふと沙汰有りつるに、今日は何故此處に至り給ひぬるや。智深が云、我が輩今は二龍山を棄て梁山泊に登り

ぬ。我此回史大郎に遇はんが爲特々此處に至れり。朱武が云、已にかくのごとくば先づ山陣に上り給へ。某詳に様子を語り申さん。魯智深が云、様子あらば此處にて語るとも何の妨かあらん。武松も又三人の頭領に對して云けるは、和尚は原來急性の人なるに、様子あらば早々語り候はんや。朱武が云、某ら三人此山陣を守り居たりし處に、史大郎加はり候て後は殊更繁昌しけれ共、此比史大郎は料らざる禍を被りて山陣にはあらず。其禍の來歴はいかゞなれば、史大郎の舊知北京大明の人の賀太守は原蔡太師が門人にして、貪欲無道の者なりけるが、不圖彼玉嬌枝が容儀好を見て、早速妾て妾にせんと欲し、再三王義にこれを議りけれども、王義これに隨はざりしかば、賀太守大に怒り、強に奪ひ取つて妾とし、剩へ王義を無實の罪に陥し、遠國に流さんとしける時、兩人の下官王義を監押して、此山の下を過りし處に、想はず史大郎に遇しかば、王義大に悦び、事の次第一々詳に告げけるに、史大郎これを聞き甚だ憤り、即ち兩人の下官を殺して王義を救ひ、猶賀太守を殺さんとて、直に州裡に馳けるに、却て賀太守に曉られ、遂に擒となりて牢中に在り。太守又人馬を發し、此山陣をも攻破らんと欲す。此ゆゑに某ら殊に難義なり。魯智深是を聞いて怒り心頭より起り、忽ち牙を咬齒を切つて、罵しり云けるは、彼賊官かくのごとく非道を行ふや、我誓て彼を殺さん。朱武が云、和尚先づ山陣に上つて商議し給へとて、遂に魯智深武行者兩人を引いて、山陣に上りければ、王義も

同じく魯智深にまみえて、賀太守が非道をなせしこと、一々詳に語りけり。魯智深が云、我明日州裡に馳て賀太守を殺し、一害を除くべし。武松が云、我先づ和尚と急ぎ梁山泊に歸り、宋頭領に大軍を請て、華州を打破り、然して後史大郎を救ふべし。智深が云、我が輩山陣に歸つて再び來る日は、史進は早殺さるべし。後悔すとも何の益あらん。武松が云、縦ひ今賀太守を殺したり共、史進を救ひ出さんことは難からん。まづ宜しく怒りを息給へとて、再三再四頻りに諫めしかば、朱武等三人の頭領も同じく諫めける處に、智深大に焦燥ていはく、汝三人かくのごとく懦弱なるに依て、史大郎を白と失なひぬ。我一人州裡に馳て史大郎を救ひ出さん。武行者も又梁山泊に歸ることなかれとて、其夜は各歇みけり。翌日魯智深戒刀を帶し、禪杖を提て華州城に馳せければ、武行者大に歎じて云、智深我が諫言を用ひずして、州裡に馳せしかば、必定誤ちあるべしとて、一向これを煩ひぬ。朱武暗かに物なれたる小賊を、智深が跡より華州に馳せて、消息を聞かしめけり。扱て又魯智深は、直ちに華州城に入り、賀太守が家を尋ねて一ツの橋を過ぎんとせし處に、街の人都在て云ひけるは、和尚先づ傍に避給へ。太守相公の來り給ふなり。智深是を聞いて想道、我正に太守を尋ねんとせしに、彼却て此處に來てわれに遇はば、自ら死を求むるに似たり。我早く彼に近寄頭を徹塵に打碎かんものをと、立住て望み見るに、橋の左右には處候の官ら十餘人、手ごとに軍器を提げ相隨がふ。魯智深これを見て心中に想ひけるは、我もし賀太守を打得ずんば、却て彼らに笑はれん。卒爾に手を下すべからず

とて、只願躊躇して在りしかば、賀太守驕の内より智深が動靜を見て、心中に深く是を疑がひ、已に橋を過て館に至り、則ち家人に命じて云けるは、今橋の上にありし大和尚、齋を施さんと思へば、汝馳せて誘引せよと仰せければ、家人命を奉はつて橋の上に至り、則ち智深に請て太守が旨を述べけるに、智深是を聞いて私に想道、我今手を下して彼を打んと闘りしか共、恐らくは大勢に開られ、誤まつこともあらんかと想ひ、暫らく控へける處に、彼却て我を乞ふは、豈彼が運の盡るにあらずやとて、早速使に隨て太守が館に至りけるに、太守は豫じめ家人等に仰せて計を調のへしめ、則ち智深に禪杖戒刀を除かせければ、智深初の間は承允せざりしか共、諸人都在て云けるは、和尚何ぞ禪杖戒刀を帯して後堂に入り給はんや。是出家の有るべきことにあらず。智深心中に想ふやう、縦ひ禪杖戒刀あらずとも、我此拳を以て太守を打殺さんに、何の難きことかあらんとて、頓て禪杖戒刀を棄て後堂に入りける處に、太守左右を招いてこれを活捉れと、いまだ呼りも終らざるに、總て五六十人の軍士、一度に出て智深に跳かゝる。智深元來眼明かに手早き達人なれば、左右に當て二十餘人まで踴倒しけれ共、遂に大勢に活捉れ空しく牙を咬むばかりなり。やがて魯智深を絆て塔の下に引出しければ、賀太守大に怒て、汝惡僧何れの所より來りたるや。智深が云、我に何の罪あつて斯く縛給ふや。太守が云、汝詐らずして實情を申せ、何ゆゑ擅まに我を殺さんと闘りけるぞ。智深が云、我は是出家なるに、汝いかんぞかくのごときことを我に問ひ給ふや。太守益怒つて、汝向に橋の上に至りし時、

禪杖を擧て我を打たんとせしが、又躊躇して遂に止めぬ。汝實落に白狀せよ。魯智深が云、我曾て汝を犯さざるに、汝何ぞ我を捉へ辜なき者を責むるや。太守罵つて云、汝が風俗模様偏に出家の體にあらず。汝は必定山野に棲む盜賊にてぞ有るらん。たゞし史進が爲に、仇を報はんと欲するや。汝もし白狀せずんば、痛く拷問せんとして、すでに左右を看丟けるに、智深大いに呼つて云、汝妄りに我佛體を打傷なふことなかれ。我は梁山泊の豪傑魯智深と云知識なり。我は死すとも悔まじけれ共、若し宋公明入馬を引て寄來らば、汝が眷屬都て誅戮を免かるまじ。賀太守是を聞て大に怒り、先づ魯智深を數十鞭打しめ牢中に入置けり。此沙汰華州城に専らなりしかば、彼小賊這消息を聞き、飛ぶがごとく少華山に馳歸り、斯くと訴へけるに、武松是を聞て大に驚ろき、我智深と兩人此處に至り、已に一人を失つて何の面目かあらん。此上は我も又死を致さんのみなりとて、只願憂て居ける處に、一人の小賊來て云、梁山泊の頭領神行太保戴宗と云人、今麓に至り給ひぬと報じければ、武松急に山を下つて相迎へ、直ちに聚義廳に延て朱武ら三人に逢はしめ、魯智深諫言を容ひずして、誤りありしことを具に語りければ、戴宗大に驚て云、已にかくあらば、我は先づ一刻も早く歸りて、晁宋兩頭領に報げ、速に軍兵を發し、魯智深史大郎兩人を救ふべし。武松が云、我は猶ほ此處に在つて待ち申さん。公は早く歸りて急に來り給へ。戴宗即時に山を下り、神行の法をなして馳せければ、纔か三日の内に梁山泊に至りて、晁宋兩人にまみえて、魯智深獨り自ら史進を救はんとして、却て捉はれることを報